



史跡

大原廃寺発掘調査報告書

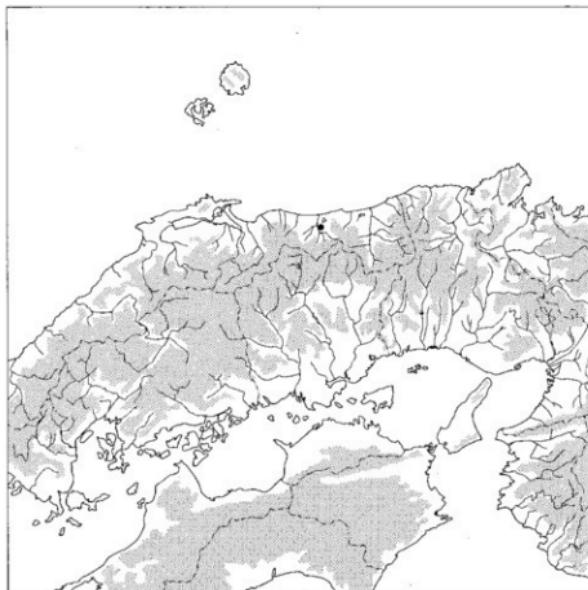
平成10年度

倉吉市教育委員会

史跡

おお はら

大原廃寺発掘調査報告書



遺跡略号 6U00

平成10年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572478

序

この報告書は、鳥取県倉吉市大原に所在する、史跡大原庵寺の発掘調査を実施した記録です。

大原庵寺は、昭和9年に塔心礎が発見され、翌年に大原庵寺塔跡として国史跡に指定されました。長らく未発掘でしたが、昭和59年度に農道新設計画に伴う発掘調査を実施して以来、都合6次にわたり発掘調査を行いました。これまでの調査によって主要伽藍の塔、金堂、講堂の概要を確認し、金堂の真裏に講堂を配置する変則的な法起寺式の伽藍であることが判明いたしました。

今回の報告書は、第6次調査の報告と共に、概報あるいは市内遺跡として報告済の第1次から第5次の遺物整理と遺構の再検討を行い、まとめました。未だ解明すべき課題も残っていますが、これらの成果は古代地方寺院を考える上で貴重な資料となるものと考えます。

最後となりましたが、調査に際しましてご協力いただいた大原地区的皆様をはじめ、文化庁、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県理蔵文化財センター、そして発掘作業、内務整理作業に従事していただいた方々に対し、感謝の意を表するものです。

平成11年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足羽一昭

例　　言

1 本報告書は、平成10年度に倉吉市教育委員会が、史跡大原廃寺第6次調査として実施した発掘調査の記録と、第1次調査（昭和59年度）から第5次調査（平成8年度）までの調査結果と未整理の遺物を検討し、まとめたものである。

2 第6次調査の発掘調査団は次のような組織・編成である。（第1次調査から第5次調査の組織・編成は各報告書を参照のこと）

團　　長 足羽 一詔（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調査員 根鈴 輝雄（倉吉博物館主任学芸員） 真田 康幸（文化課課長補佐兼文化財係長）

森下 哲哉（文化財係主任） 根鈴智津子（文化財係主事）

加藤 誠司（文化財係主事） 岡本 智則（文化財係主事）

岡平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子

事務局 波田野頌二郎（教育次長） 山脇 将暉（教育次長兼文化課課長）

藤井 敬子（文化財係主任） 福澤 昌子（文化財係主事）

金田 朋子（臨時職員）

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松鶴あつ子・竹歳 晓子・山本 錦

3 現場での調査は第1次調査は森下、第2次調査は真田が担当し、森下・根鈴輝雄が補佐、第3次調査は真田と根鈴輝雄が担当し、第4次調査は真田、第5次調査は加藤が担当し岡平が補佐、第6次調査は加藤が担当した。

4 大原廃寺に関する指導を、第2次調査—文化庁・松村恵司氏（当時）、鳥取県文化財保護審議員・山本清氏（当時）、福田孝司氏、鳥取県埋蔵文化財センター、第3次調査—文化庁・須田勉氏（当時）、京都国立博物館・森郁夫氏（当時）、鳥取県文化財保護審議員・山本清氏（当時）、稻田孝司氏、鳥取県埋蔵文化財センター、第5次調査—文化庁・坂井秀彌氏、第6次調査—文化庁・岡村道雄氏、坂井秀彌氏、小池伸彦氏、帝塚山大学・森郁夫氏、岡山理科大学・亀田修一氏、鳥取県立博物館・岸本浩忠氏、東郷町教育委員会・宮川紳氏、各次において鳥取県教育委員会事務局文化課に賜った。記して謝意を表するものです。

5 遺構の図面整理は、加藤・松田・妻藤が行い、遺物の実測及び観察は森下・根鈴智津子・加藤・岡本・岡平、写真撮影は森下が担当し加藤・岡平が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が行った。

6 本書の執筆は各調査員が行った。文責は文末あるいは巻末に記した。編集は加藤・松田・世浪が担当した。

7 第1図（地形図）は、第2次調査時に株式会社ワールドに委託して作成した1:500の地形図を縮小・加筆したものである。

8 第2図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1:50,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。

9 掘図中の方位は、国土座標第V座標系の北を指す。遺跡付近の真北は、国土座標の北から約0.3° 東偏する。

10 遺物に付した記号・番号は本文・挿図・図版で統一している。

11 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本 文 目 次

I 調査経緯	1
II 位置と歴史的環境	2
III 第6次調査の概要	6
IV 遺跡の概要	8
1 遺構	8
2 遺物	20
V 考察	50
1 遺物	50
2 遺構	54
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 大原廃寺トレンチ配置図	3
第2図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	5
第3図 伯耆国古代寺院跡分布図	6
第4図 第5トレンチ平・断面図	7
第5図 地下式横穴遺構図	7
第6図 大原廃寺遺構全体図	11
第7図 塔・金堂遺構図	13
第8図 講堂遺構図	15
第9図 碇石建物遺構図	17
第10図 寺域西限の段平・断面図（第6次調査T1）	19
第11図 講堂の西側盛土平・断面図（第6次調査T2）	20
第12図 軒丸瓦 I ~ IV類	22
第13図 軒丸瓦 V ~ VII類	23
第14図 軒平瓦 I類	25
第15図 軒平瓦 II・III類	26
第16図 軒平瓦 IV・V類	27
第17図 丸瓦 1	28
第18図 丸瓦 2	29
第19図 丸瓦 3	30
第20図 平瓦 1	31
第21図 平瓦 2	32
第22図 平瓦 3	33
第23図 平瓦 4	34

第24図	平瓦 5	35
第25図	平瓦 6・面戸瓦・鷲尾	36
第26図	須恵器 1	39
第27図	須恵器 2	41
第28図	土師器 1	43
第29図	土師器 2	44
第30図	埴仏・塑像・泥塔・瓦塔	45
第31図	金属製品・関連遺物	48
第32図	ガラス玉・土製品・石製品	49

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡 調査区空中写真 調査区全景
- 図版 2 遺構 塔 塔基壇北東隅 塔東辺
- 図版 3 遺構 金堂 讲堂柱穴 P 4・P 5・P 6・P 7・P 8 讲堂柱穴 P 13・P 3・P 2・P 1・P 11
- 図版 4 遺構 讲堂基壇西辺 讲堂基壇北辺 讲堂北東整地層断面 讲堂 P 5断面 讲堂 P 8断面
- 図版 5 遺構 磁石建物西辺・庇部分 磁石建物北東 磁石建物 P 14根石 磁石建物西辺 P 7根石
磁石建物 P 11根石 磁石建物 P 2
- 図版 6 遺構 磁石建物 P 3・P 4 磁石建物 P 1 磁石 寺域西限の段 寺域西限の段断面
- 図版 7 遺構 塔の外東側落ち段・瓦溜 堅穴式住居SI04・溝SD04 地下式横穴
- 図版 8 遺物 軒丸瓦
- 図版 9 遺物 軒丸瓦
- 図版 10 遺物 軒平瓦
- 図版 11 遺物 平瓦・軒丸瓦製作技法
- 図版 12 遺物 須恵器
- 図版 13 遺物 土師器
- 図版 14 遺物 土師器
- 図版 15 遺物 埴仏・塑像・泥塔・瓦塔
- 図版 16 遺物 金属製品・関連遺物、ガラス玉、紡錘車、石製品

I 調査経緯

1) 研究略史

大原庵寺は、昭和9年11月20日に倉繁兵逸氏夫婦がごぼうの収穫中に塔心礎を発見して、当時の西郷小学校校長の伊佐田基蔵氏に連絡したことによって、その存在が明らかとなった。地元では、昔から寺跡の伝説があつて、付近で瓦が採取できることが知られていた。しかし、基壇状の高まりや礎石は不明で、それが古代寺院跡であるとの認識はされていなかった。翌年3月に文部省の上田三平氏等、5月に川勝政太郎氏の実況検分を受けて、昭和10年12月24日に大原庵寺塔跡として、大原字龜井谷口1203・1204番地の551m²が国の史跡に指定された。

なお、伊佐田基蔵氏等の主催する東伯史研究会が、川勝氏の検分時に指導を受けて簡単な発掘調査を行ったようだが、塔心礎以外の礎石は確認できなかつたという。これら、塔心礎の発見から史跡指定までの経過は、川勝氏が『史述と美術』34-5（1936年）に「大原庵寺塔址の指定に至るまで」として発表されている。

川勝氏の報告文以降、大原庵寺についての論稿は、「鳥取県文化財調査報告書第1集」（1960年）、「伯耆の古庵寺」（『千代川』6号 1968年）にあるが、遺構が塔心礎しか分からぬ当時の状況から、詳細なものではない。また、瓦については、調査員の一人である眞田廣幸が「奈良時代の伯耆地方に見られる軒瓦の様相」（『考古学雑誌』66-2 1980年）で触れている。

2) 第1次調査

大原庵寺は、昭和10年に国の史跡に指定されて以来発掘調査は実施されておらず、伽藍配置は不明のままであった。このため、地区住民は從来から、大原庵寺の実態解明とその顯彰に強い願望を寄せていた。

昭和60年1月、大原自治公民館館長から、大原庵寺塔心礎の東側5mを南北に貫く農道整備計画について倉吉市教育委員会に相談があった。このため倉吉市教育委員会は、関係機関と協議をした結果、急速、寺域確認を目的とする発掘調査を実施することになった。発掘調査は、塔心礎のある丘陵の縁辺部を中心トレーンを配して、同年3月4日から3月20日まで実施した。調査面積は約260m²である。

調査の結果、寺域を画する明確な遺構は確認できなかつた。（文献1）

3) 第2次調査

第1次調査後、地元と協議を行い、農道新設の計画を棚上げにした。しかし、農道新設の要望も強いため、大原庵寺の寺域、伽藍配置を明らかにして、遺跡保存の資料とするため発掘調査を実施した。発掘調査は、大原庵寺を中心とする南北300m×東西200mの範囲で1:500地形図を航空測量によって作成すること、塔心礎の周辺を調査し、塔跡の状況を確認することを主な目的として実施した。発掘調査は塔周辺を中心にして、昭和62年12月7日から昭和63年2月13日まで実施した。調査面積は280m²である。

調査の結果、塔跡の基壇北辺の一部分と北東隅の石列を確認した。また、航空測量により塔心礎のある平坦面の西側と南側にある段がそれぞれ直線的に延びて、南西隅で直角に折れ曲がることが分かり、寺域を画する人工的なカット面であると考えた。（文献2）

4) 第3次調査

規模と構造の不明確な塔と、未確認の金堂・講堂等の建物を確認し、伽藍配置の把握を目的とした。

発掘調査は、平成2年12月4日から平成3年2月8日まで実施した。調査面積は311m²である。

調査の結果、塔の西側で金堂基壇の一部を確認した。この確認により塔と金堂の間に伽藍中軸線を想定し、中軸線から西側カット面下までと、塔基壇北辺から南側カット面下までの距離がいずれも約38mであることなどから約76.0m四方の寺域を想定した。（文献3）

5) 第4次調査

これまでの調査では、寺域についての明確な遺構を確認していない。このため、寺域を確定するために南側の段周辺を発掘調査した。

発掘調査は平成4年2月26日から同年3月10日まで実施した。調査面積は82m²である。

調査の結果、寺域を画する明確な遺構は確認できず、寺域の確定には至らなかった。(文献4)

6) 第5次調査

不明瞭であった塔基壇の規模と構造を明らかにすること、塔・金堂以外の主要建物を確認することを目的に調査を実施した。

発掘調査は平成8年12月26日から平成9年3月4日まで実施した。調査面積は153.4m²である。

調査の結果、塔心礎の西側で断面観察により版築を確認した。

また、塔心礎の北約30mで中世の礎石建物を確認した。(文献5)

7) 第6次調査

講堂をはじめとする主要建物、回廊・中門を確認すること、寺域を明確にすることを目的に調査を実施した。

そして、この第6次調査を一連の発掘調査における最終年度として集大成した報告書を刊行し、史跡の拡大を目指すこととした。

発掘調査は平成10年5月26日から11月6日まで実施した。調査面積は220m²である。

以下、詳細については第6次調査の概要の項目で述べる。

(加藤)

II 位置と歴史的環境

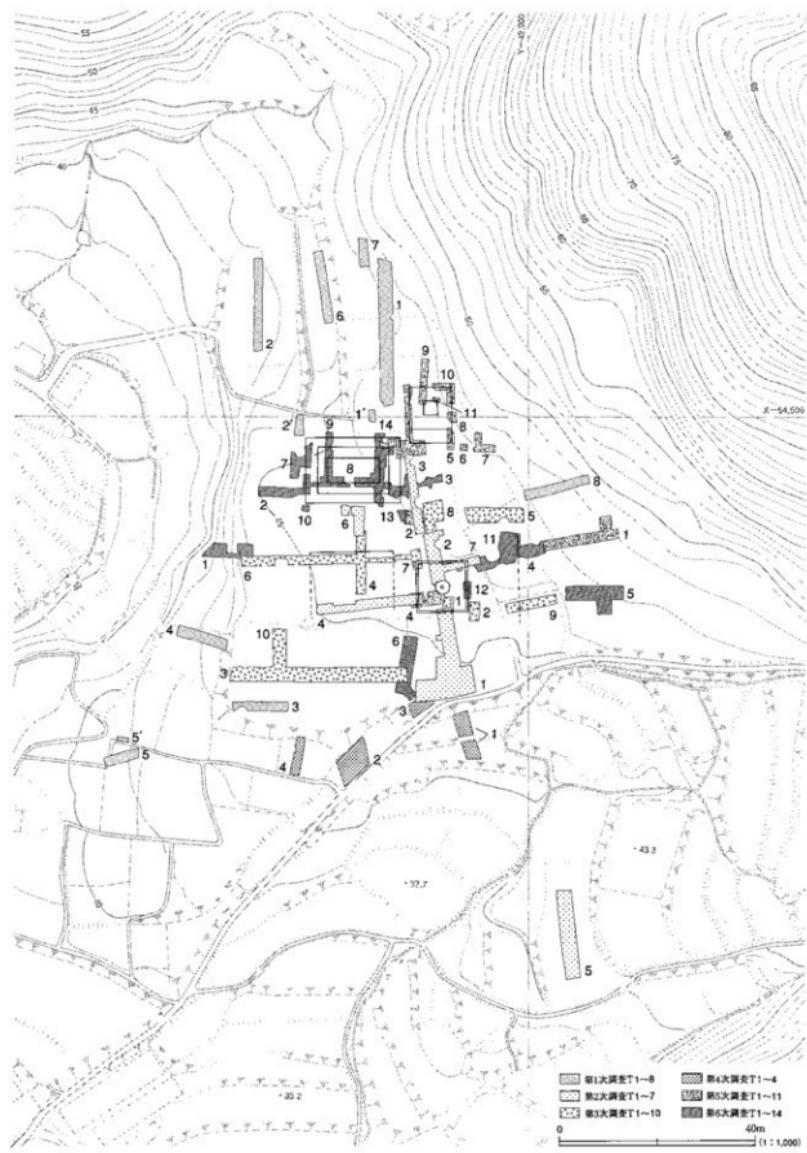
大原廃寺は倉吉市街地の南東約3km、倉吉市大原字亀井谷口・寺ノ谷・大門谷口に所在する。旧郡郷名でいうと、河村郡日下郷にあたるとみられる。現地は、北東から南西に延びる比較的急な丘陵尾根が、なだらかになつて天神川支流竹田川右岸の平野に落ち込む。そのなだらかな丘陵の基部に位置し、丘陵先端から約200mの所にある。標高は約45mで平野との比高差は約20mある。寺跡内は平坦で、畑・果樹園・山林・竹林となり、周辺の斜面部分では段々畑となっている。寺跡の南東約200mの山中には志羅谷口や志羅谷といった、「新羅」を想起させる字名が存在し、朝鮮陶質土器(新羅焼)の可能性がある土器片、顔面文をもつ軒平瓦や外縁に唐草文をもつ新羅系の軒丸瓦が発掘調査によって出土したことも関連して注目される。

倉吉平野の東側は未開発の丘陵部分が多く、倉吉市中央部・西郊に比べ遺跡の数は余り多く知られていなかった。しかし、近年現地踏査の進捗によって遺跡数は増加している。以下、旧石器時代から古墳時代については遺跡分布図を中心に、歴史時代特に寺院址については伯耆地方の範囲で述べることにする。

旧石器時代の遺跡は少ない。中尾遺跡(42)、長谷遺跡(94)でナイフ形石器を、上神51号墳(9)下層で細石刃石核を確認したのみで遺構については未確認である。

縄文時代の主な遺跡は市内で20余り確認されている。住居址は、取木遺跡(18)で2棟、津田峰遺跡で1棟確認している。松ヶ坪遺跡(108)は配石遺構と甕棺墓を確認している。その他多くの遺跡は、土器の散布や出土、落し穴を確認したものである。

弥生時代は、大山の火山活動により形成された、倉吉市西郊の通称久米ヶ原丘陵を中心に集落が多く存在する。その多くは弥生時代後期の集落址で、古墳時代にも引き継ぎ営まれる。主なものに、後中尾遺跡、中峯遺跡、遠藤谷峯遺跡、白市遺跡(21)、夏谷遺跡(98)、沢ベリ遺跡(44・45)等がある。墳墓には、イキス遺跡(17)、



第1図 大原庵寺トレンチ配置図

向山古墳群宮ノ峰文群(86)、阿弥大寺四隅突出型墳丘墓群、山根四隅突出型墳丘墓群(82)、裾ヶ谷墳丘墓(134)等がある。

古墳時代前期の首長墓は、粘土櫛を主体部とする斐鳳鏡、三角縁神獸鏡、二神二獸鏡、多量の鉄器が出土した國分寺古墳(40・前方後方墳・全長60m)、豎穴式石櫛を主体とする宮ノ峰19号墳・21号墳を初現とする。

次に東郷湖周辺に、馬ノ山2号墳(前方後円墳・全長68m)、4号墳(前方後円墳・全長100m)、宮内孤塚古墳(前方後円墳・全長95m)が築造される。馬ノ山4号墳は長大な豎穴式石櫛を主体とし、舶載の三角縁神獸鏡等豊富な遺物が出土している。5世紀代は、山陰地方で最大の全長をもち、銘文のある舶載の龍虎文鏡が出土した東郷町・北山古墳(前方後円墳・全長110m)、帆立貝式古墳が群集する沢ベリ遺跡、イザ原古墳群(46)などが造られる。

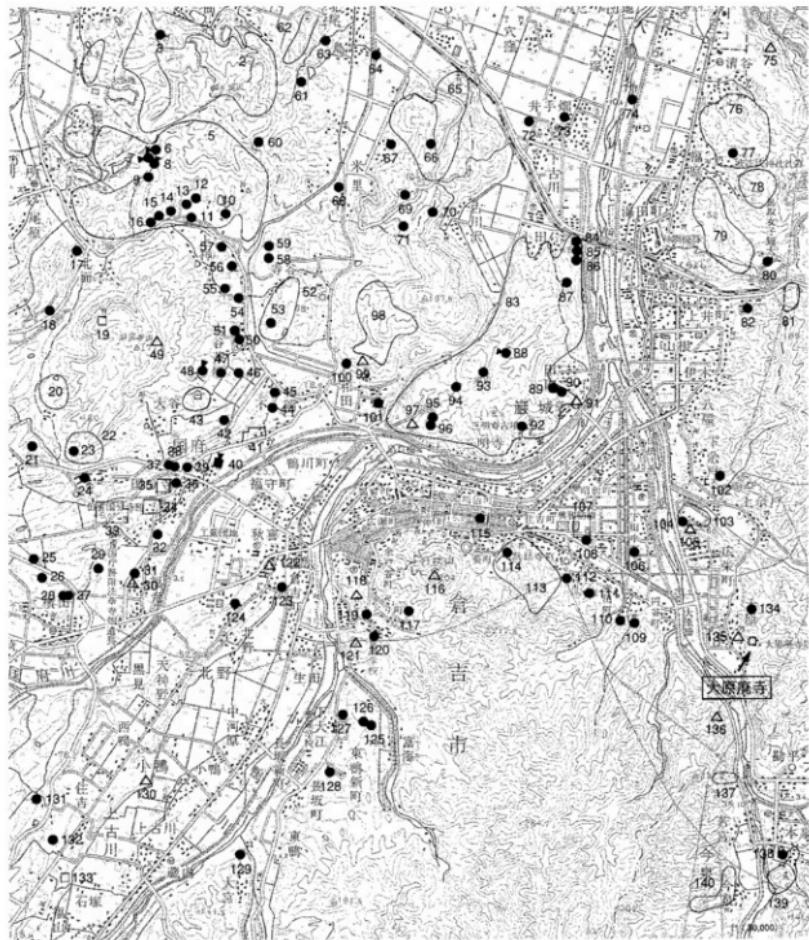
古墳時代後期には、向山、大平山、上神地区周辺などの丘陵に群集墳が多く造られる。向山古墳群は倉吉市街地の北側に存在し、500基以上の古墳が密集する。主なものに向山6号墳(88・全長40m・前方後円墳)、三明寺古墳(92・直径18m・円墳?・国史跡)があり、いずれも横穴式石室を主体部とする。波波伎神社境内にある福庭古墳(77・方墳・一边35m)は切石を使用した横穴式石室を主体部とする。

奈良時代の官衙跡としては、物資収納施設とみられる大型掘立柱建物群を確認した不入岡遺跡(41)、伯耆国衙跡(33)がある。

寺院跡は、伯耆国において先ず、7世紀中ごろに大御堂庵寺、野方庵寺・弥陀ヶ平庵寺(東郷町)が建立される。大御堂庵寺は觀世音寺式の伽藍配置をもち、多様な瓦類、正倉院宝物に似た佐波理匙、莊嚴具とみられる青銅製の獸頭、導水管である木橋が出土している

7世紀後半には、大原庵寺の他に、斎尾庵寺(東伯町)、上淀庵寺(淀江町)、大寺庵寺(岸本町)など寺院の造営が盛んになり、大原庵寺、野方庵寺・弥陀ヶ平庵寺のある河村郡を除き1郡につき1つの寺院が造営される。斎尾庵寺(東伯町・国特別史跡)は金堂の背後に講堂を配置する変則的な法隆寺式伽藍配置をもつ。遺物は

1 原古墳群	20 古墳群	39 郡塚遺跡	58 西前遺跡	77 福庭古墳
2 烏古墳群	21 白市遺跡	40 同分寺古墳	59 トドロケ遺跡	78 大平山古墳群
3 衣宮ノ前遺跡	22 古墳群	41 不入岡遺跡	60 曲226号墳	79 海田古墳群
4 總波古墳群	23 大谷後口谷墳丘墓	42 中尾遺跡	61 烏古墳群	80 福庭遺跡
5 上神古墳群	24 向野遺跡	43 大谷古墳群	62 北尾古墳群	81 大平古墳群
6 上神44号墳	25 東福田寺遺跡	44 沢ベリ遺跡2次	63 烏丸山遺跡	82 山根遺跡
7 上神45号墳	26 岩屋遺跡	45 沢ベリ遺跡1次	64 烏遺跡	83 向山古墳群
8 上神48号墳	27 矢戸遺跡1次	46 イザ原古墳群	65 土下古墳群	84 向山古墳群通口支群
9 上神51号墳	28 矢戸遺跡2次	47 小林古墳群	66 土下210~213号墳	85 小田鋼鐸出土地
10 上神宮ノ前遺跡	29 嶋ノ掛遺跡	48 大谷大将塚古墳	67 船渡遺跡	86 向山古墳群宮ノ峰文群
11 桜木遺跡	30 今倉城跡	49 大谷城跡	68 末里新鋤出土地	87 向山古墳群堤谷文群
12 谷畠遺跡	31 今倉遺跡	50 イザ原遺跡	69 末里第1遺跡	88 向山6号墳
13 西山遺跡	32 河原毛田遺跡	51 三度舞墳丘墓	70 下張坪遺跡	89 上養水遺跡
14 イガミ松遺跡	33 伯耆国衙跡	52 屋喜山古墳群	71 末里第2遺跡	90 姫水古墳群
15 クズマ遺跡	34 伯耆国分寺跡	53 屋喜山9号墳	72 上通遺跡	91 田内城跡
16 上神119号墳	35 伯耆国分尼寺跡	54 柴栗古墳群	73 南屋敷遺跡	92 三明寺古墳
17 イキス遺跡	36 宮ノ下遺跡	55 上神大将塚古墳	74 徳田津遺跡	93 三明寺大将塚古墳
18 取木遺跡	37 古神宮古墓	56 猫山遺跡	75 日下山城跡	94 長谷遺跡
19 四王寺跡	38 打塚遺跡	57 東狹間古墳	76 清谷古墳群	95 向山309号墳



第2図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

96 向山310号墳	105 上余戸郡山城跡	114 梅田遺跡	123 空岡遺跡	132 野畠古墳群
97 和田東城跡	106 烟ヶ田遺跡	115 山名氏館跡推定地	124 八幡平ラ遺跡	133 石塚庵寺
98 夏谷遺跡	107 大佛堂廃寺	116 打吹城跡	125 下西野遺跡	134 堀ヶ谷墳丘墓
99 和田城跡	108 松ヶ坪遺跡	117 高畔古墳群	126 山際古墳群	135 大原城跡
100 中峰古墳群	109 僧ヶ平遺跡	118 四十二丸城跡	127 大畑遺跡	136 円谷城跡
101 平林遺跡	110 東山田1号墳	119 萬才寺1号墳	128 東鷦遺跡	137 若宮古墳群
102 茄柄山遺跡	111 東谷遺跡	120 宮ノ平ル遺跡	129 大宮古墳	138 本泉遺跡
103 奥小山古墳群	112 弥平林1号墳	121 赤岩山砦跡	130 市場城跡	139 本泉古墳群
104 奥小山8号墳	113 古墳群	122 北ノ城跡	131 後口野1号墳	140 今泉古墳群



第3図 伯耆国古代寺院跡分布図
設けられる。このころ藤井谷庵寺が建立される。

平安時代以降の寺院跡は大日寺遺跡群、広瀬庵寺、四王寺跡がある。大日寺は天台宗の寺院で、木造阿弥陀如来坐像（重文）等の平安時代の仏像が残る。その他に延久3年（1071）記年銘がある瓦絵や五輪塔群が知られている。広瀬庵寺は、臨池伽藍の寺院跡である。

城跡は、小鴨氏居城の岩倉城跡、伯耆守護山名氏居城の田内城跡、打吹城跡、発掘された山名氏関連の城として円谷城跡がある。

（加藤）

III 第6次調査の概要

第6次調査で確認した寺院関連以外の遺構である竪穴式住居4棟、溝1条、地下式横穴1基について述べ、合わせて第1次調査から第5次調査で確認した竪穴式住居、掘立柱建物についても述べる。

第1トレンチ（以下Tで表す）で方形プランとみられる竪穴式住居（SI06）を確認した。住居の時期は、検出面で土器器が少量出土したのみで、古墳時代以降と推定される。

T2の講堂基壇西辺の更に西側で、厚さ最大約0.5mの整地層を確認した。土層は明茶褐色土で、地山ブロックを含む。整地層下層の地山面で竪穴式住居（SI05）を確認した。サブトレンチで確認したため、平面形などの規模は不明である。出土遺物は、埋土中から土師器、須恵器が出土した。住居の時期は、埋土中の遺物のため不明確だが、概ね5世紀後半とみられる。

T5では竪穴式住居（SI04）1棟、溝1条（SD04）を確認した。SI04は、周壁溝の一部を北西側と東側で確認し、平面プランは、少なくとも東西約5.2m、南北約4.5mの正方形ないし長方形に復元できる。検出面から床面まで最大約0.4m遺存する。住居床面中央には中央ピットとみられる長さ0.76m×幅0.59mの梢円形の焼け土を多く含む土壤を確認したが未掘である。その西0.6mには作業台の石が床面で遺存していた。床面で直径約0.2mのピットを3つ確認したが、深さがいずれも約2cm～3cmと浅すぎて柱穴とはいえない。但し、東側周壁溝沿いのピットは、直径0.4m×0.33m、深さ0.06mと浅いが位置的に柱穴の可能性が高い。

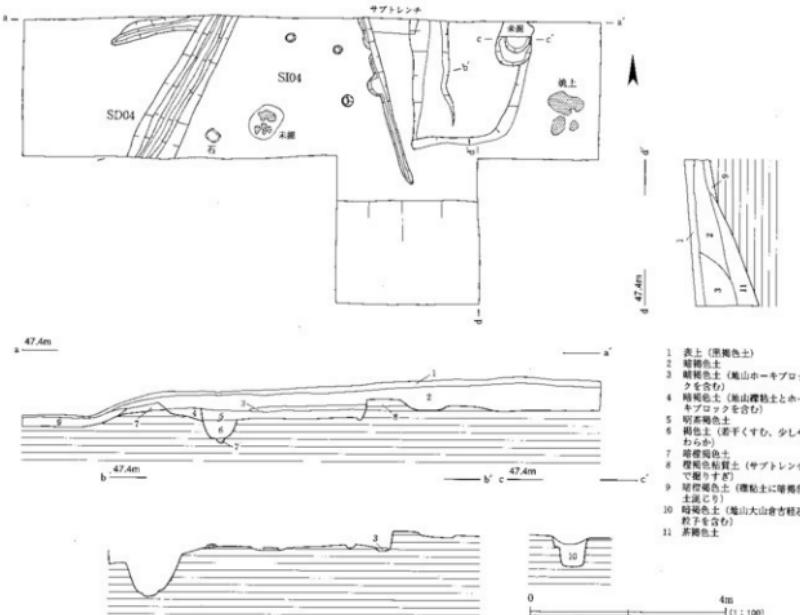
出土遺物は埋土中から土師器片が出土した。出土遺物から5世紀後半とみられる。

住居の西側に北東から南西に伸びる溝（SD04）を確認した。溝は最大で幅約0.96m、深さ0.89mで、断面形はU字で底に更に、深さ最大0.18mのU字の溝がある。溝は住居を切ることが断面の切り合いでわかる。

出土遺物は、鉄製品が出土した。溝の時期は不明である。

紀寺系の軒丸瓦に法隆寺系の軒平瓦が組み合い、塑像や埴仏が出土している。上淀庵寺は、塔を南北に近接して並立させるという特異な伽藍配置で、多量の壁画、癸未年の記年銘をもつ瓦が出土し一躍有名になった。大寺庵寺は、東面する法起寺式伽藍配置で、全国で2例しかない石製鷲尾が出土している。

8世紀に入り、石塚庵寺が建立される。中ごろには聖武天皇の詔を受け、伯耆国分寺・國分尼寺（法華寺煙道跡）が近接して

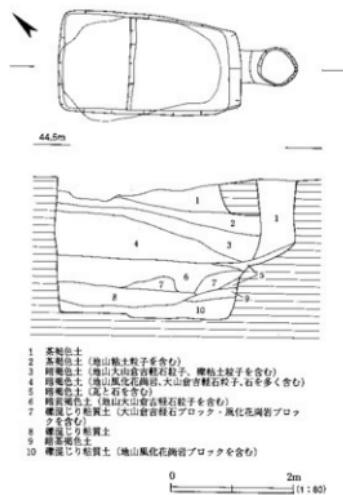


第4図 第5トレンチ平・断面図

T6では溝（SD05）と地下式横穴を確認した。地下式横穴は、垂直に掘り込まれた直径0.66m×0.6m、深さ最大1.36mの竪穴部と、長さ3.71m×幅1.32m~1.56mの室部からなる。室部の奥側は手前に比べ約0.05m高くなり、奥行きは1.08mある。竪穴部は底が室部に向かって斜面となり、室部とは約0.7mの段差となる。室部の天井はすでに崩落しており、埋土中からは人頭大の石がたくさん出土した。石に混じって瓦、土師器片、須恵器片、青磁片、須恵質陶器、五輪塔の地輪等が出土した。これらはいずれも埋土中の出土であり、床面から出土したものは全く無い。これらの状況から、中世頃に天井部が崩壊し、穴埋めをするため付近にあった不要物を投げ込んだとみられる。

溝（SD05）は、長さ6.84m、最大幅約1.6m、最大深さ0.37mで断面は浅いU字形である。埋土中から瓦片、須恵器片、土師器片、鉄釘28、窓模片が出土した。溝の時期は不明である。

T9の講堂の身舎北東部分近くで竪式住居（SI07）を確認した。周壁溝の一部のみを確認したため、規模は不明であ



第5図 地下式横穴構造図

る。住居の時期は、出土した土器から4世紀代と推定される。

第1次調査から第5次調査では、堅穴式住居を3棟、掘立柱建物を3棟確認した。住居については、住居と確認した時点で掘り下げを止めているため、平面形や時期について必ずしも正確ではないがここでまとめておく。

SI 01 (第3次T3) 方形プランの住居である。6世紀代の土器が出土している。

SI 02 (第2次T6) 方形プランと推定される住居である。5世紀後半の土器が多く出土している。

SI 03 (第3次T6) 方形プランの住居である。出土遺物はなく時期は不明である。

SB01 (第3次T3) 桁行4間、幅広い時期の遺物が出土。切り合ひにより、SB02より古い。

SB02 (第3次T3) 桁行2間・梁行2間、7世紀前半頃から9世紀代の土器が出土。

SB03 (第5次T1) 規模不明、5世紀代のコシキ形土器片が出土。

(略解)

IV 遺跡の概要

発掘調査は基本的に3m幅のトレンチを設定し、人力によって掘り下げを行った。ただし、調査地は山林、果樹園であり、これら樹木を避けざるを得ず、幅の狭いあるいはいびつな形のトレンチになってしまうことがしばしばあった。このため、遺構確認と遺構掘り下げが困難なこともあった。

第2次調査時に、測量用の3級基準杭を2点設置と、寺跡周辺を含めた地形を把握するために航空測量による1:500の地形測量図を作成した。

現地は、北東から南西に延びる比較的なだらかな丘陵尾根の基部に位置する。この丘陵を寺地造成の際に、幅をいっぱいに使って、丘陵の西側斜面側と南斜面の低い側をカットすると同時に、斜面の高い側を盛土して段差を造り、平坦な面を造っている。

調査地の基本層序は、上層から黒褐色土（耕作土）、茶褐色系の土、暗褐色土、褐色土（ソフトローム）、黄灰色砂質土（ホーキ土）、疊混じり砂質土（橙褐色砂質土）、大山倉吉軽石層（黄褐色土）となる。遺構の検出面は、寺地造成のために場所によって違いがある。元々尾根筋にあたる塔、金堂付近は旧地形を削るのに対し、尾根筋から外れた講堂付近は、風化花崗岩粒子を含む土や、地山の黄褐色砂質ブロックを含む土で盛土による整地を行う。

発掘調査の結果、主要な堂塔として、塔、金堂、講堂を確認した。さらに、大原廃寺の最終段階とみられる礎石建物を確認した。

1 遺構

塔 塔は第2次調査で基壇北辺と北東隅の石列を確認した。その後、第5次調査で塔心礎の西側を断ち割り、版築を確認、第6次調査で、基壇東辺の石列とその痕跡穴を確認した。

塔心礎は長径約2.9m、短径約2.8m、厚さ約0.3mと山陰地方で最大級の大きさをもつ。石材は肉眼観察では安山岩質で、柱穴は石の中央に直径0.65m、深さ0.12mで設けられている。塔心礎以外の礎石及び根石、根石掘り方は、数次にわたる調査にも関わらず、全く確認していない。すでに、畑地耕作等によって破壊され削平されているものとみられる。

基壇の北辺の一部と北東隅、東辺の石列は、長径約0.4m・短径約0.1mの川原石が2列平行に並ぶ。石列は、北辺で約0.5m、東辺で約0.6mの間隔を持ち、北東隅で直角に折れ曲がる。北東隅には、長径0.5m・短径0.3mの上面が平坦な自然石が置かれていた。この自然石の上面は石列上面より0.13m高い。北辺には更に外側に同じく約0.5mの間隔で石列が並ぶことを部分的に確認した。塔心礎柱穴の中心から北側石列、東側石列までの距離

は等しくなるため、石列を確認していない西側、南側に折り返すと、内側の石列が一辺約9.8mの正方形、外側の石列が南北約10.8m、東西約10.9mのはば正方形となった。石列から塔の方向軸を復元すると、国土座標の北から約0.3°西に振る。川原石列の約1m外側に幅約1m、最も浅い部分で深さ約0.02~0.03m、最も深い部分で深さ0.3m前後、断面がU字形の溝が巡ることを塔の北側と北東隅トレンチで確認した。溝埋土中から瓦片、土師器片、須恵器片が出土している。

瓦は丸瓦、平瓦片が北側溝のサブトレンチから40片余り出土した。ただし、溝より上層や溝の周辺から多くの瓦が出土している。また、塔付近では壁土の焼土化したもののが4点出土した。

須恵器は、陰田8と陰田9に比定される壺の破片が一片ずつと壺の頭部が出土した。土師器片は細片で、古墳時代のものと、伯耆国序IIからIII段階に比定される壺片が十数片ある。

塔の北側溝は、完掘していないので必ずしも明確でないが、約1mほど北側に広がっているように見受けられる。塔の北西隅、西辺、南辺、南東隅も掘り下げを行ったが、石列、溝とも確認していない。これらの遺構検出面は、確認した石列、溝の標高より低いので、既に削平されてしまっているとみられる。

塔の北側と塔心礎の西側で版築を確認した。北側の版築土は、黄褐色土と暗茶褐色土を突き固めたものであるが、断ち割っていないので厚さ、範囲は不明である。西側版築土は断ち割りした断面で、厚さ最大0.35m、長さ3mの範囲で確認した。その土層は、疊混じり粘質土（橙褐色粘質土）と大山倉吉軽石（黄褐色土）を薄く互層状にしたものである。断ち割りの際、地山まで掘り下げを行ったところ版築のすぐ下層は金堂、講堂周辺で確認できるホーキ土は全く無く、さらに下層の大山・倉吉軽石（黄褐色土）であった。塔の地山上面のレベルは、塔周辺の地山上面レベルに比べてほとんど同じ高さであるため、掘り込み地蔵は行わず、ソフトロームやホーキ土といった地山の土を削り、塔心礎は地山を削り出した面に直接置いているとみられる。

金堂 金堂は第3次調査時に、塔の西辺から西に4.5m離れて並列して東西棟を確認した。遺構の遺存状態は後世の削平により悪かったが、北側で約0.2mの段差と段差の北に接する瓦を含んだ溝状の落ち込み、西側で約0.1mの段差と付近で瓦が多く出土、東側で幅0.7m、深さ0.3mの溝を確認した。これを、基壇化粧の抜き取り痕跡と想定し、基壇規模を東西約17.0mに復元した。北辺は、塔基壇北辺の石列より北に2.0m出る。南辺は削平により不明であるため、南北規模は分からぬが、塔基壇南辺の石列に揃えると、約12.8m、塔心礎中心で塔基壇の東西方向軸を伸ばし金堂基壇北辺を南に折り返すと、約14.8mである。基壇化粧の抜き取り痕跡以外の礎石や礎石根石とその掘り方などは全く確認できなかった。

建物の方向軸は、基壇端を部分的に確認しただけであるため、厳密な方向軸の復元は無理である。このため、図面は塔と同じ方向軸で復元を行った。

基壇の築成方法は、遺構検出面で地山と判断される土層となることから、断ち割りを実施してはいないが、地山を削り出し、基壇の基底部としたものと推定される。基壇化粧、版築については未確認のため分からぬ。

第3次調査時は、塔と金堂の間隔を約6mと復元したが、第6次調査によって塔基壇石列の位置を訂正したため、塔の西辺石列と金堂の基壇東辺の距離は約4.5mとなる。

遺物は、瓦、須恵器、土師器等が出土している。ただし、遺構がほとんど遺存していないので、遺構に伴う遺物は少ない。軒丸瓦は、西側段差でⅣb類13、Ⅳ類各1点、表土からⅣ類、軒平瓦は金堂の外の北・北側下層でⅢ類と、金堂外の東でⅢ類17が各1点出土した。土器は、西側段差で土師器33が出土した。

講堂 講堂は第6次調査で、金堂北辺から約10m北で桁行7間×梁行4間の東西棟四面庇付掘立柱建物と基壇の一部を確認した。遺構の検出は、身舎南辺ではほぼ寺院建立前の表土面で、身舎東側と庇北端は整地層上面で、それ以外は地山のホーキ土で行った。ただし、P10については断面でのみ確認した。

この建物は金堂の真裏に位置し、塔と建物の軸がほぼ同じく、桁行7間×梁行4間と、当時の一般的な講堂規模と一致する。このため、この建物を講堂であると判断した。

建物規模は、身舎部分で桁行約10.5m×梁行5.6m、庇部分を含めて、桁行約14.3m×梁行約9.6mである。柱間は身舎部分で桁行約2.1m・梁行約2.6m、庇部分で桁行約1.9m・梁行約2.2mである。

基壇は建物の西側と北側で基壇の端の一部を確認した。西側の基壇端は、西辺の庇部分から西2.6mの位置で長さ約0.2m～0.5m、幅約0.2m前後の川原石を南北方向に並べている。北側の基壇端は、北辺庇部分から北1.9mの位置で数cm大の風化した花崗岩と角のある川原石が東西方向に伸びる。分かった基壇端から基壇規模を復元すると、東西19.5m×南北13.4mとなる。建物の方向は、国土座標の北から0.3°東に振る。

講堂の現地表面の標高は、現地表の傾斜に伴って、基壇東側約45.5m、基壇西側約44.8m、遺構検出面の標高は身舎東辺約45.1m、基壇西端約44.6mと西に向かって低くなる。

身舎部分の柱穴はP3、P4は円形で直径0.84m～0.98m、その他は隅の丸い方形で、大きさは一辺約0.8m～1mである。深さは、検出面から底まで約0.6m～0.7m程度で、P1、P3、P4、P5、P7は2段に掘り込まれる。掘り方の底面が地形の傾斜に伴って、西に行くほど低くなるのは、地盤の安定した地山のホーキ土まで掘り下げたためと思われる。

庇部分の柱穴は、身舎部分に比べ大きさ、深さとも小さい。直径は0.36m～0.80m、深さは、P12、P13、P14を地山面で検出したため、数cm～19cmと浅い。平面形はP11、P13が円形で、P12、P14が不整円形となる。

柱の痕跡は、P4（直径28cm）は断面で、P1（直径22cm）、P2（直径47cm）は平面、断面とも確認できた。P5とP13は遺構検出面の高さで、根石状の石の集まりがあった。P5の根石状の石のなかには軒平瓦I類が1点あった。

講堂の北半分は、風化した花崗岩を多く含む整地層を、厚さ約50cm程度の厚さで確認した。この部分は寺院建立以前の地形が東から北西に向かって落ちるため、寺地の造成に際して盛土をしたものとみられる。

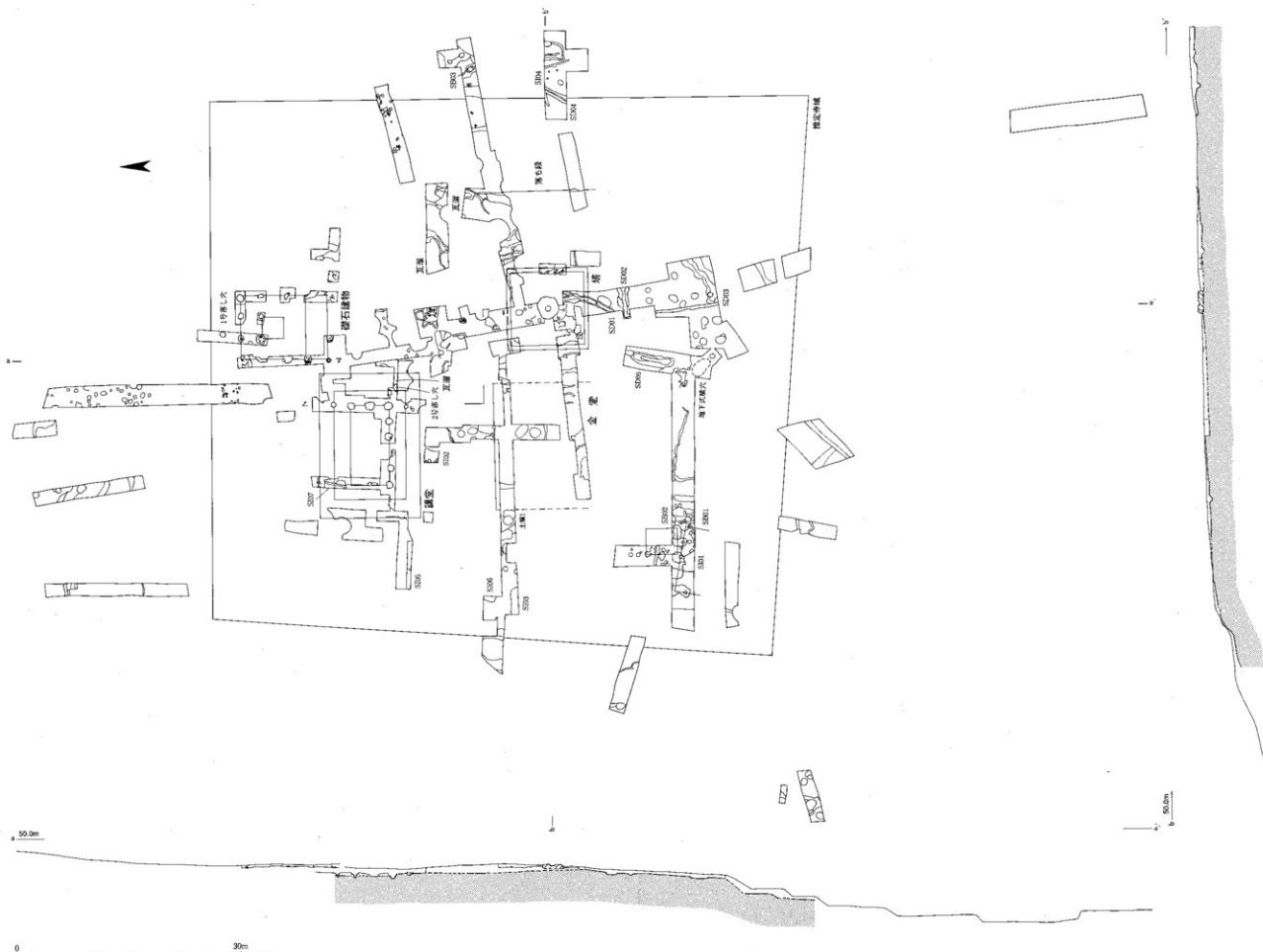
講堂は掘り込み地業や、地山の削り出し、版築は確認していない。

出土遺物は瓦類、埴仏、須恵器、土師器が出土したが遺構に伴うものは少ない。前述の軒平瓦I類が1点と、基壇西辺の直ぐ外側で軒丸瓦I類が出土した程度である。講堂とその周辺から合計で軒丸瓦12点、軒平瓦が28点出土した。

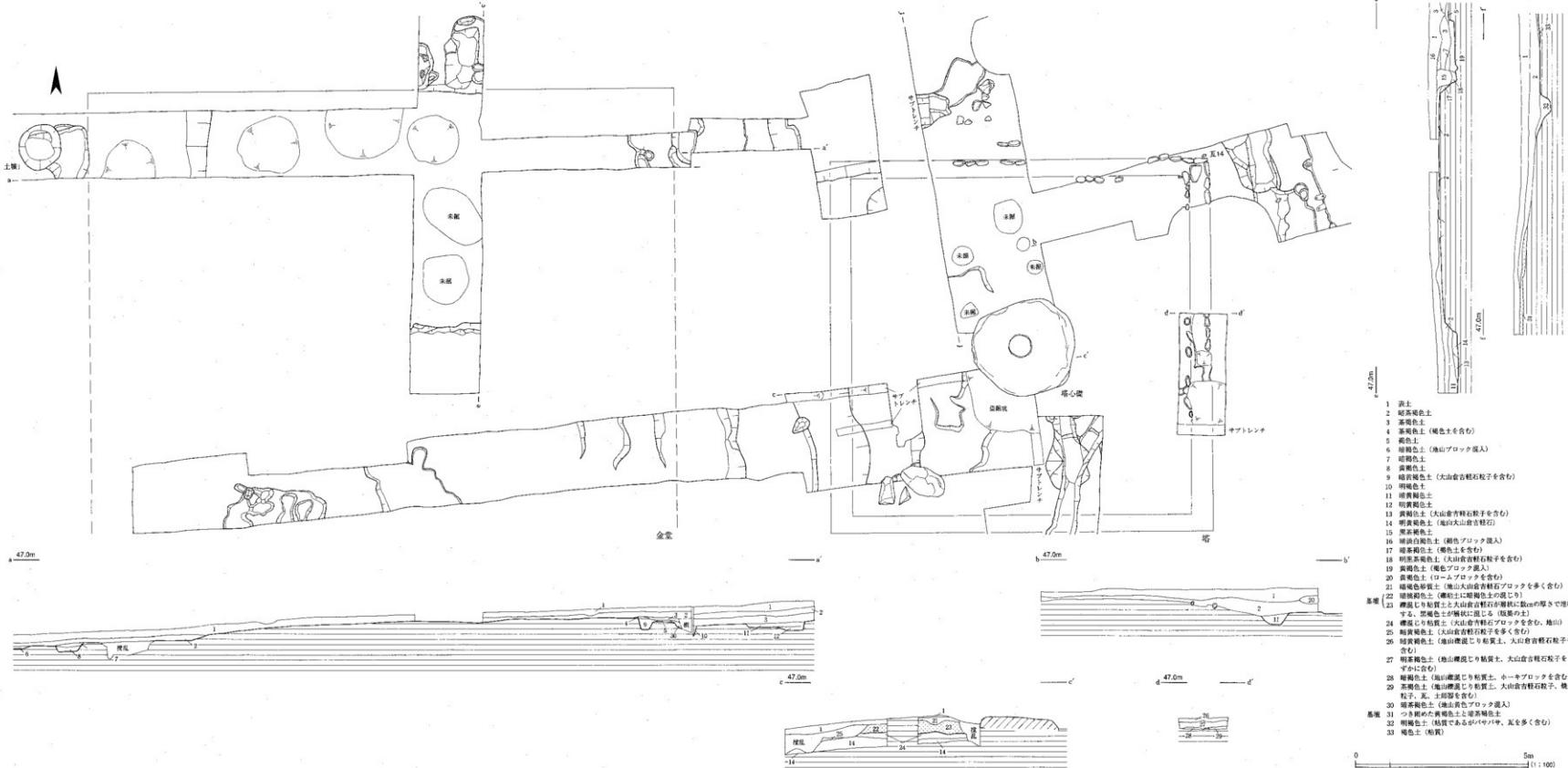
須恵器はP8埋土中から壊身8、P13検出面で鉢63、基壇北辺整地層とP1付近から高台付壺の転用硯36・41、P2埋土中から朝鮮陶質土器の可能性がある壊蓋34が出土している。その他、整地層や表土から須恵器が出土している。土師器は、P2埋土中から油煙の付着した壺3、P1の検出面より上層から油煙の付着した壺2・5、P5埋土中から柱状高台片11が出土した。埴仏は、講堂の東端瓦礫から漆箔の遺存する埴仏の破片1点5が出土した。他に表土中から泥塔13が1点出土した。

礎石建物 磚石建物は塔心礎の北約30mで確認した。遺構検出は表土を約20cm掘り下げ、風化した花崗岩粒子を含む土の上面で行った。風化した花崗岩粒子を含む土は、講堂の北半分にあった盛土と同じ質の土である。断ち割りを行っていないので断定はできないが、建物南辺の西端で整地層の立ち上がりを約0.2m断面で確認したため、基壇の高まりがあった可能性がある。礎石の上面での標高は、約46.4mである。

建物規模は東西3間×南北4間(8.7m×11.6m)を確認した。これは、東西3間×南北3間の4面庇付建物に南側1間分孫庇が付いたものと推定する。ただし、身舎南辺の2ヶ所をはじめとして、樹木が生えているためや、排土の関係で発掘できず、礎石とその掘え込み穴を確認していない部分もある。建物の方向はちょうど国土座標の北を向く。柱間は、全て約2.9mの等間隔である。



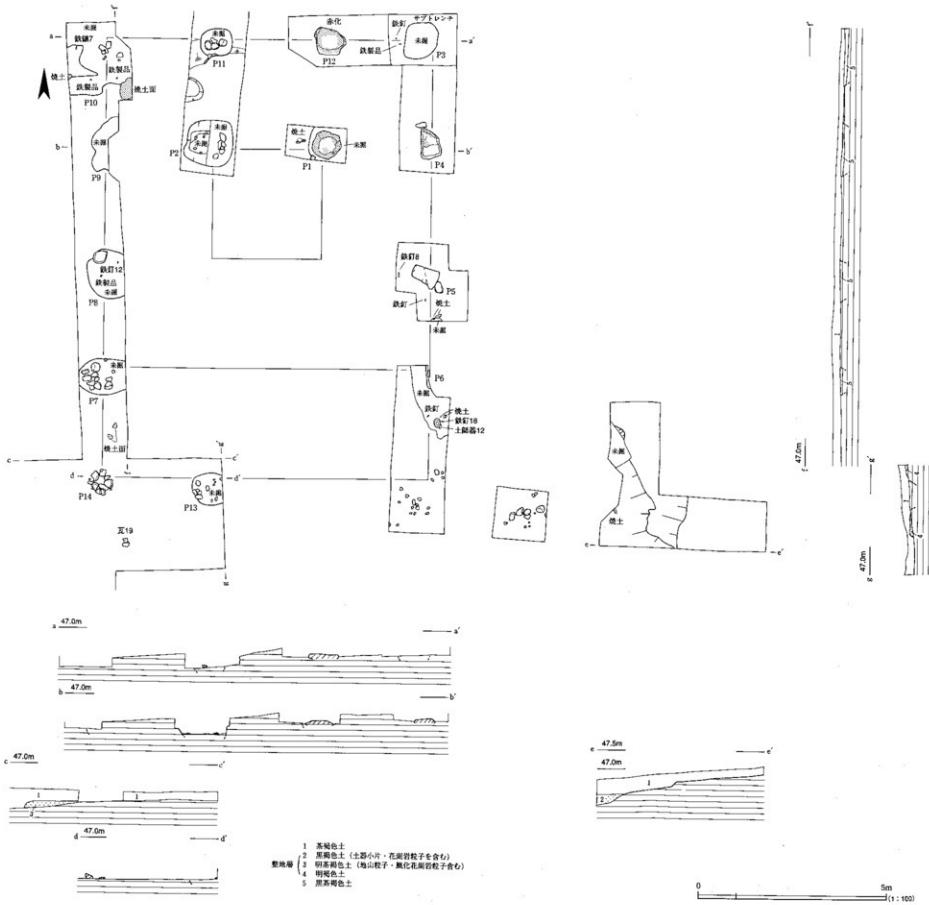
第6図 大原廢寺遺構全体図



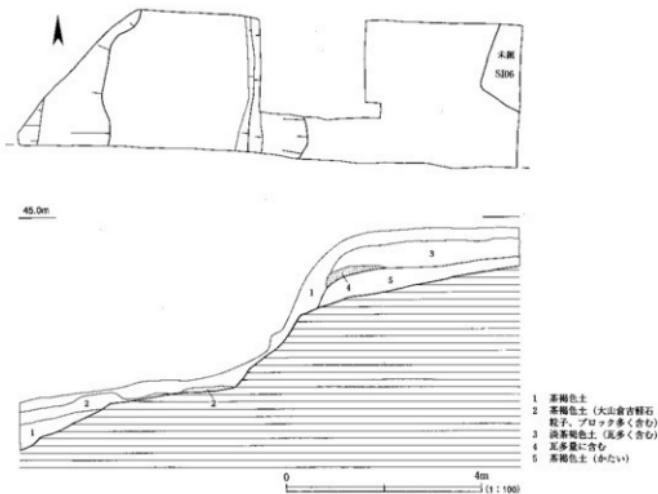
第7図 塔・金堂遺構図



第8図 講堂遺構図



第9図 磨石建物遺構図



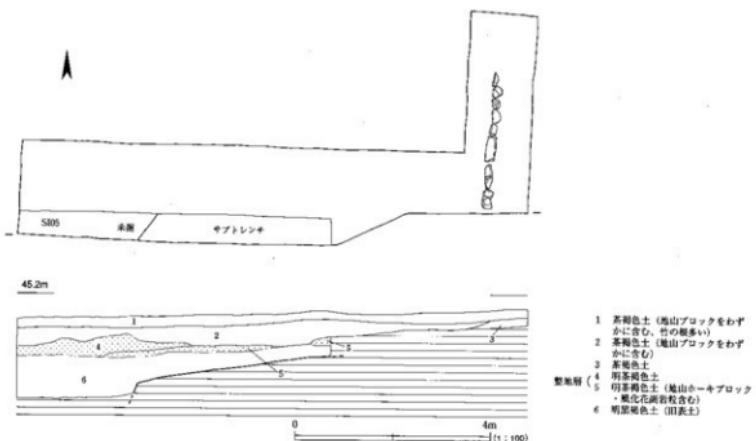
第10図 寺域西限の段平・断面図（第6次調査T1）

礎石そのものが出土したP1、P4、P5、P12については礎石を確認した時点で掘り下げを止めた。それ以外は根石の据え込み穴と分かるまで掘り下げを行った。据え込み穴とその一部を確認したP1、P2、P3、P7、P8、P9、P10、P11、P13の平面形はP1が隅丸正方形になる他は円形から梢円形となり、大きさは約40cm～80cmと不規則である。礎石のうち、P1、P4、P12の上面には石が部分的に赤くなっている部分があり、火を受けた状態とも考えられる。特に、P1とP12は石の周辺部だけ赤くなっている、赤い部分とそうでない部分の境目は直径約40cmの不整円形となる。礎石建物の付近は、焼土と焼土面が点在しているので、あるいは、火災で焼失した際に石が柱の形に沿って焼けたのかもしれない。

P6の据え込み穴内から瓦、川原石、土器、鉄釘等が出土した。この掘り方はいびつで大きく、瓦を含むことから礎石抜き取り穴と判断する。

出土遺物は、瓦類、塑像の可能性がある小片、埴仏7、須恵器、土師器、瓦質土器、須恵質陶器、鉄釘等が出土した。土師器はP6礎石抜き取り穴から壺12、T7埋土中から壺の柱状高台部13が出土した。瓦質土器は2点、須恵質陶器は4点出土した。礎石建物以外では瓦質土器は9点、須恵質陶器は4点出土しているものの、その多くは塔・金堂の間とその北側で出土しており、礎石建物との関連を窺わせる。鉄釘は礎石付近、礎石の根石据え込み穴から主に出土し、発掘全体の出土量50点の内17点を礎石建物部分で占める。瓦の出土は、主に建物南西の講堂と隣接する場所で出土しており、建物の中心部分からは、礎石抜き取り穴以外だけで出土している。

寺域西限の段 第6次調査T1で寺域西限とみられる段差を金堂西邊から西約17mで確認した。この段差は、元々斜面であった所を、地山の大山倉吉軽石層（黄褐色土）まで削り、高さ約2.5mの段差にしている。標高は、現地表面で約44.75m、寺院生活面で約44.0mである。寺域内の高い方側の西端には、寺院の生活面に沿って、幅約1.2m、厚さ約0.2mの南北方向に伸びる、各時期の瓦を非常に多く含む層を確認した。これは、寺院廃絶後に瓦を廃棄したものとみられる。この段差は寺域南西隅の人工的と考えられる段差の延長線上に一致し、国土座標の北から約5°東に向く。



第11図 講堂の西側盛土平・断面図（第6次調査T2）

講堂の西側盛土 第6次調査T2で講堂西側基壇の西3mから10mの範囲、厚さ最大約0.5mで寺地造成に伴う盛土による整地層を確認した。盛土は地山ブロックと風化した花崗岩を含む明茶褐色土であった。

塔の外東側落ち段 塔の東約10mで南北方向に伸びる段差を第3次調査T9、第6次調査T4・T11で確認した。段差は最大約0.15mあり、南北方向に少なくとも約14m延び、さらに北側の第3次調査T5東端まで延びていた可能性が高い。その方向はほぼ国土座標の北に一致し、主要建物とも合うため、寺院に関する落ち段であると考えられる。この段の東側は表土下約20cmで礫混じり粘質土の地山となり、本来堆積しているはずのソフトロームやホーキ土が全く無く、平坦面が東側に約7m続く。この平坦面も寺院に関するものである可能性がある。平坦面の標高は46.2m前後である。

瓦窯 第6次調査T11、第3次調査T5、第6次調査T3の講堂東側で、瓦や土器がまとまって廃棄された状態で出土した。第6次調査トレンチは掘り方を確認したがそれ以外は確認していない。このうち第6次調査T11からは、蝶巣8が1点出土、焼け土化した壁土片1点、その他油煙の付着した土器の壊や土器質土器の細片が多く出土した。第6次調査T3からは漆箔の残る埴輪片5が1点出土した。これら瓦窯は、主要堂塔崩壊後に廃棄されたものであろう。

(加藤)

2 遺物

出土遺物は、大原磨寺以前のものを列記すると以下のようになる。旧石器時代では安山岩のくさび状石器1・安山岩質の剥片3・時代不明の黒曜石剥片2、縄文時代では縄文土器・磨石2・敲石1・打製石斧1・弥生時代では後期を主とする弥生土器・磨製石斧4・磨面のある石4・石鋸状石器2・玉髓小塊1、古墳時代では後期5世紀後半～6世紀代を主とする土器がある。これらは紙面の都合上、報告書には掲載しなかった。

大原磨寺以後のものとしては、瓦・須恵器・土師器・土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・埠仏・塑像・泥塔・瓦塔・銅製品・鉄製品・繩の羽口・鉢滓・窓壁・ガラス玉・紡錘車・土馬・砥石・板状石製品・円板状石製品・碁石がある。主な遺物について順に述べる。

1) 瓦

第1次から第6次の調査で、整理用のコンテナで134箱出土した。

軒丸瓦 過去の調査において7型式確認されている。今回の整理により新たに1型式を確認し、さらに各型式を細分したため、合計8型式12種類、122点を確認した。各型式名は過去の報告（文献6）に従った。

軒丸瓦I類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁に残る微細な範傷により同范関係が観察でき、蓮弁部分は全て同范であるものの、中房の蓮子の配置、外区の様子などから3種に細分できた。中房は平坦で圓線に囲まれ $1+5+9$ の蓮子を配する。花弁は短く、先端はやや切り込み反転する。外区は直立縁か、または外傾縁である。瓦当の下半は強いナデのため外傾縁になるものが多い。外縁は低くわずかに内傾し、凸線による鋸歯文が巡る。線鋸歯文は、鋸歯文の中に二分するように凸線を入れる特異なもの。瓦当の円周は、ナデ調整だが、ハケメ調整の痕跡を残すものもある。丸瓦は、瓦當に一度粘土を押しつけ瓦當面をつくっておいてから、丸瓦の凹面をカットし板状にしたものを瓦當の側端にそって差し込み、瓦當裏面全体にもう一度粘土を補充し接合される。丸瓦と瓦當がはずれた状態で出土しているものは非常に少ない。瓦當裏面は、瓦當と丸瓦を接合した後に外周に沿ってナデ調整する。接続する丸瓦は凸面ハケメ調整。直径は19cm前後、厚さは中房で $1.1\sim2.2$ cmと薄い。どの破片にも大きな範傷はみられず同様も整っている。胎土は密で $0.1\sim0.5$ cmの砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は淡青灰色。合計47点（軒丸瓦全体の中で38.5%。以下同じ）出土した。

I a類（1～3）すべて同范である。外縁の線鋸歯文の内周をヘラケズリする。國化した3点を合わせるとほぼ全周する。47点中17点。

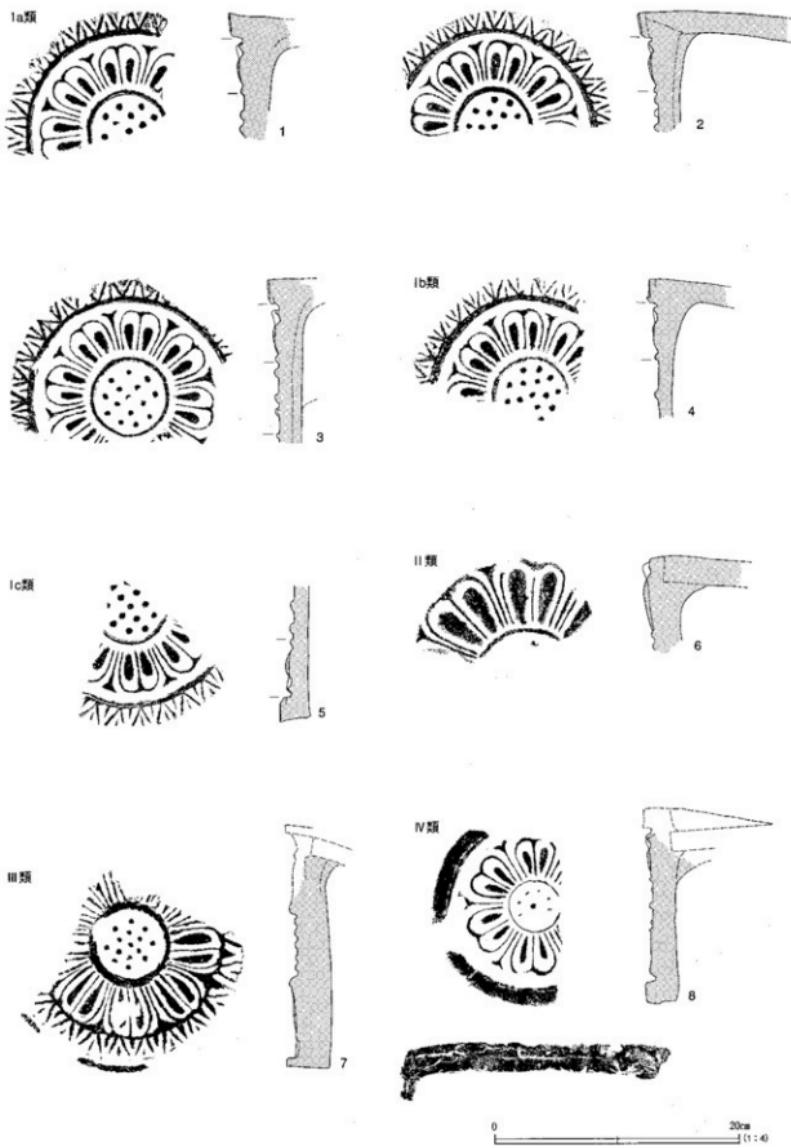
I b類（4） I a類とは、外縁の鋸歯文の配置（角度）が違う。さらに外縁の線鋸歯文の内周はヘラケズリが浅く、凸線状に残る。中にはヘラケズリをせず完全に凸線のまま残すものもある。47点中6点。

I c類（5） I a類・I b類とは中房の蓮子の配置が違う。外縁の線鋸歯文の内周はヘラケズリされる。47点中4点。

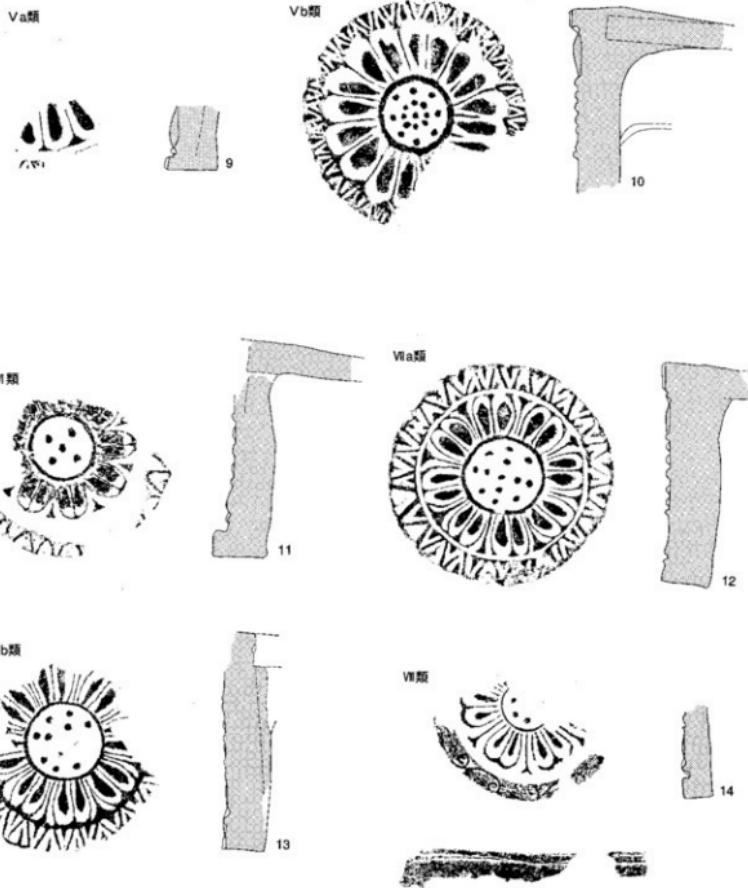
軒丸瓦II類（6） 複弁八弁蓮華文軒丸瓦。外区はつくられない。中房は平坦で圓線に囲まれ、蓮子は $1+8+12$ 。蓮弁の先端はわずかに反転するが切り込まれていない。丸瓦は瓦當に深く差し込まれている。I類と同様に、瓦當を厚さ半分程度つくってから丸瓦を置き、もう一度瓦當裏面全体に粘土を補充し丸瓦と瓦當を接合するものと思われる。瓦當裏面は外周に沿って強くナデ調整する。直径は約19cm、厚さは中房で2.2cm。胎土は $0.1\sim0.3$ cmの砂粒を非常に多く含み、焼成は悪く軟質。色調は淡黄白色。5点（4.1%）出土。

軒丸瓦III類（7） 複弁八弁蓮華文軒丸瓦。中房は蓮弁より一段低くつくられ、 $1+6+8$ の蓮子を配する。蓮弁の反転は表現されない。外区にI類と同様の線鋸歯文を配し、外縁は高い直立縁で無文である。II類と同様の方法で丸瓦を接合するが、丸瓦の接合位置が低く、丸瓦凹面にも粘土を補充し外縁をつくっている。瓦當裏面は板状工具によるナデ。直径は約19.8cm、厚さは中房部分で2.7cm、外縁部分で3.6cmである。胎土は密で、 $0.1\sim0.5$ cmの砂粒少量含む。焼成はやや悪く軟質。色調は淡褐白色。合計2点（1.6%）出土。2点とも範傷が非常に進行している。

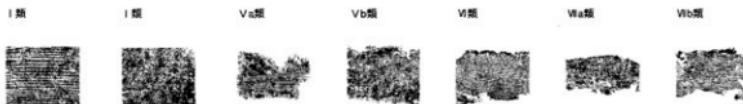
軒丸瓦IV類（8） 複弁六弁蓮華文軒丸瓦。中房は平坦で圓線に囲まれる。蓮子は $1+8$ 。蓮弁の先端は切り込みわずかに反転する。外縁は直立縁で無文。瓦當の側面には楕型の痕跡を残す。また、外縁の内側の立ち上がり部分にもパリと考えられる細かな凸線が巡るため、範型は内区だけのもので、外縁から瓦當の側面までは楕型によりつくられている可能性がある。丸瓦の接合位置は低く、丸瓦の凹凸両面に粘土を補充している。瓦當裏面はナデ調整。直径は約16cm、中房の厚さは1.9cm。胎土は $0.1\sim0.3$ cmの砂粒を多く含み、焼成はやや悪く軟質。色調は断面は褐黄色で、表面のみ黒褐色である。合計で47点（38.5%）出土。



第12図 軒丸瓦 I ~ IV類



瓦当側面のハケメ調整



0 20mm (1:4)

第13図 軒丸瓦V～Ⅶ類

軒丸瓦V類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦。内区と外区を凹線による囲線で区切るか、区切らないかで2種類に細分できる。中房は平坦で囲線に囲まれ、蓮子は1+8+8。子葉は太く、蓮弁の先端は外区に食い込み、間弁は表現されない。外縁は低い直立縁で、線鋸歯文が巡る。瓦当の側面はハケメ調整される。良好な資料がないが、瓦当と丸瓦はII類と同様の方法で接合されているものと考えられる。瓦当裏面はナデ調整。直径は約18cm、厚さは中房で3.5cm。胎土は密で、0.1~1cmの砂粒と茶褐色の粒子を多量に含む。焼成はやや悪く軟質で、色調は暗灰色から淡黄褐色。

V a類 (9) 内区と外区の境が囲線で区切られるもの。8点 (6.6%) 出土。

V b類 (10) 内区と外区の境が区切られないもの。1点のみ (0.8%) 出土。

V a類とV b類との範型などの関係は、V a類が小片のみの出土のため、不明である。

軒丸瓦VI類 複弁九弁蓮華文軒丸瓦。中房は平坦で囲線に囲まれ、蓮子は1+4。蓮弁は短く、盛り上がり反転する。子葉の外側に細い凸縁が巡る。間弁は楔形で、中房まで届いていない。外縁は高い直立縁で、凸縁による線鋸歯文が巡る。瓦当の側面はハケメ調整される。丸瓦の接合方法はII類と同様である。瓦当裏面はナデ調整だが、板状工具による調整痕が残る。直径は約18cm、厚さは中房で3.5cm、外縁で4.5cmである。胎土は密で、0.1~0.5cmの砂粒を含み、焼成は普通で軟質。色調は表面が黒褐色で、断面は淡黄褐色である。1点のみ (0.8%) 出土。

軒丸瓦VII類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦。軒丸瓦V類と同様に内区、外区を区切る、区切らないで、2種類に細分できる。中房は平坦で囲線に囲まれ、蓮子は1+4+8。蓮弁の先端は丸くわずかに反転する。外縁は平縁で、線鋸歯文が巡る。瓦当の側面はハケメ調整される。丸瓦の接合方法はI類と同じであるが、I類にくらべ、丸瓦の差し込みがかなり浅い。瓦当裏面はナデ調整。直径は18cm前後、厚さは中房で3.8~4.1cm。胎土は0.1~0.5cmの砂粒、赤褐色の粒子を多く含む。スサを含む個体もある。焼成はやや悪く軟質、色調は淡黄褐色から淡赤褐色。

VII a類 (12) 内区と外区が区切られるもの。4点 (3.3%) 出土。

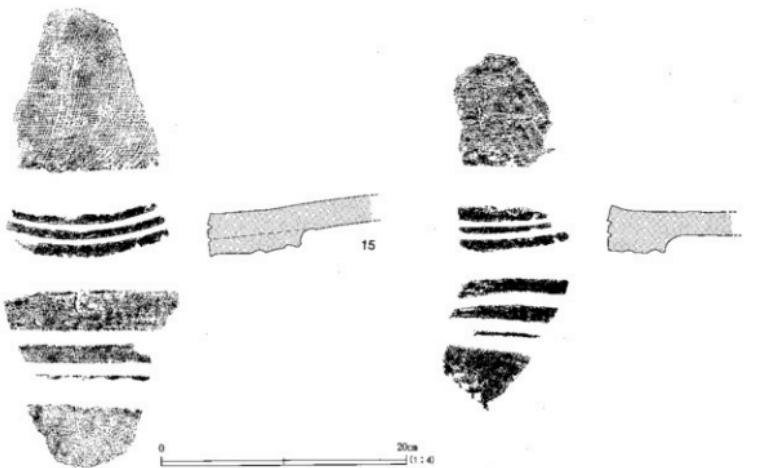
VII b類 (13) 内区と外区が区切られないもの。2点 (1.6%) 出土。

VII a類とVII b類は、ほぼ同様の部位に範傷がみられる。両者が同範であるならば、囲線のないVII b類から囲線をもつVII a類へ范を作り直すのは理論上不可能であるが、範傷そのものはVII a類の方が多くみられる。また、VII b類の方が各部位の段差、彫りが浅くなっていることから、範傷が進行したためVII a類の瓦当范を薄く彫り直し、内区と外区を分ける囲線を消してVII b類をつくったと考える。

軒丸瓦VIII類 (14) 複弁六弁蓮華文軒丸瓦。軒丸瓦IV類に似る。破片のため推定であるが、蓮子は1+5だと思われる。外縁は直立縁だが、蓮弁部分の地と外縁上面の段差が軒丸瓦IV類にくらべ0.3cm低く、外縁には凸縁による唐草文が巡る。瓦当の側面に楔型の痕を残す。丸瓦の接合位置は、IV類と同様に低く、凹凸両面に粘土を補充し接合する。瓦当裏面はナデ。直径は約16cm、厚さは中房で2.0cm、外縁で2.3cmである。胎土は密で、0.1~0.4cmの砂粒多く含む。焼成は普通で軟質、色調は表面が黒褐色で、断面は黄褐色。5点 (4.1%) 出土している。

軒平瓦 過去4型式知られていたが、今回新たに1型式確認し、合計5型式6種類、合計137点確認した。

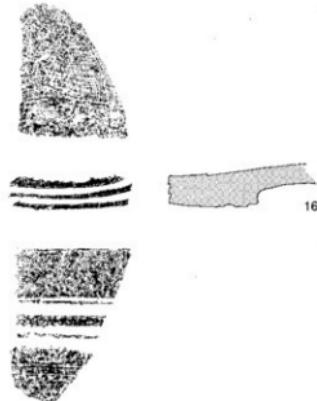
軒平瓦I類 (15~17) 三重弧文軒平瓦。弧文は先端の鋭利な工具で削って作られると考えられ、深くV字状を呈する。顎は段顎で、顎面にはナデによる凹縁が2条施される。顎は粘土板の貼付けで作られ、顎面および顎の貼付け部分はナデによって調整される。凹面は基本的に布目のままだが、部分的に布目を消すものもある。布目は粗い。側面は凹面側から面取りされるが、2面とも平瓦のカーブに対して直角になっていない。(16・17)



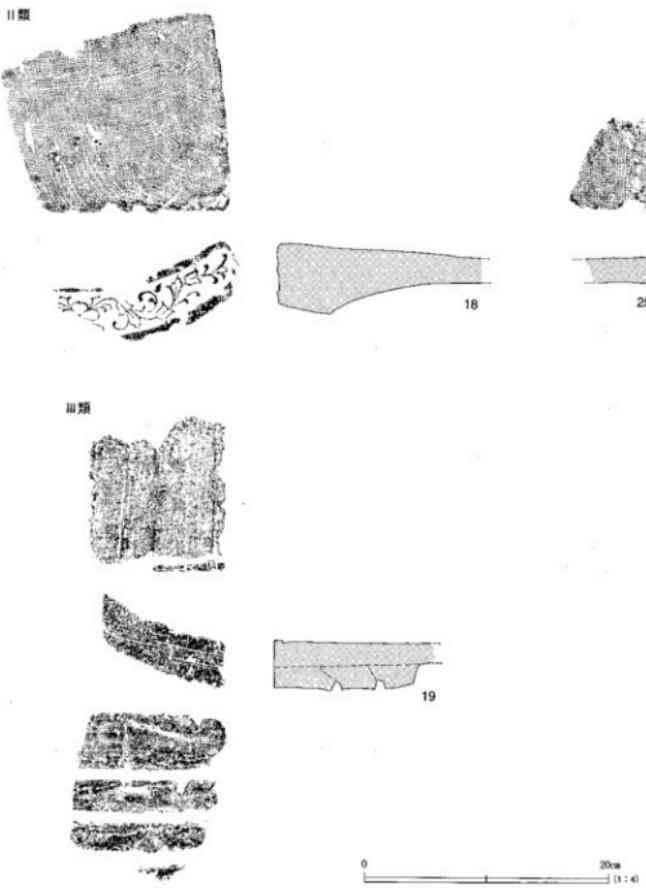
のように、極端に瓦当の厚さ、顎の深さが違う個体もあるが、技法、胎土などは同じである。厚さは瓦当面で2.3~4.3cmと、個体差がみられるが、3.3~3.7cmのものが多数を占める。胎土は密で、0.1~0.5cmの砂粒を非常に多く含む。また、黒褐色の粒子も含む。焼成は良好で、硬質である。色調は淡褐色から淡暗灰色。24点出土（17.5%）している。

軒平瓦Ⅱ類（18・25） 均整忍冬唐草文。中心飾りは欠損のためはっきりしないが花形のものと思われ、そこから延びる蔓には花弁・萼・蕾が表現される。顎は曲線顎で、瓦当面から4cm程度の位置に陵が作られる。瓦当面から陵までは横方向のヘラケズリ、陵から後ろは縦方向のヘラケズリである。凹面は布目のみまで、布目はやや粗い。側端面は2次的なカットにより整えられ、瓦当部分では1面になっているが、平瓦部分では前段階のカットと角度の差がみられる個体もある。狭端面は、基本的にヘラ切り、ヘラケズリで調整するが、25のように凹面から狭端面凸面側まで連続して布目が残る個体もある。厚さは瓦当面で5cm。胎土は0.1~0.7cmの砂粒を多量に含む。また、赤褐色の粒子もわずかに含む。焼成は悪く軟質で、色調は黄褐色から淡褐色だが、表面のみ黒褐色になる個体もある。軒平瓦の合計137点の内、軒平瓦Ⅱ類は73点（53.3%）出土しているが、ほとんどが小片のため実際の個体数としてはその割合よりも少ないものと考えられる。

軒平瓦Ⅲ類（19） 無文軒平瓦。瓦当面は横方向のヘラケズリで調整されるが、調整が甘く、丸瓦35と同様の成形時についたと考えられる植物の圧痕が残る個体もある。顎は深い段顎で、顎面に断面コ字状の凹線を二条施す。顎は粘土紐の積み重ねにより作られ、顎面は横方向のハケメ調整。凹面は布目のみまで、布目は非常に目が



第14図 軒平瓦Ⅰ類

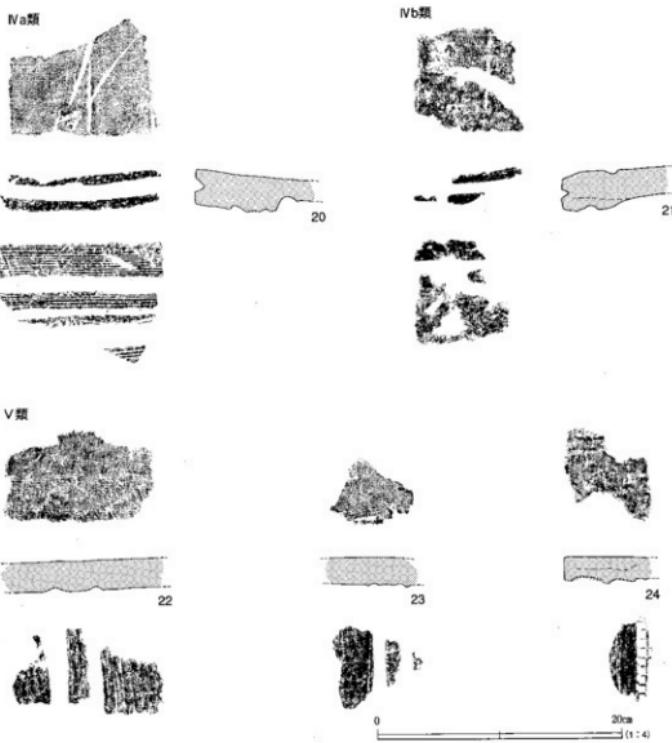


第15図 軒平瓦Ⅱ・Ⅲ類

細かい。幅2.5cm程度の模骨の痕がよく残る。側端面は凸面から幅広に面取りされる。厚さは瓦当面で3.8cm。胎土は密で、0.1~0.4cmの砂粒、黒色の粒子を多量に含む。焼成は良く硬質、色調は淡灰色。15点（11%）出土している。

軒平瓦Ⅳ類 二重弧文軒平瓦。額の様子で2種類に細分できる。弧文はヘラ切りによって作られ、深くV字状を呈する。凹面の布目は非常に細かく、また、凹面にはかなり幅広な模骨の痕と考えられる段差が残る。

IV a類 (20) 段額であるもの。額は粘土板を貼付けて作られ、額面はハケメ調整された後、ナデによる凹線が二条施される。額の貼付け部分も強くナデられている。弧文の溝をつくるヘラ切りは凸面側が先である。厚さは瓦当面で2.9cm。胎土は0.1~0.7cmの砂粒を多量に含み、黒色の粒子も含む。焼成は良く硬質で、色調は淡

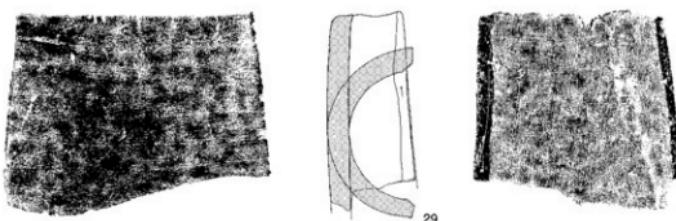
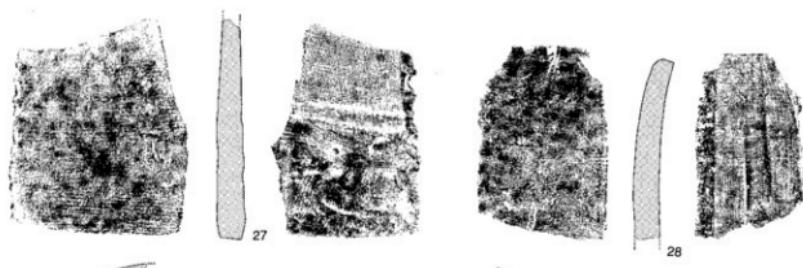
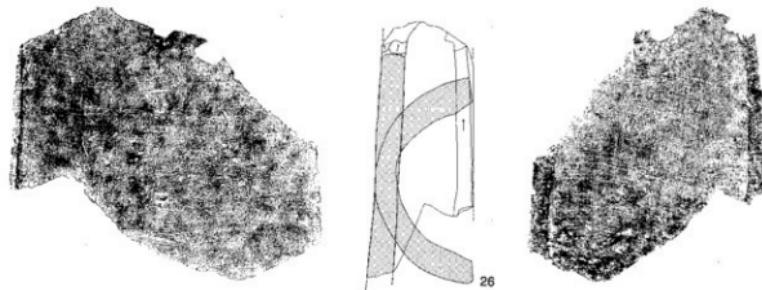


第16図 軒平瓦IV・V類

灰色である。IV a類の可能性がある破片も含め2点のみ(1.5%)の出土である。

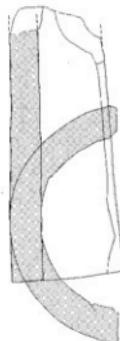
IV b類(21) 曲線頭であるもの。頭はわずかな粘土の補充によりつくられ、頭面及び平瓦凹面はナデ調整である。頭面には強いナデによる凹線が一条施される。弧文のヘラ切りは凹面側が先である。瓦当面は凹面側から面取りされる。また、平瓦の側縫面は、凸面側から面取りされる。厚さは、瓦当面で3.7cm。胎土は0.1~0.3cmの砂粒を多量に含み、茶褐色の粒子も含む。焼成は普通でやや軟質、色調は淡褐色から茶褐色である。2点のみ(1.5%)出土。

軒平瓦V類(22・23) 平瓦凸面に強いナデによる凹線を2条施すものがみられる。出土した全平瓦のなかに軒平瓦I類~軒平瓦IV類以外の瓦当がみられないため、普通の平瓦の凸面に施文しただけのものと考えられる。すべて小片のため、凹線が広端部もしくは狭端部からどのくらいの位置に施されるのか明らかでないが、この2条の凹線を頭面文と考え、軒平瓦V類としてあつかう。凸面は板状の工具で横方向にナデられた後、施文される。凹面は布目のままで、布目は細かい。側縫面は凸面側から面取りされる。厚さは1.8~2.3cm。胎土には0.3cm程度の砂粒を非常に多量に含む。焼成は良好で硬質なものから悪く軟質なものまでかなり幅があり、色調も淡黒



0 20cm
(1:4)

第17図 丸瓦 1



30



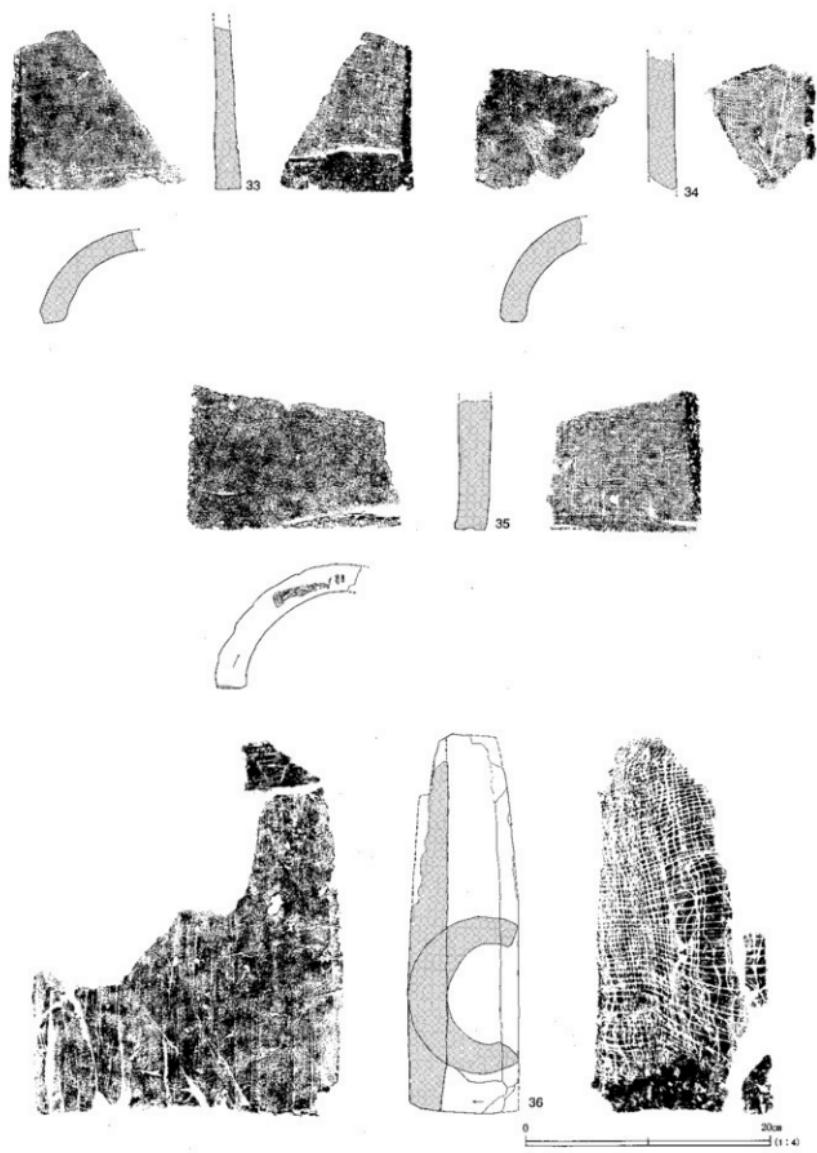
31



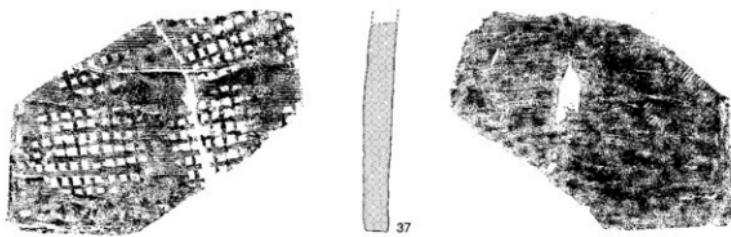
32

0 20cm (1:4)

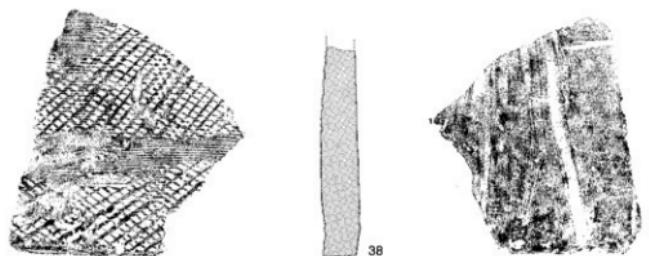
第18図 丸瓦 2



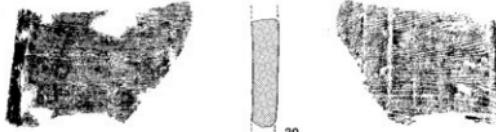
第19図 丸瓦 3



37



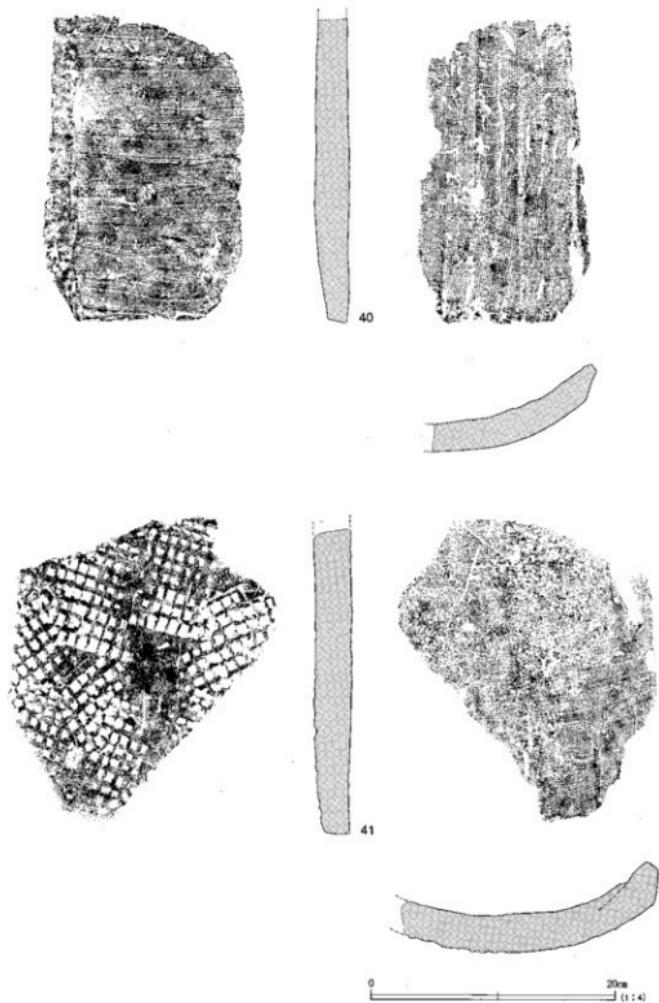
38



39

0 20cm (1:4)

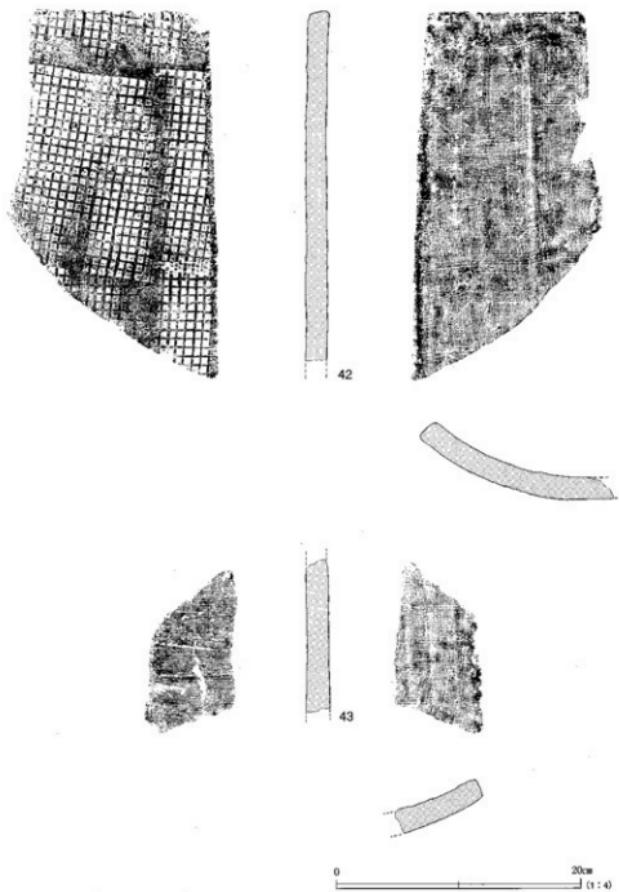
第20図 平瓦 1



第21図 平瓦2

灰色のものから灰白色のものまである。21点 (15.3%) 出土している。

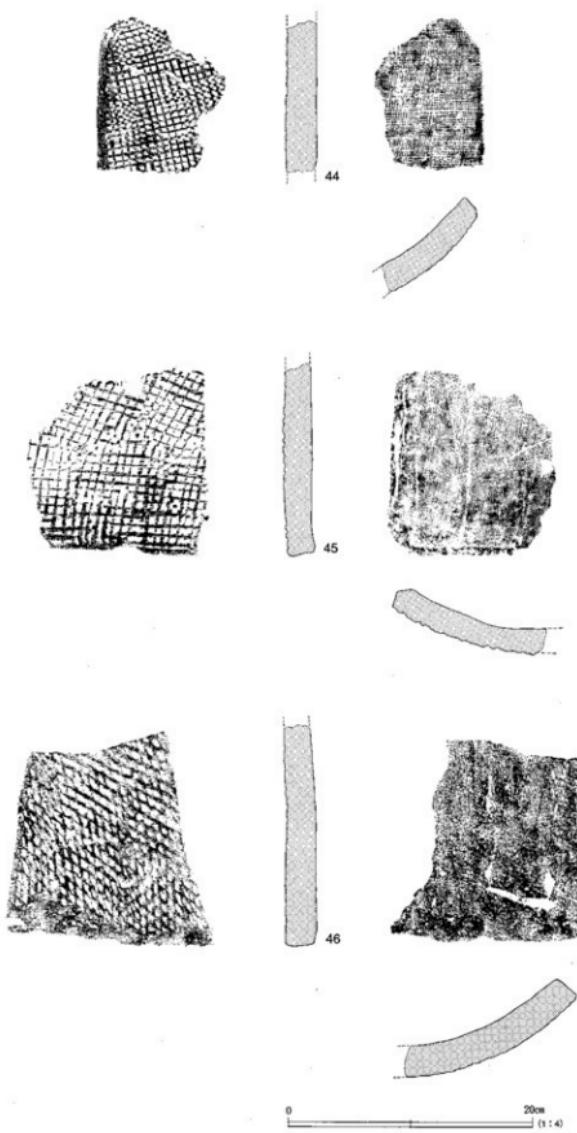
また、それ以外にも平瓦先端に粘土を貼付けた個体 (24) がある。軒平瓦の可能性が考えられるが、1点のみの出土であること、頸に当たる部分が剥落しており全体像がつかめないことから、可能性を指摘するだけに止める。



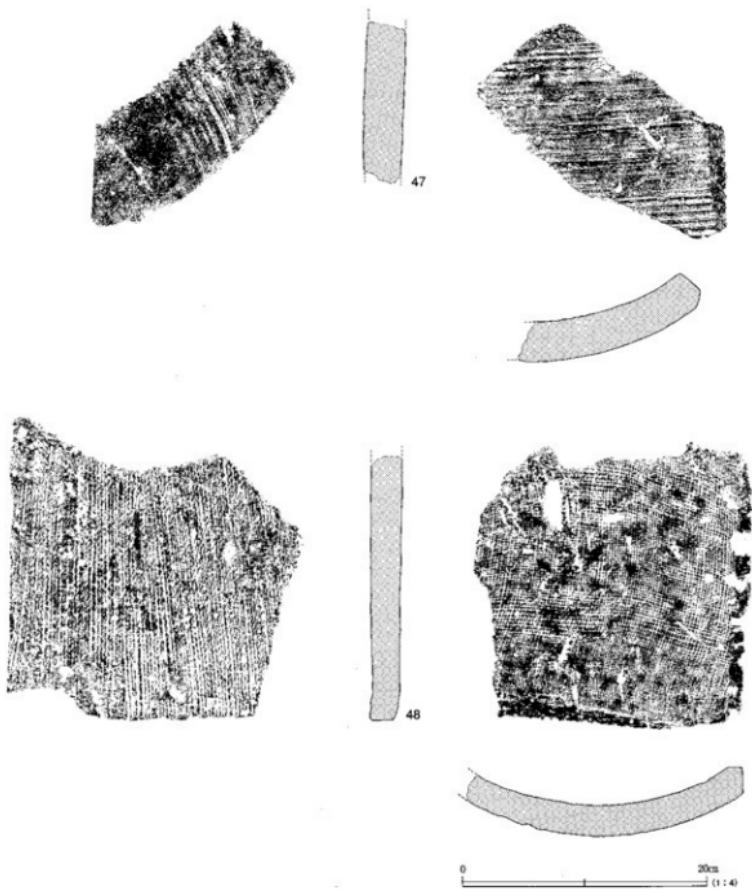
第22図 平瓦 3

丸瓦 (26~36)・**平瓦** (37~49) 叩き原体、各端部の調整などについて観察したが、小片が多数を占めることもあり型式分類をするまでには至らなかった。したがって、図化したものがすべての種類ではない。以下特徴的な事項のみを述べる。

○丸瓦は36以外はすべて行基式（無段式）である。基本的にすべての丸瓦凸面はナデ調整、ハケメ調整される。○軒瓦との比較 27は軒丸瓦I類と、凸面に2~3mm間隔のやや目の粗いハケメ調整を施す点、硬質で良好な焼成などが共通する。37は軒平瓦I類と、38は軒平瓦IVa類と、それぞれのタイプの破片に軒平瓦と同一個体のものが認められる。39は軒平瓦III類と、凸面に1mm間隔の目の細かいハケメ調整を施す点、砂粒と共に3mm程度の黒色もしくは赤褐色の粒子を多く含む点、凹面布目が細かく、幅2.0~2.5cmの模骨の痕跡をよく残す点



第23図 平瓦 4



第24図 平瓦 5

などが共通する。42は軒平瓦V類と同様の板状工具で凸面を調整する点が共通する。

○40のように、平瓦広端の隅部分をわずかにカットするものがみられる。これは、40と同じ胎土、調整のものにしかみられないこと、点数的に多くみられること、どの破片も同じようなわずかなカットであることから、屋根の隅に用いるための整形ではなく、この型式特有の技法であると理解する。

○35のように、広端面に植物の圧痕が残るものがある。基本的に広端は他の端部と同様にヘラ切りしてつくられるが、圧痕がみられるものもヘラ切りは行われている。この圧痕は、粘土の離れを良くするために丸瓦、平瓦の成形台の下（粘土板の接地する所）に台の裾にそって草を敷き成形したものが、調整時のヘラ切りが薄かつたた



第25図 平瓦6・面戸瓦・鶴尾

つ。突帯の基底部の幅は2.7cmである。突帯の両脇はナデ調整。裏面もナデ調整。綾帯の一部とも考えられるが、鶴尾自体が湾曲していることなどから、いま一つ決め手を欠くように思われる。厚さは3.5cm。その他の破片も内外面ナデ調整だが、ナデが粗く、表面が波うっている。51は塔の北東にある瓦窯（第3次T5）から出土した。他は、塔周辺から2点（第5次T4）、寺域の南側にある地下式横穴から1点（第6次T6）出土した。（西平）

2) 須恵器

須恵器については器種別に比較した後、出土位置ごとに説明を加える。

古墳時代タイプの蓋坏、いわゆる坏Hの出土点数は多いものの、セット関係を示すものは無かった。天井部及び底部の回転ヘラケズリの省略は顕著であり、蓋坏類破片全体をみても1割程度にしかヘラケズリはない。口径は13cm以下で縮小化の傾向にある。以下、図化したものを中心に述べる。

坏H蓋（1・2） 1は天井部と口縁部との境界に浅い凹線を2条めぐらす当地方特有のもので1点のみ。口端部内面にも凹みがめぐる。1の外側「X」のヘラ記号。2は天井部外周のみヘラ切り。図化していないが外面に細い沈線を1条めぐらすものが目立つ。

坏H（3~10） たちあがりは矮小化し、たちあがりの長く伸びたも内傾著しい。3・8は深い体部をもつが、たちあがりの短さは他と変わらず蓋のかえりに近い。全体が浅く偏平な4~7・9は蓋との判別が困難である。底部ヘラ切り不調整でヘラ切り後ナデを加えるものは4・5。4は底部外側全体に指頭圧痕を残す。6はブクの破裂、8は焼き歪みの不良品。10の外側は斜格子状のヘラ抜き。口径9.2~10.8cm。8は講堂P 8振り方上層出土、1/3片。

坏G蓋（11~16） 口縁部内面にかえりをもつ小型の蓋でつまみは上面の平らな乳首形。出土点数が多い。かえりが口縁端部と同じかわずか下方に突出する11~14と、突出しない15・16とある。15のかえりは鋭い稜をなす。16のみ天井部外側ヘラ切りのままで、他は逆時計まわりのヘラケズリ。11のケズリの範囲は口端部に近い。口径7.6~10.4cm。法量値を最も縮小した段階のものと推定される。11・12・14・15は講堂出土。16は講堂整地層出土。

坏G（17~22） 形態・手法とも坏H蓋と変わらない蓋坏逆転した17~20と、口縁部が直線的に伸び底部から屈曲する21・22がある。17は底部外側を丁寧にヘラケズリしたもので、蓋か坏か判別しがたい。他はヘラ切り不調整でつくりは粗略。22は底部外周2周のみヘラケズリ。18の底部内面「X」のヘラ記号。19の口端部に油煙付着。口径8.6~10.8cm。17・19は講堂出土。

宝珠つまみをもつ段階の蓋坏は小片で全形を知りうるものはわずか2点（23・24）である。セット関係のわかるものもなく坏A・B蓋をまとめて記す。

坏A・B蓋（23~29） 23は端正な算盤玉形の宝珠つまみと退化したかえりをもつ偏平な大型の蓋。天井部には3条の界線の間に櫛状工具による刻み目をめぐらせた装饰性の高いもの。口径15.6cm。24のつまみは上面のくぼむボタン状。25・26は器高低く天井部から口縁部まで平らにつくる。26は壺瓶類の蓋か、口径6.4cm。23~26は焼成良好で自然釉がかかるか光沢をもつ。27・28は大型厚手で偏平化した宝珠つまみと厚いボタン状のつまみが付く。焼成とともにあまい。29は口端部を下方へ短く屈曲させて内面に膨らみをもたらすもので、朱墨が内面全面に付着している。焼成不良・軟質で硬に不向きであり、墨滴ないし硯蓋の可能性がある。なお、かえりをもたないこの種の破片は細片3点と少ない。29は講堂P 2振り方上層出土。27・28は講堂整地層出土。

坏蓋（30~34） 30・31は環状つまみの蓋で当地方特有のもの。30の天井部は低い。31は口端部を下方に折り曲げた偏平なもので他に2片ある。31の天井部内面炭化物（油煙？）付着。30・31とも講堂出土。

32~34は半球状の天井部で鏡を模倣したとみられる。32のつまみは低いが均整のとれた宝珠つまみ。33の口端部は肥厚して角張り内側にかえりが付く。焼成良好で濃緑色の自然釉が厚くかかる。34は口縁部を外方に折って罐面をつくり沈線をめぐらして下縁は稜をなす。天井部外側逆時計まわりのヘラケズリ後ヨコナデか。薄手で堅緻に焼締まるが胎土は粗く一部焼き歪む。器面はザラザラとした光沢のない深緑黒色で、一見して非須恵器的である。胎土分析を行っていないが、朝鮮陶質土器（新羅焼）（文献7）の可能性がある。口径33は14.8cm、34は

18.0cm。34は講堂P2掘り方上層出土、1/4片。

坏B(35~40) 高台付坏。35は外方にふんばったやや低い高台で、外方に凹面をつくり下端部内側に稜をなす。体部と底部との境界は逆時計まわりのヘラケズリ。内面「×」のヘラ記号を深く刻む。36は高台薄手で端部わずか外方に折れる。底部内面を覗面とし、内外面全体に朱墨痕を認める。講堂整地層出土。37・38は体部と底部との境界に丸みをもち、底部の切り離しは糸切り。39は体部と底部との境界は屈折し、高台は垂直に短く立つ。40は大きく開いた坏部に脚端部の丸い高台が「ハ」の字に付く。底部の切り離しはヘラ切りか。

盤(41) 脚付大型皿で高台は太短ながら外面に反りをもたせる。外面体部逆時計まわりのヘラケズリ、底面連続する刺突が二重にめぐる。底部内外面とも覗面とし特に外面はよく使用され光沢をもつ。講堂P1付近出土。

陶硯(42) 円面硯の側縁に貼付けた筆立て部分。8角に面取りした柱状の下端を本体に押しつけて付ける。上面直径約1.7cmに一辺0.9cmの方孔を有す。焼成良好、一部暗黄緑色の自然釉がかかる。金堂外西の表土出土。

続けて硯について記すと、転用硯は、上記の坏B36・盤41以外に壺体部破片1点がある。内面を覗面とした3×7cm大の破片で墨痕を残す。外面平行叩き目文、内面ナデ調整。寺域外西出土(第1次T4)。

坏(43~46) 体部は内湾し口端部は外側に肥厚する、当地方特有の器種で小片のみ。底部の切り離しは回転糸切り。体部1/3に重ね焼きによる焼成色の違いがある。43・44は油煙付着。44は体部割れ口にも油煙が付き、口縁部を欠いた底部片を灯火台として利用している。油煙付着破片は前述した坏G19・蓋31を含め以上4片しかない。

高坏(47~53) 坏部は、外反する長い口縁部と塊状を呈する体部との境界に浅い沈線をめぐらせた47と、大きく開いた浅い皿状の48とがある。前者は坏とみられる破片もある。48は口縁部近くに浅い沈線様のものがめぐる。焼き歪み著しい。坏底部ヘラ切り後ナデ。47は口径11.2cm、講堂出土。

脚部は小型の49、柱状部が細めの51・52、太めの50、柱状部カキ目調整を施し擦部に稜をもつ53と各種ある。50は三角形2方透しで、坏底部逆時計まわりのヘラケズリ。53は坏部と脚部との接合面に3条の深い溝を刻む。胎土精良で色調暗青紫灰色、1/3片。当地方では稀な器形である53は、短脚有蓋高坏として滋賀県大津市太鼓塚5号墳(文獻8)に類例がある。搬入品であるかどうかは時期の相違等問題を含んでいるが可能性のあることを付記しておきたい。51・53は講堂出土、50・52は講堂整地層出土。

壺(54~56) 54は外方にふんばった高い高台で、端部は凹面をなし下端内側に稜をなす古相のもの。55は古墳時代タイプの薄手の直口壺。口縁部近くに沈線1条めぐる。56は体部卵形で低くふんばった高台が付く、いわゆる水瓶形。体部外面下半逆時計まわりのヘラケズリ、底部外面のちヨコナデ。

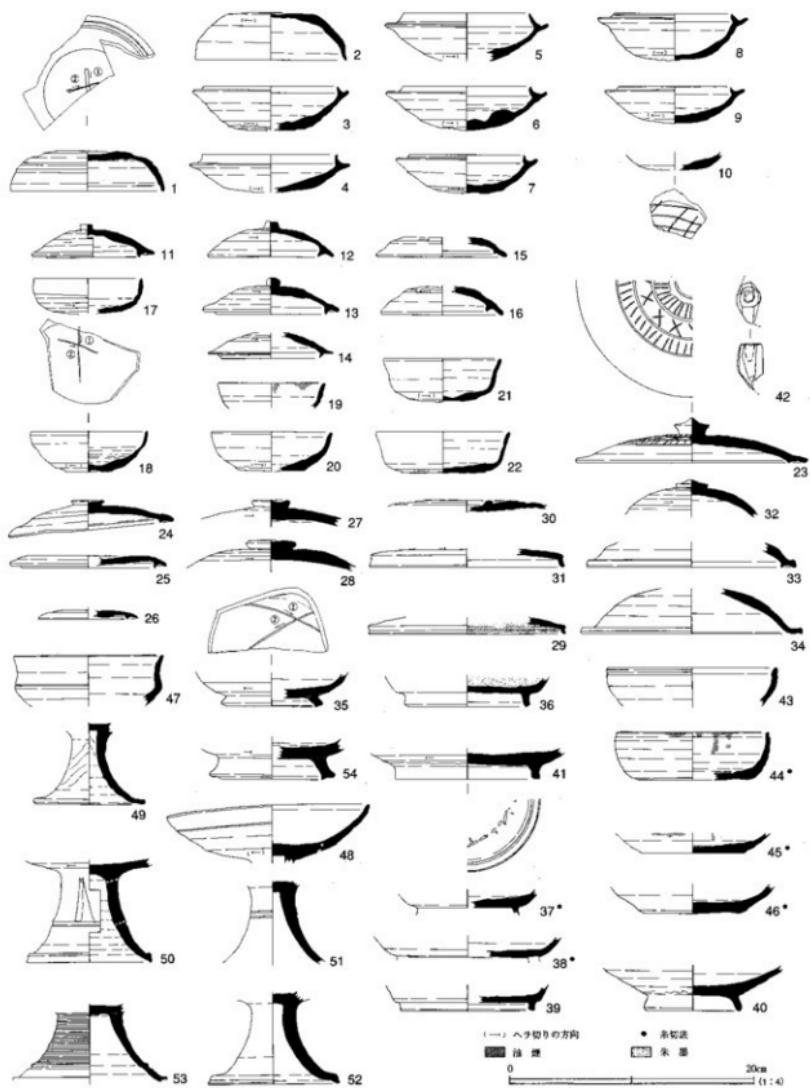
聰(57) 古墳時代タイプの器種。肩部と体部の境界に1条の沈線をめぐらす偏球形のもので、つくりは丁寧。

平瓶(58・59) 58はヨコナデ調整のあまい外反する口縁部。59は丸底の縁に「ハ」の字に高台を付け、高台端部はヘラミガキ様にヘラ先で粘土を削り取って丸くする。底部外面もヘラミガキ様のものが認められ、内面のナデも粗く、土師器的な調整である。出土位置は異なるが58・59は同一個体の可能性もある。

横瓶(60) 外反する単純な口縁。肩部内面同心円文ナデ消し。講堂出土。

鉢(61~64) 内湾する体部に数条の沈線をめぐらせた仏器的器形の61・62と、直線的に開いた口縁部をもつ63・64がある。63の内面平滑。63・64は講堂出土。

甕(65~69) 大小各種あり、破片も十数個体以上と相当量あるが口径のわかるものは少ない。66の頭部外面にはヘラ記号を有す。67は特異なもので、口縁部は段をもたせて鋸い稜をつくりさらに外反させて端部を丸くおさめる。体部外面ハケメ調整のち頭部ヨコナデ。内面ナデであて具の痕跡を留めない。胎土精良、焼成良好。色調灰紫黒色で断面暗赤紫色。1/4片。搬入品の可能性がある。69は大きな平底をもつ体部小片で、体部外面時計



第26図 須恵器 1

まわりのヘラケズリ、底面不調整。内面体部回転利用のナデ。焼成良好、色調暗青灰色。67~69は講堂出土。69の同一個体と推定される破片は講堂整地層と瓦溜（第6次T11）からも出土。

國化していないが、須恵器の中には瓦作りの道具痕を残すものがある。坏底部内面一部に布目のあるものと、壺体部内面に格子叩き目があるもの（図版12-70~72）である。まず、布目痕跡をもつものは、平底の坏底部片と皿状の高坏坏部片の2片があり、ともに講堂外西（第6次T2）から出土している。布目は非常に細かい目で、軒平瓦皿類の布目に相当するものと考えられる。壺体部内面のあて具のかわりに瓦の叩き板が使用されているものは、2種3片ある。正格子叩き目の70はその下に同心円文も認められる。瓦溜（第3次T5）出土。斜格子叩き目の71・72は同一個体と推定され、講堂（第6次T14）・寺域外（第1次T1）出土。瓦の叩き板との比較から70は平瓦の41（第21図）に、71・72は平瓦の49（第25図）に相当するものと考えられる。

須恵器にこのような痕跡がみられるということは、須恵器工人を取り込んだ生産体制、即ち瓦陶兼業窯として創建当初から長い期間にわたって営まれていたことを示し、瓦とともに須恵器の消費が止まる傾向を重視すれば、操業期間を同じくしている可能性が高い。調査地内で窯体片が出土していること、焼歪み品が供給・消費されていることから、窯自体の存在は確認されなかったものの、窯は近い位置に想定されよう。

SB02柱穴埋土から出土した坏H5・6は、たちあがりが細長く内傾し、底部が尖った古い形態を留めながらヘラケズリは省略されている。当遺跡出土須恵器の最古段階を示すもので、陰田6段階（文献9）に比定され陶邑TK17（文献10）より新しい時期が与えられる。SB01付近からも古墳時代タイプの坏蓋1、坏身3、通57が出土しているが、器形の縮小化の進んだ小型の高坏脚部49と新相器種である平瓶58が混在している。いずれにせよ、SB02周辺で古相のものがまとまって出土しているといえる。ここでは、他にはみられない日常用器である竈片が出土しており、創建当初における先行建物の可能性がある。

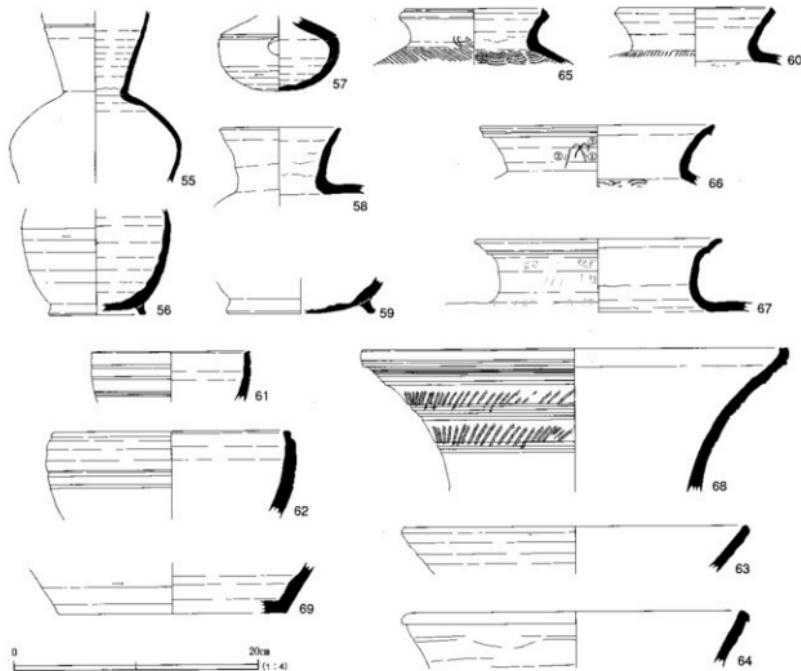
講堂整地層から出土したものには、坏G蓋16、坏A・B蓋27・28、坏B36、高坏50・52、壺69がある。ヘラケズリの省略された16、宝珠つまみを押しつぶした大型の27・28があり、講堂柱穴から出土したかえりの消失した蓋29を含めて考えれば、TK48段階（文献10）に比定される。従って講堂の建てられた時期はおよそ7世紀後葉と推定される。ところが、講堂整地層中には転用硯36が、柱穴内では朱墨付着の29があり、これらを寺院関連の遺物と考えるならば、講堂が建てられる以前に既に寺院として機能していたものと考えられる。
(根幹旨)

3) 土師器

大原磨寺発掘調査（第1次～第6次）において出土した土師器（古墳時代遺物を除く）には、坏A・坏B・柱状高台付坏・壺・竈、そしてごく少量の皿がある。これらの内大多数を占めるのが坏A・Bの浅い小型の坏類であり、まとまって出土するがれも小片であり、図化できるものは少なかった。これらの土師器については原則的に『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』（文献11）に記載の器種分類や調整技法、そして時代区分に従った。土師器の坏の調整には、口縁部をヨコナデし、底部外面未調整のもの（a手法）と底部外面をヘラケズリ調整するもの（b手法）とがあり、ロクロ使用とともに底部の切り離しに糸切り手法が加わる。またナデは、回転運動を利用するナデをヨコナデといい、利用しないナデを単にナデ、さらにロクロを使用したナデをロクロナデとして区別した。

講堂及びその周辺出土 坏A・坏B・柱状高台付坏の破片がある。

坏A（1～5・8～10） 1～5は口径11.6～14.3cm、器高3.4～3.7cmにおさまり、口縁部と底部の形態から2つに分類できる。1～3は、口縁部が長く外傾度が比較的高いもので、底部は回転台によるヘラ切り手法し、ヘラ切りによって生ずる中心部の段を丁寧にナデる。それに対して4・5は、上外方に大きく開く口縁部はヨコナデされ、底部のヘラ切り手法によって生じた段は未調整で残る。（a手法）



塔周辺	2 第6次T7面 14 第6次T2面 45 第6次T5D01 第6次T2	講堂P3 - 41付近 P6裏り方 P15裏出面	64 6 63	寺域内SB01付近 SB02P3 SD04 4号住居付近 西側 南側 地下式横穴 寺域外北面	1・3・24・49 57・58 第6次T3 6 5 11・65・66 59 第6次T4 20 第6次T1北 40 第6次T6 10・21・25・35 38・46・55 第6次T2
塔・講堂間	33 第6次T8 42・43 第6次T6西	講堂下垂地層	16・28・30・36		
金堂周辺	9 第6次T6鉢土	講堂周辺	13・48 第6次T2 27 第6次T2サブレンチ 53 第6次T2・8 60 第6次T7		
金堂・講堂間	12・15・51・67 第6次T8	礎石建物	7 第6次T3 26・54・61 第6次T4		
講堂	17 第6次T8・9 19 第6次T3 47 第6次T2 68 第6次T2 T8西端サブレンチ	塔の外東側落ち段	32 第6次T11 瓦罐第6次T11		
P1付近	41		4・62 23 第6次T5・第6次T10		
P2裏り方上層	29		第6次T5	22・37・39・44・56	
P3付近	31・34 第6次T3 69 第6次T3・11・14		第6次T8	18	

第27図 須恵器2

8~10は、口径7.8~11.8cm、器高1.9~3.4cmで、小型（8・10）と大型（9）の壺がある。口縁部は、口クロナデにより大きく上外方に開き、底部は回転糸切り手法が施される。8・9は口縁部内面を中心に油煙の付着が顕著である。なお9は、小型の皿とする可能性も考えられる。

壺B（6・7）ともに底部の破片で、口縁部の形態・手法は不明。口縁部はヨコナデされ、6は断面三角形、

7は外側に外反する高台が付く。丹塗は6に見られる。

柱状高台付坏（11） 底部破片である。回転糸切り手法を呈する底部を有する。削出しによる柱状高台をもち、高さは1cm、底径は6cmを測る。

礎石建物及びその周辺出土 坏A・坏B・柱状高台付坏の破片がある。 図化できる破片は少なく掲載は2点だけである。出土した小片の土師器から、出土遺物の傾向をみると、伯耆国庁の土師器第2段階のSK05様式に比定できるものから、SD35様式に比定できるものまで存在する。さらに柱状高台付坏を含め回転糸切り底の坏も存在する。

坏B（12） 断面三角形の高台が付き、茶褐色の丹塗が施される。内面底部までおよぶ油煙の付着が認められる。

柱状高台付坏（13） 1.4cmの断面台形状を呈する柱状の高台が付く。

金堂及びその周辺出土 全体的に出土量が少なく、坏A・坏Bの破片が存在する。図化できたものは坏A33があり、ヘラ切りの段をそのまま残す。出土する遺物の傾向は、SK05様式に比定できるものが存在し、回転糸切り底の坏A、さらには柱状高台付坏も少量存在する。

塔及びその周辺出土 全体的に出土量が少なく、図化できるものはなかったが坏A・坏Bの破片が存在する。出土する遺物は、金堂出土の土師器と同じ傾向が窺える。

瓦溜・落ち段及びその周辺出土 坏A・坏B・柱状高台付坏・壺の破片がある。 瓦溜が廐窓穴であり、その出土量は比較的多く、須恵器・瓦類とともに相当数を数える。掲載分は坏Aが中心であった。

坏A（14~32） 14~26は口径11.0~15.3cm、器高2.8~4.1cmを測り、全ての土器に茶色味を帯びた丹塗があり、塗彩は薄くハケ塗りの痕跡を残す。ほぼ2グループにまとまり、口径比（器高／口径）も、26前後と32前後の数値を提示し2グループを示す。前者の14~18・24は、口縁部が短く口縁部の外傾度が大きく、回転台を利用した成形でありヘラ切りによる段を丁寧にナデ調整し平坦にする。また後者の19~23・25・26は、口縁部が大きく外傾し、狭く丸みをもつ底部からなる。底部は回転台によるヘラ切り手法後は、外面未調整でヘラ切りの段をそのまま放置する。時期的には前者が伯耆国庁の土師器第2段階SD37様式に比定でき、後者がSK05様式に比定できる。

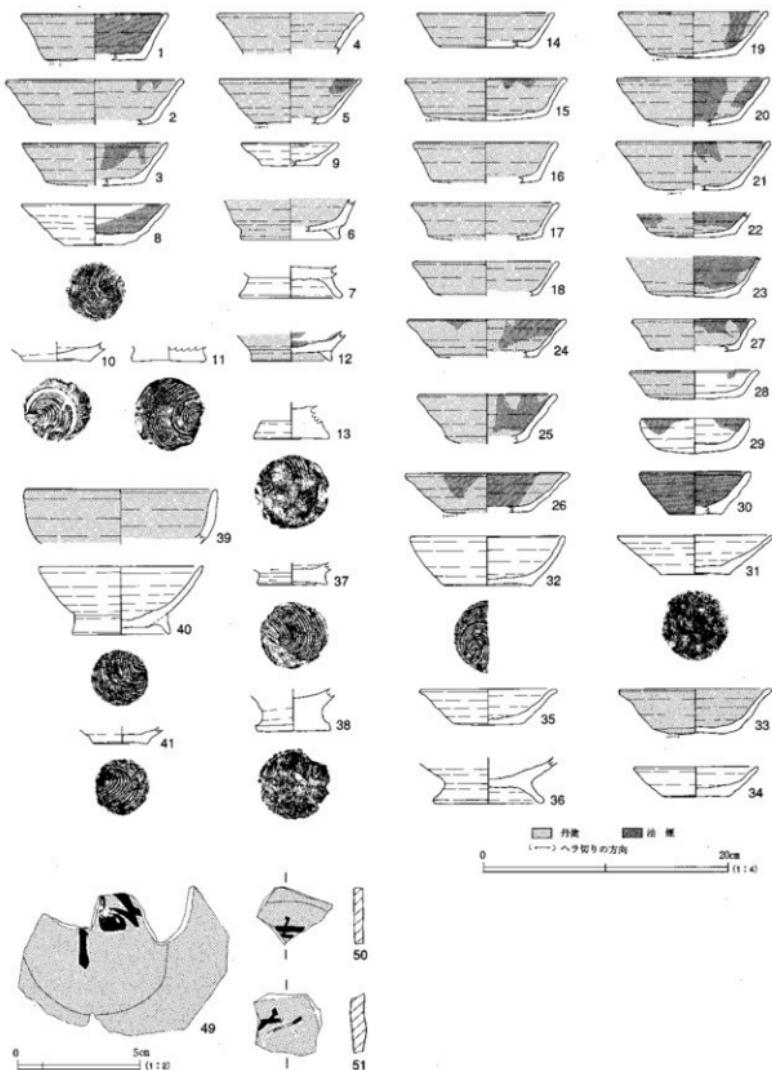
27~29は、口径8.9~10.3cm、器高1.7~2.9cmを測る小型のものである。形態的に2つに分類が可能で、27・28は、口縁部が短く器高も低いもので、底部は回転台によるヘラ切りの段を未調整のまま放置する。それに対して29は、器厚が厚く底部はナデ調整で丸みをもつ。

30~32は、口径8.8~12.6cm、器高3.1~4.1cmの底部回転糸切り底の坏Aである。内済気味に外傾する口縁部と大きく外傾する口縁部があり、底部は平底あるいは内側にくぼむ底からなる。口縁部外面はロクロナデされ、底部は回転糸切り底を呈する。

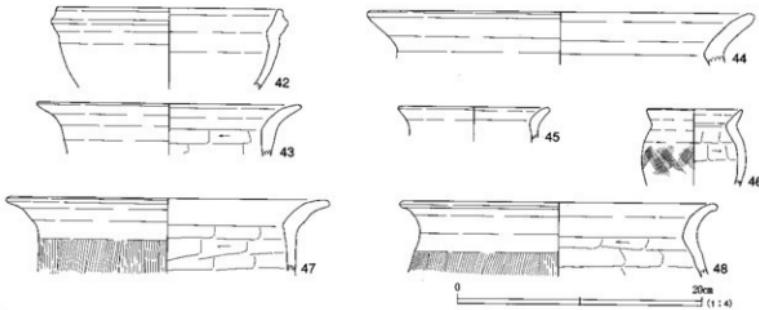
寺域内出土 第3次調査出土や寺城南西隅出土のものがあり、坏A・坏B・柱状高台付坏がある。坏Aには、大きく外反する口縁部と、底部a手法で調整され、ヘラ切りの段をそのまま残す33と、ロクロ成形され底部回転糸切りによる34・35がある。坏Bには大きく外反する高台を有する36と柱状高台を有する37・38がある。

寺域外出土 寺域の南西に延びる幅の狭い丘陵尾根から出土する。伯耆国庁土師器第1段階に比定できる坏A（39）や、回転糸切り底の坏A（41）や坏B（40）がある。

甕（42~48） 讲堂底部・讲堂基壇及び讲堂周辺、そして塔南側を含む寺城内から出土する。外傾する口縁部と半円形の胴部からなる甕。いずれも小片で、全形を復元できるものは少なく、図化できるものも僅かであった。口径によって大型の甕と小型の甕がある。口縁部の形態は、若干の違いはあるが概ね「く」の字状に外反する口縁部。胴部外面は、器形の違いを問わず縦方向のハケ目調整を施し、口縁部分直下はヨコナデする。42は、口縁



第28図 土師器 1



講堂	47 第2次T1南	講堂P6付近	42	瓦瀬第6次T11	14~23・27・49~51
会堂周辺	33 第3次T6北側1	P13振り方	3	第3次T5	28~30
講堂	4 第6次T14	周辺	7・8 第2次T3	第3次T8	34~36
	43 第6次T4北側	磯石建物P6	45・46 第6次T2	寺城内S601付近	37
P1付近	44	周辺	13 第3次T7	南側	38・48 第4次T1
P1より上層	2・5・6	塔の外東側落ち段	26・32 第6次T4	寺城外北側	41 第3次T1
P2振り方上層	1・10		24・25 第6次T11		39・40 第3次T2
P4付近	9		31 第3次T9下層		
P5振り方	11				

第29図 土師器 2

部直下をやや肥大させヨコナデ調整を施す焼である。口径は7.6cm~30.8cmを測る。

墨書き土器（49~51） 土師器の坏底部外面に文字を墨書きしたものが、瓦瀬から3点出土した。49は、漢字の下半分。50は、漢字の冠部分。51は、漢字の一部。いずれも判読不能。

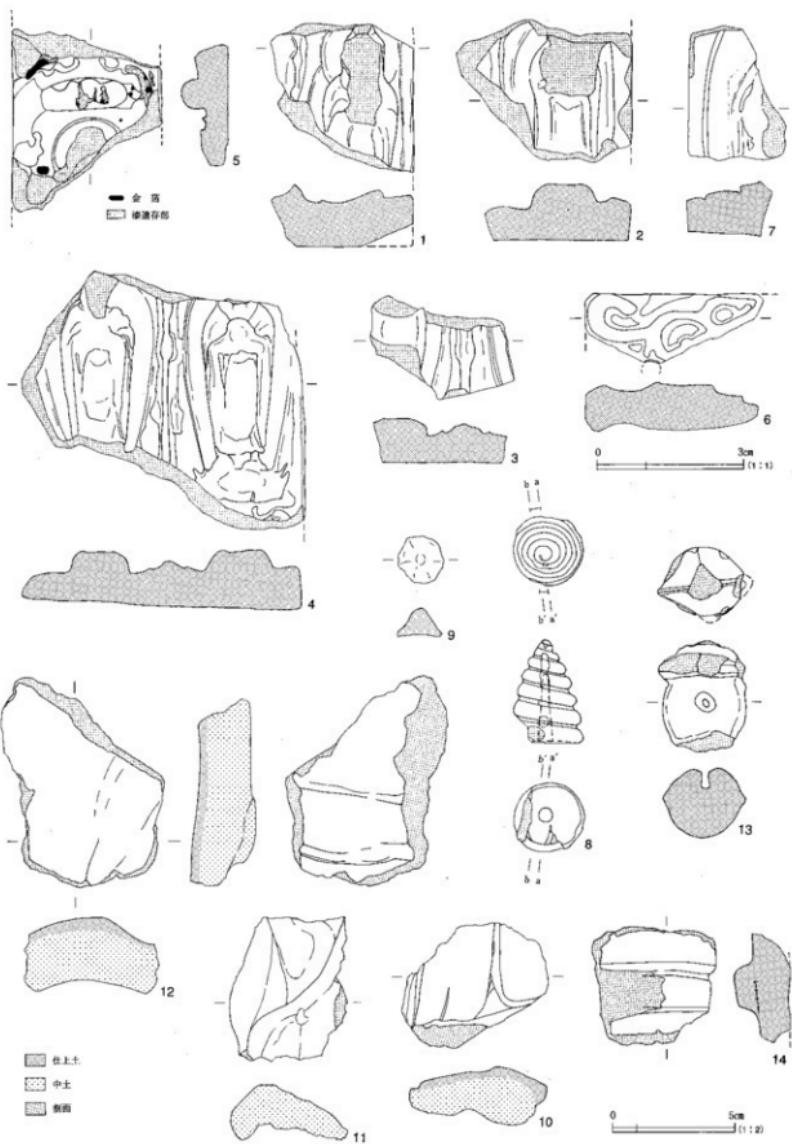
(森下)

4) 塚仏

第1次から第6次までの調査で、合計7点出土しているが、すべて破片で完形品はない。

1~4 如来形の立像が連続して並ぶ点、如来は両手を腹前で合わせ、宝珠状のものを捧持する点、光背の形状などから、伝福寺や朝妻寺、佐野庵寺に見られる、方形の壇面に如来立像を二段三列に配する六尊連立塚仏であると考えられる。いずれも胎土は精良で、色調は淡褐色から淡橙褐色。裏面はヘラケズリ。1・2は両者とも右端を側端とする。1は頭部から腹部の破片。光背の段差などにわずかに漆が残る。焼成はやや良い。縦2.6cm、横2.9cm、厚さ0.9~1.3cm。寺域西側を画する段の下（第1次T4）から出土。2は頭部から脚部の破片。焼成は悪い。縦2.9cm、横3.6cm、厚さ0.6~1.2cm。塔心礎の北側約15m（第5次T2）から出土。3は尊像の脚部から右肩の尊像の光背までの破片。焼成はやや悪い。図様は不明瞭で、尊像の間の花文はわずかな高まり程度でしかない。縦2.1cm、横2.9cm、厚さ0.6~1.2cm。塔心礎の北東約10数m（第3次T5）から出土。4は、右端が側端で、かつ蓮華座の下に忍冬文が巡ることから、二段三列に配される尊像のうち上段中央の尊像から右端までの破片である。焼成は悪い。裏面わずかに波うつ。縦5.2cm、横5.8cm、厚さ0.6~1.5cm。寺域北側（第1次T1）から出土。1・2は尊像から側端までの距離が短く、尊像の向かって右半分の光背がカットされてしまっている。厚さは、1だけが他に比べて厚い。

5 尊像の頭部から天蓋にかけての破片で、左右とも側端である。欠損部があるため断定は難しいが、図様は六尊連立塚仏と同じと考えられ、六尊連立塚仏の一列分だけを切り離して使用した可能性が考えられる。天蓋を中心には細かい目の（縫糸13~15本/cm、経糸9~10本/cm）布目が残る。胎土は精良で、1mm大の砂粒・茶色粒子をわずかに含み、焼成は普通、色調は黄褐色。縦3.9cm、横3.0cm、厚さ0.5~1.0cm。講堂東辺にある瓦瀬（第6次T3）から出土。



第30図 塚仏・塑像・泥塔・瓦塔

6・7 現在まで知られている型には当てはまらないが、厚さ、胎土などは上記博仏に似ており、この項で扱う。ただ両者とも新型式の博仏かどうかは小片のため保留しておく。6は隅部の破片。図様は唐草文だと思われる。隅から2.0cmの所に釘穴が設けられる。胎土は他の破片に比べわずかに粗く、雲母を含む。焼成はやや悪い。色調は黄白色。縦1.4cm、横3.5cm、厚さ約0.7~1.0cm（裏面がほとんど剥離しているため推定）。塔心礎の北東約10cm（第3次T5）から出土。7は、2条の沈線で縁取られるわずかな隆起帯がゆるやかに弧を描くため、光背とも考えられるが、表面の磨滅が激しく、また、小片で全体像がわからぬいため、はっきりとしたことはわからない。裏面も磨滅しているが、わずかに凹凸が認められる。胎土は精良、焼成は悪く、色調は淡暗褐色。縦2.8cm、横2.0cm、厚さ0.6~1.1cm。礎石建物南東隅（第5次T6）から出土。

(岡平)

5) 塑像

第1次から第6次の調査で、図化した5点以外に塑像の可能性がある小片が8点、合計13点出土している。螺旋（8）以外は種別、部位とも不明である。

螺旋（8） 型によって作られている。円錐形で、高さは4.3cm、底径は2.9cmに復元できる。螺旋は曲線的な凹凸で表現され、巻き数は7。2か所に（図中a、a'の左側）バリが見られる。バリはヘラケズリにより調整され、螺旋の凸部分では消されている。仮にバリの端から鐘まで（図中a～a'、b～b'）を型だと考えた場合、欠損があるため正確ではないが底面積の比が1：1にはならずかたよった位置になる。底面は丁寧なナデ仕上げで、若干上げ底となっており底面中央部で0.1cm浮く。底面には成形時に作られたと考えられる穴がある。穴は直径0.6cm、深さ2.8cmで、穴の内面に付着するものはない。底面の穴はa～a'のライン上にくる。塔心礎から北東約10cmの瓦溜（第6次T11）から出土。

9 精良できめの細かい土（仕上土）だけで作られた突起状の部品である。底面はわずかに上げ底になる。底面は剥がれた面だと考えられるが、底面に膠、漆などの痕跡がみられない。まだ粘土が柔らかいうちに直接接合したものと考えられる。高さ1.2cm、底径1.9cm。講堂（第6次T8）から出土。

10~12 衣文と考えられる破片である。塑土は基本的に荒土、中土、仕上土の3種類が用いられる事が知られているが、胎土に含まれるもの、胎土のきめ細かさによって10は中土と仕上土、11は中土、12は中土と仕上土からなると考えられる。11の裏面にはわずかに荒土が残っているが、それによると荒土は多量の植物質のスサを含むことがわかる。中土は約1.0~1.7cmほどの厚さで、10では水溶性のスサを練り込んである様子が観察される。仕上土は約0.3~0.5cmの厚さである。

12の裏面はその様子から、心木から直接はがれたものと考えられる。心木はゆるやかにカーブを描き、その途中に幅約3cm、深さ0.3cmの浅い溝を彫り込んでいる。その溝にまず中土による粘土ひもを巻き付けてから、その上にさらに同質の中土、仕上土で整形する。心木に彫り込まれた溝の方向と整形された表面の凹凸の方向とが直接関係しないこと、心木に麻糸などを巻き付けた痕跡がみられないこと、中土・仕上土のみで整形され、厚さもそう厚くないことから、心木の溝は、心木の組み合わせ部分の細工の一部、もしくは心木と心木に直接貼付けられる粘土とが剥がれないので工夫かとも考えられるが、小片で全体像が分からぬいため断言できない。

10・12は寺城北側（第1次T1）から出土、11は表探である。

(岡平)

6) 泥塔

13 第6次T3、講堂部分の表土中で1点出土した。泥塔は型によって作られ五輪塔の形をしたもので、火輪部と水輪部が遺存する。胎土は、0.1~0.3cmの砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は暗赤褐色から淡褐色である。大きさは、全体の高さ4.5cm、火輪部高さ1.5cm・幅(3.5cm)・厚さ(2.9cm)、水輪部高さ3.0cm・幅3.4cm・厚さ2.9cmである。側面には型を抜いた時のバリが見られる。水輪中央部に長径0.8cm・短径0.6cm・深さ

0.8cmの梢円形の穴がある。穴は、奥に行くとすばまり、長径0.3cm・短径0.2cmになるが、底近くでは若干広がる。

泥塔の底に丸い穴があるのは、仏舍利に代わる梵字の墨書を納めた痕跡と言われており（文献12）、大原庵寺の泥塔は底面ではなく、側面の穴ではあるが、墨書き片を納めた痕跡である可能性がある。
(加藤)

7) 瓦塔

14 外面に粘土帯を貼付けた瓦質の破片が1片ある。柱貫を表現した塔身軸部の可能性がある。胎土精良。焼成あまく、色調淡白灰色。瓦滴（第3次T5）出土。
(根谷)

8) 金属製品・関連遺物

銅鏡（15）銅鏡片が1点第1次調査T1（講堂と礎石建物の間の北側付近）で出土している。口縁部1／10遺存。口径約13.6cmで、外面には3条の沈線が巡る。

銅製品（16）板状の銅製品が1点第3次調査T5（瓦滴）で出土している。厚さ約0.7cm、幅2～4cm程度ではほぼ平らである。表面は平滑で装飾などは見られない。小片のため原形不明。

鉄製品は、第1次から第6次の調査で計81点が出土した。出土した時点では鏽による腐食が著しく形状の不明なものが多い。鉄釘がほとんどだが、他に筒状の鉄製品、刀子片、鉄錐片等も出土している。

鉄釘（22～32）礎石建物を中心に塔・講堂付近で、総数50点が出土している。全て角状で、頭部の形状から4種類に分類することができる。折りまげて頭部とする折釘A（22～27）、折りまげた頭部が釘身よりやや広がる平釘B（28～30）、折りまげた頭部が径2.4cmの円形の頭部に方0.7cmの釘身からなる平釘C（31）、釘身の幅で二方向に延びる頭部をもつD（32）の4種類である。

釘身の断面は、正方形または長方形を呈しており、0.55～0.61cm角である。完形で出土したものは無いため正確な長さは不明であるが、残存部は最長で17cmある。出土位置は、礎石建物並びに講堂付近に集中する。

他には、筒状の鉄製品17が第5次調査T4（塔心基礎）で出土している。直径0.9cm、残存長4.65cm。また、刀子片が第1次調査T2（18）、第3次調査T9（19）、鉄錐が第3次調査T3（20）、第5次調査T3（21）でそれぞれ1点ずつ出土している。
(岡本)

鰐羽口（33～35）鰐羽口は計3点出土している。33と34は先端部片、35は基部片である。33は、上部復元外径（8.4cm）、上部復元内径（2.0cm）である。外面は縱方向の割りで、先端部と外面には、黒色と黒褐色の物質が付着する。34は長さ（4.8cm）・幅（4.0cm）・厚さ1.0cmで、先端部は丸く、内側に肥厚する。外面と先端部に紫赤色の物質が溶着する。35は底部外径9.4cm・上部外径（7.5cm）、底部内径5.4cm・上部内径（2.4cm）で、基部近くは、指押さえがされ、端部が開く。端部上面は板目が残る。
(加藤)

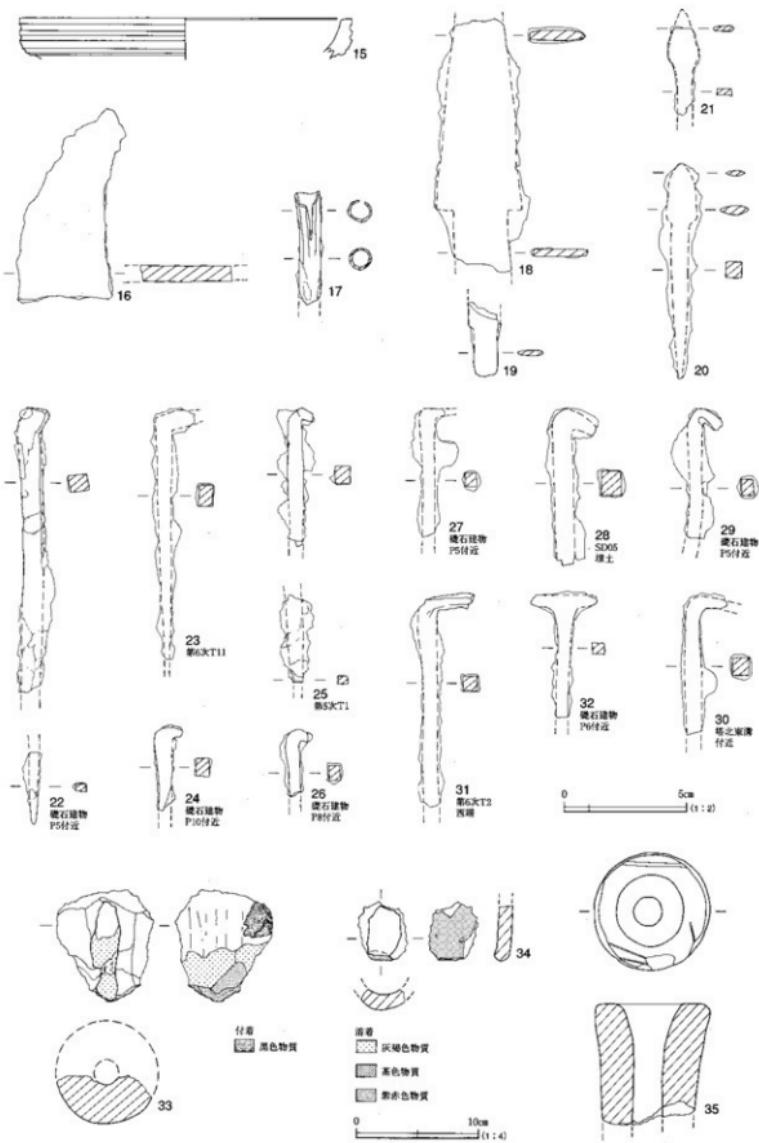
9) ガラス製品・土製品・石製品

ガラス玉（36）第5次調査T2（講堂と金堂の間の東寄り）で出土している。表面は白色に風化し剥離が目立つ。約2／3遺存。最大径1.95cm、孔径0.5cmで、透明感のある緑色を呈する。

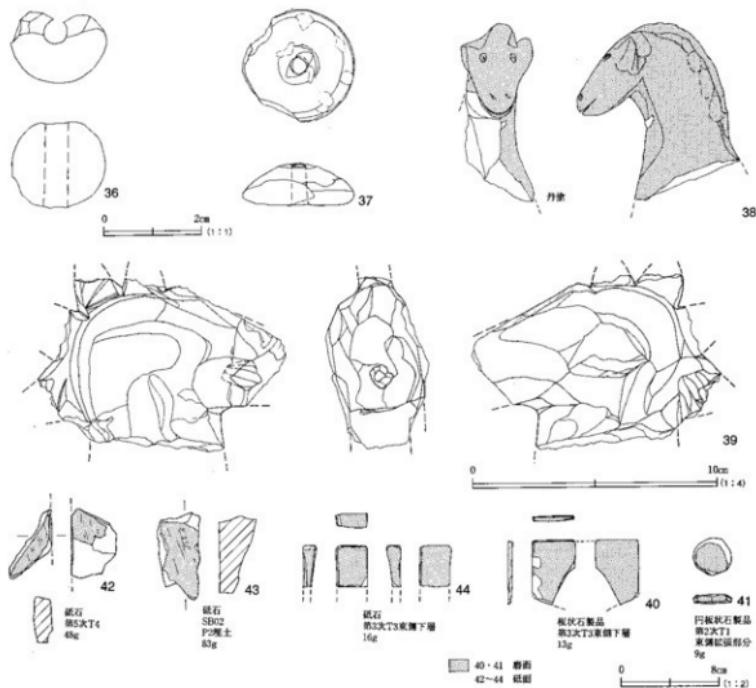
紡錘車（37）還元焼成した紡錘車が、第6次調査T11（塔東側約10m付近）で1点出土している。上面径1.7cm、下面径3.6cm、最大径4.55cm、厚さ1.75cmを測り、断面形は台形を呈する。中央の円孔径0.6cmを測る。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成普通。灰褐色。

土馬（38）土師質の土馬が第1次調査T2で、頭部から頸部にかけてほぼ完形で出土している。残存する規模は頭部の長さ5.6cm、幅2.95cmを測る。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。表面丹塗。

石製品（39）第1次調査寺域西限付近で、動物の頭部と思われる石製品が出土している。長さ約10cm、高さ約6cm、厚さ約4cmを測る。遺存する形態からは動物の種類を特定できない。頭部には、鶴冠様の痕跡が3箇所



第31図 金属製品・関連遺物



第32図 ガラス玉・土製品・石製品

窺えるが、目、耳等の表現は欠損しているため不明。口の部分に深さ1.7cmの穿孔あり。

円板状石製品(41) 第2次調査T1東側拡張部分で出土している。直径約3cm、厚さ約7mmを測る。全面に擦面が施される。用途不明。

碁石(45・46) 45は第4次調査T1で出土。重さ2.6g、長径(1.9cm)、短径1.75cm、厚さ0.52cm。46は、第5次調査T3で出土。重さ3.9g、長径2.45cm、短径1.86cm、厚さ0.55cm。

(両本)

10) その他

寛永通寶(寛永三年・1626年初鋤)が第2次調査T3から1点出土している。直径2.41cm、厚さ0.11cm、重量3.1g。背文なし。永は四画目の筆頭にかぎをもつ。通の一・二画目はマ。寶の最終画はハ。

その他に焼成化した壁片が塔を中心にその周辺で10点出土している。大きさは最大で8×10cm、最小で2×3cm、厚さは0.5~5cmある。仕上げは、表面を丁寧に撫でており平滑である。断面にはスサが認められる。出土位置にまとまりはみられない。

この他、塔、金堂を含む北側の範囲で鉄滓が23点出土したが、出土位置にまとまりはみられない。

(両本)

V 考 察

1 遺物

1) 瓦

発掘調査の進展にともない資料が増加したため、軒瓦を中心に以前の分類、検討を基に再度の整理を試みる。

軒丸瓦

○文様 基本的に複弁八弁蓮華文、複弁九弁蓮華文、複弁六弁蓮華文の3系統に分けられる。

●複弁八弁蓮華文軒丸瓦……I a類・I b類・I c類・II類・III類・V a類・V b類・VI a類・VI b類

どの型式もやや大型である。I類・III類・V類・VI類は、中房は平坦で圓線に囲まれやや大きく、外区に凸線による鋸歯文を巡らせるという共通した文様構成である。そのなかで、I類が最も文様が整いシャープで、他のIII類・V類・VI類はI類の形式化、平面化したものと考えられる。II類は外縁がつくられず他の複弁八弁の型式にみられる線鋸歯文がないが、中房の形状、製作技法は同様である。

●複弁九弁蓮華文軒丸瓦……VI類

VI類の内区の文様構成、具体的には蓮子が1+4であり、蓮弁は小さく複弁で子葉の外側を細い凸線で縁取る点は、寺町廬寺などの備後北部の諸寺院や出雲の神門寺境内廬寺から出土する軒丸瓦（文献13）によく似るが、外縁が比較的高い直立線で線鋸歯文が巡り瓦当の側面をハケメ調整するなど、他の型式にもみられるいわば大原廬寺の伝統的な手法を用いている。

●複弁六弁蓮華文軒丸瓦……IV類・VII類

他の型式にくらべ小型である。IV類・VII類ともよく似た文様構成であるが、外縁がIV類は無文に対しVII類には唐草文が巡る点、蓮子がIV類は1+8に対しVII類は1+5である点など、細部に差がみられる。蓮弁が六弁であること、外区に唐草文を巡らせることは新羅的な要素であるとされているが、VII類の唐草文は蔓のみが表現され花弁・蕾などは表現されないとされる他寺院の軒丸瓦に用いられているものにくらべ華麗さを欠くように思われる。

○瓦当の製作方法および瓦当と丸瓦の接合方法

●瓦当箇に薄く粘土を押しつけ瓦当部分をつくっておいてから、丸瓦を差し込み、瓦当裏面全体にもう一度粘土を補充し、瓦当と丸瓦を接合するもの。I類・II類・III類・V類・VI類・VII類がこれにあたる。これらはさらに以下のように細分できる。

丸瓦の接合位置が高く、丸瓦は深くまで差し込まれるもの………I類・II類・VI類

丸瓦の接合位置は高く、丸瓦はやや浅く差し込まれるもの………VII類

丸瓦の接合位置がやや低く、丸瓦は深くまで差し込まれるもの………III類

丸瓦の接合位置がやや低く、丸瓦はやや浅く差し込まれるもの………V類

●瓦当を完全につくってから、丸瓦を接合する位置に凹みをつくり、丸瓦をその凹みに差し込み、丸瓦の凹凸面に粘土を補充し接合するもの。丸瓦の接合位置は低い。IV類・VII類がこれにあたる。

○瓦当側面の調整

●ナデ調整するもの………I類・II類

●ハケメ調整するもの………V類・VI類・VII類

●板状工具でナデ調整するもの………III類

●極型の痕跡を残すもの………IV類・VII類

○瓦当裏面の調整

- 縦方向のナデの後、丸瓦凹面と瓦当の外周に沿ってナデ調整するもの……I類・II類
- ナデ調整がやや乱雑なもの……………IV類・V類・VI類・VII類
- 板状工具でナデ調整するもの……………III類・VI類

以上の整理を総合すると、次の四段階に分類できる。

第1段階は、均整のとれた文様で、接合方法・調整ともに丁寧な段階。軒丸瓦I類・軒丸瓦II類がこれにあたる。丸瓦は接合位置が高く深く差し込まれ、瓦当は薄い。瓦当側面と裏面はナデ調整で、瓦当下半は強いナデのため外傾線になる。

第2段階は、軒丸瓦I類の瓦当文様が形式化していく段階。軒丸瓦V類・軒丸瓦VI類がこれにあたる。瓦当裏面の調整が粗雑化し、瓦当の側面も、瓦当に接続する丸瓦と同様の工具を使って調整し、調整痕をそのまま残す。

第3段階は、前段階の文様をさらに退化させながら使う一方、外来の要素（VI類の蓮弁の形態など）を取り込むが、製作技法、外縁の線鋸歯文などそれまでの伝統のなかで製作される段階。軒丸瓦III類・軒丸瓦VI類がこれにあたる。丸瓦の接合位置が低くなり、瓦当裏面にまで工具による調整痕を残すようになる。

第4段階は、それまでのものから様相が一変する段階。軒丸瓦IV類・軒丸瓦VII類がこれにあたる。直径が小型化し、新羅的な要素をもつ文様構成を用い、瓦当と丸瓦の接合方法も前段階とは異なる。

軒平瓦 各型式を上記の軒丸瓦の分類にあてはめる。

第1段階には、瓦当に重弧文を用い、額が深く、調整が丁寧である軒平瓦I類・軒平瓦IVa類を位置づける。

第2段階には、瓦当が無文で深い段階であるなど古式の要素を持つものの、瓦当面のヘラ切りが薄く成形時の圧痕が残るなど調整がやや省略され、胎土に砂粒と共に黒色及び茶褐色の粒子を多く含むなど、第2段階の軒丸瓦と共通点が多くみられる軒平瓦III類を位置づける。

第3段階には、軒平瓦IVb類について額の形態が、軒平瓦V類については額の形態と瓦当面をもたない点が他型式からの形式化、簡略化であると考えられるため、この2つの型式を位置づける。

第4段階には、軒丸瓦と同様に、文様・製作技法がそれまでのものと別の様相をみせる軒平瓦II類を位置づける。

各段階の様相・年代観 上記分類の各段階の出土比は、第1段階は軒丸瓦42.6%軒平瓦19%、第2段階は軒丸瓦12.3%軒平瓦12.3%、第3段階は軒丸瓦2.5%軒平瓦16.8%、第4段階は軒丸瓦42.6%軒平瓦53.3%になる。

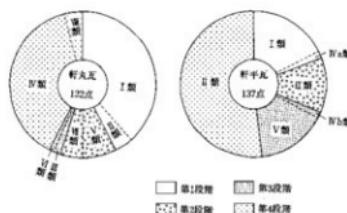
出土量からみて、第1段階の瓦だけでは軒丸瓦にくらべ軒平瓦が少なすぎ、また、丸瓦・平瓦は第2段階の軒丸瓦・軒平瓦と同様の胎土、焼成、調整のものが量的に多いため、軒丸瓦が新相をみせるものの第2段階の瓦も含めて伽藍を整備したと考えたい。軒丸瓦I類は、川原寺系の文様を用いるが、中房が突出せず平坦である点、蓮子の囲線がない点、外縁はわずかに内傾するものの直立線もしくは外傾線である点、外縁の鋸歯文が独自のものである点など、後出的で在地的な要素が強い。そのため、第1段階を7世紀末に、それに続く第2段階は8世紀前半に比定する。

第3段階の瓦は、軒丸瓦VI類の蓮弁が他の寺院の例よりも形式化していることなどから、8世紀後半に比定する。軒丸瓦と軒平瓦の出土量が一致しない点にやや問題があると考えられるが、軒丸瓦（軒丸瓦III類・軒丸瓦VI類）は、瓦当に範傷を残すものしか出土しておらず、若干の修正の余地はあるように考えられる。いずれにしても、出土量は第1、第2段階にくらべ少ない。大原寺では、この時期に建立されたと考えられる建物が検出されておらず、瓦の出土量も少ないことから、この段階の瓦は補修用の瓦であると位置づける。

第4段階の瓦は文様、技法ともそれまでとは異なる新たなものを導入している。出土量も第1、第2段階を合

わせた量と同等であるなど、この段階にひとつの画期が認められる。軒平瓦Ⅱ類の頭の形態、製作技法が平城宮発掘調査報告の分類（文献14）のなかの「曲線頭Ⅱ」の後出的なものに類似するため、8世紀末に比定しておく。後述するが、出土状況として第四段階の軒丸瓦・軒平瓦のみが非常に多い遺構・トレンチがあるわけではなく、逆に第4段階以前の軒丸瓦・軒平瓦のみを廃棄したような瓦溜は確認されていない。どのトレンチでも同じような出土比で第1段階の瓦と共伴するため、それまでの瓦をすべて葺き変えるといった様子でもない。すべての丸瓦・平瓦を分類したわけではないが、それまでと異なる技法を用いるものとして縄目叩きの使用があげられる。縄目叩きが残る平瓦は平瓦全体の中で10%程度と、軒瓦の出土比と比例しない。現時点ではこの画期がどのような内容であったのかは、瓦からは明らかにしがたい。

	時 期	軒 丸 瓦	軒 平 瓦
第1段階	7世紀末	I・II	I・IVa
第2段階	8世紀前半	V・VI	III
第3段階	8世紀後半	III・VI	IVb・V
第4段階	8世紀末	IV・VII	II



出土状況 出土状況については明確に遺構に伴った出土状況ではないため、整理をした上で問題点を上げるのみにする。出土量として比較的まとまりがあるのは、塔周辺・塔から東の落ち段にかけての空間・瓦溜である。逆に、第1次調査T2・T5、第2次T5など寺域から少し離れた場所からはほとんど出土していない。瓦の出土はほぼ寺域の中だけに限られるといえる。接合関係をみると、第3次T5出土のものと第6次T8のものが接合した。また同じく第3次T5のものと第4次T1のものが接合している。第3次T5は、主要堂塔廃絶後の瓦溜であることが確認されており、大原寺は主要堂塔が廃絶した時期から、かなりの攪乱を受けたことを示すのではないかと考える。基本的に、瓦の出土量は各遺構の残存状況の良さと比例している。金堂からは軒瓦は3点しか出土していないのに対し、塔からは57点出土といった具合である。そのなかで、塔と同様に比較的遺構の残りが良い講堂からは34点と少ない。さらに34点中17点は講堂東辺にある瓦溜出土である。瓦が出土しないわけではないが、講堂が瓦葺きの建物であったかどうかは疑わしい。各遺構またはトレンチのなかで、型式、段階ごとにどれかが飛び抜けて多いということもなく、出土状況からは、大原寺の瓦葺きの建物の最終段階は、各段階の各種の瓦が同時存在していたと推定されるのみである。

軒丸瓦Ⅰ類について 軒丸瓦Ⅰ類は創建時に用いられた軒丸瓦で、軒丸瓦のなかで38.5%の出土比を占める。また、同型の軒丸瓦が隣の久米郡の大御堂寺、同じ河村郡の野方・弥陀ヶ平廢寺、久見遺跡にもみられる点は古くから指摘されている（文献15）。今回の整理によって新たな問題点が明らかになったので、そのことについてふれる。

軒丸瓦Ⅰ類は、外縁の鋸歯文の違い、中房の蓮子の配置の違いによって3種に細分した。Ia類とIb類は外縁の線鋸歯文が違い、Ic類はIa・Ib類と中房の蓮子の配置が違う。I類は蓮弁に微細な範傷があり上記の細分が可能になったが、逆にそれぞれの違わない部分、特に蓮弁には同様のパターンで範傷が認められるのである。上記の細分をより具体的に記述すると、Ia類とIb類は、中房と蓮弁は同箇でなおかつ同じ位置関係にあるが、外縁のみが違う。さらにIb類は、外縁の線鋸歯文の内周をケズり残すという差もみられる。Ic類は、

蓮弁と外縁は I a 類と同范で同じ位置関係で、中房部分も同范だが、中房の角度が違う。さらに、断面図中（第12図）に横線を引いた部位にはバリのような細かい凸線が認められる。これらから I 類の范型を復元すると、中房部分、蓮弁部分、外縁部分にわけられた同心円状の3つの型があり、瓦製作時にその3つを組み合わせて瓦当范とする、特異な手法を用いていたことになる。この製作方法だと無数のパターンが製作可能なはずであるが、今回確認できたのは3種のみである。その原因については、小片が主であるためはっきりしないが、一度范型を組むとしばらくはそのまま固定しておくことができた結果だと考えておく。3種のうち、大原廃寺では I a 類が、判別可能な破片の中で63%（I 類全体のなかでは36%）と多数を占める。

同型の軒丸瓦である大御堂廃寺例（以下大御堂Ⅶ類）は、平成8年度から平成11年度にかけ、中心部の発掘調査が行われ、多数の出土をみた。まだ整理中のため断言は避けたいが、大御堂Ⅶ類は大原廃寺 I 類（以下大原 I 類）と同范（中房、蓮弁、外縁のそれぞれの型は同じもの）といえそうである。外縁の線鋸歯文の内周はヘラケズリせず凸線のまま残すという特徴をもつ。製作技法は基本的に大原 I 類と同じだが、瓦当の厚さが大原 I 類にくらべ厚い製品が多い。また、焼成が悪く軟質である。野方・弥陀ヶ平廃寺例（以下野方・弥陀ヶ平 II 類）は、本格的な発掘調査が行われておらず表採品のためはっきりとは分からぬが、中房蓮子が1+5+8であるなど細部に違いがみられるものの、文様構成は同じである。これも外縁線鋸歯文内周はヘラケズリせず凸線を残す。焼成も悪い。久見遺跡例（以下久見 I 類）も表採品であるが、外縁線鋸歯文内周は凸線を残す。

大御堂Ⅶ類、野方・弥陀ヶ平 II 類、久見 I 類は三者とも外縁線鋸歯文内周をヘラケズリせず凸線のまま残すという共通点が認められる。大原廃寺のなかで外縁線鋸歯文内周が全くヘラケズリされず凸線のまま残っているのは I b 類に分類されるなかのわずか5点（I 類全体の11%）のみであり、他遺跡で共通する特徴は、大原廃寺では少数派である。このことから、大原廃寺内で多数を占め、大原廃寺所用瓦といえる外縁の線鋸歯文の内周をヘラケズリする大原 I a・I c 類は、製作時から外縁内周の調整に差をつけることにより他遺跡の同型品と区別されていた可能性が指摘できる。

大原 I a・I b・I c 類は、同じ部品で組み上げられた范型を使い、大きな范傷の進行もみられないため、ほぼ同時期に製作されたものと考える。そのため、I b 類と似る特徴をもつ大御堂Ⅶ類、野方・弥陀ヶ平 II 類、久見 I 類との前後関係は分からぬ。野方・弥陀ヶ平 II 類は細部に違いがみられるが、表採品で詳細な点が不明であるため、これも前後関係をいえない。大原 I 類と、その他3例とは瓦当の厚さ、焼成などに差がみられるが、基本的な製作技法は同様であるため、現段階では、消費地による製品の差が時間差を示すのか、工房の差なのか、製品の移動なのかは明らかにできない。

分布の状況を詳しく述べると、野方・弥陀ヶ平廃寺、久見遺跡には大原 I 類の同型品から派生する型式の軒丸瓦は今のところ確認されず、大御堂廃寺では派生型式が I 型式（大御堂軒丸瓦Ⅸ類）しか確認されていないにくらべ、大原廃寺には派生型式が複数みられる。大原Ⅲ類・大原 V a・V b 類・大原Ⅷ a・VII b 類である。大原廃寺 I 類は I 型式だけで軒丸瓦の38.5%を占める。大御堂廃寺Ⅶ類も出土数の比率は高いが、同時期に分類される他型式にも同等の比率を示すものがある（文献15）。大原 I 類は大原廃寺の創建瓦であるが、大御堂廃寺、野方・弥陀ヶ平廃寺には大原 I 類の同型品に先行する軒丸瓦が認められる。

4 遺跡から出土する同型品を生産した瓦窯が未確認なこともあり供給体制を明らかにすることはできないが、大御堂廃寺の派生型式は間弁を省略するなどかなり簡略化の方向へ変化するのにくらべ、大原廃寺の派生型式はより大原 I 類を直接模した文様構成で多種類みられる点、この瓦を創建瓦とする点、さらに、大原廃寺所用瓦のみが他の同型品と製作時から区別されていた可能性がある点を重視するなら、大原 I 類、大御堂Ⅶ類、野方・弥陀ヶ平廃寺 II 類、久見 I 類は、大原廃寺を中心に東伯耆地方に分布するといえるのかもしれない。（興平）

2) 須恵器・土師器

須恵器と土師器とは、時期と出土量の関係が一致しない。これを大原廃寺の一つの特性としてとらえておきたい。瓦と須恵器については、ともに7世紀後葉に出現し、9世紀以降にはほとんどみられなくなっていくという同様の傾向がある。須恵器が7世紀後葉の創建期の量を確かめができるのに対して、土師器は畿内系土師器と呼べる細片が僅か2片（第6次T2・T8）認められるだけで、8世紀前半までのものは皆無に等しい。丹塗土師器で最も古いものは8世紀後半（伯耆国序第1段階）に比定されるものがあるが量的には非常に少ない。言い換えれば、土師器の供給にかかわることなく、瓦と須恵器は時期と出土量の関係において連動しているのである。瓦生産を須恵器工人に委ねたことを反映してか、8世紀前半までの瓦と須恵器の出土量は多い。新羅の要素をもつ第4段階の軒丸瓦皿類の導入と朝鮮陶質土器の搬入とを別々に考えるよりも同時期とみるべきなのかもしれない。

土師器の量がまとまって出土するのは、瓦の供給が途絶えた9世紀後半（伯耆国序第2段階）になってからであり、土師器は灯火台としての著しい使用が認められる。律令体制下に、国分寺とともに大原廃寺が仏教遂行の場として機能していたことがわかる。逆にそのころの須恵器は微量ではほとんど消費されていないといってよい。以後、土器は生産コストの低い土師器に限られることから、寺院の経済規模がうかがわれよう。土師器の出土量は12世紀代には再び増加し、これを礎石建物を中心に寺院が再興された時期に符合するものと考えられる。

(栗崎智)

2 遺構

これまでの発掘調査によって、塔、金堂、講堂、中世の礎石建物を確認した。以下、分かったことを述べてまとめてみたい。

寺域 寺域は、主要堂塔のある平坦面の西側と南側にある段が、それぞれ直線的に延びて直角に折れ曲がることと、西側の段（第6次調査T1）で斜面をカットして段にしていることから、これを寺域の西限と南限に推定した。北限は、長さ約10m余りで、北に向かって約0.2m～0.3m段差のある場所に推定した。東限は、第1次調査T8、第5次調査T1、第6次調査T5でいずれも東に向かって地形が高くなる地点を東限と推定した。推定寺域の南西隅は主要堂塔に対して、約5°東に振れる。これに対し北限と東限は、主要堂塔に方向を同じく推定線を復元したため、寺域の形がいびつな四角形になる。一辺の長さは、南辺と西辺が約75m、北辺が約69m、東辺約81mである。ただし、推定した寺域のうち、北限と東限については明確な区画施設を確認したわけではない。さらに、平地から見える側の寺域西限、南限において、寺地造成時の地形の段差を確認したのみで、堀や溝といった区画施設を確認しておらず、寺域区画の施設といつても、遺構として遺存し難い簡単な柵列があった程度であるとも考えられる。山が迫る寺域の北東隅についても直線的な寺域となる必要は必ずしもなく、岡山・服部廃寺（文献16）、関戸廃寺（文献17）の例の様に地形の変換点で推定線を復元し、いびつな多角形の寺域に復元することが大原廃寺でもできなくはない。しかし、明確な地形の変換点を確認していない現時点では想像に過ぎず、前述のとおり四角形の寺域に復元するのが妥当と思われる。

塔 塔の規模は、内側石列の外側までの距離が約9.8m、外側石列までの距離が約11mの正方形となる。この石列が塔基壇のどこ部分にあてはまるのか、基壇上面が削平されてしまっているため不明確である。この石列は、内側の石列から外側の石列までが①二重基壇の下成基壇部分（大走り）、②雨落ち溝、の2通り考えられる。①の場合、下成基壇の出は約0.5mで、高さは0.1mと僅かである。ただし、内側の石を基壇外装の基底石とするには小さすぎる傾向にある。このため、内側石列の上面に接して内側に基底石を想定する事ができるかもしれない。

い。②は、①と同様に内側石列の上面に接して内側に基底石がくる場合と、基壇基底石が内側石列の内にきて、内側石列から基底石までが下成基壇となる場合が考えられる。北東隅では、石列の間に上面が平坦な石が置かれていたことを雨落ち溝でない要素ととらえ、石列は下成基壇であると推定する。

基壇北辺石列の中央北側で3列目の石列を確認し、その外側には溝が巡ることを部分的に確認した。この石列の高さは内側の石列と同じ高さであるが、その位置がほぼ塔の中心線上になるため塔北側の階段の一部である可能性がある。溝は、断面がU字形、幅約1m、深さ最大約0.3mで、埋土中から7世紀末頃の須恵器片から中世の土師器皿片まで出土している。このため溝は塔に伴う遺構とみられ、部分的にしか確認していないが雨落ち溝である可能性がある。

特筆すべき遺物としては、緑色のガラス玉片（直径1.95cm）が塔と講堂の間で出土しており、舍利に関連する可能性がある。

金堂 金堂は塔の西辺から西に約4.5m離れて確認した。基壇化粧抜き取り痕跡から東西幅が約17.0m、北辺が塔の北辺外側石列より北に約2m出る。南辺は削平により不明であるが、金堂北辺から塔の南辺外側石列まで南北約13.0mとなる。鳥取県内の白鳳時代創建寺院の金堂基壇で規模が分かる例を挙げると、桁行方向：梁行方向（以下、方向を省略）の規模が、上淀磨寺1：1.14（文献18）、大寺磨寺1：1.15（文献19・20・21）、斎尾磨寺1：1.17（文献19）、柄本磨寺1：1.17（文献22）、土師百井磨寺1：1.19（文献18・23・24）（小数点以下第3位4捨5入）とほぼ同等の比率になる。これを大原磨寺に当てはめると、金堂南辺が塔の南辺に揃うとすれば、桁行：梁行が17.0m：13.0m = 1 : 1.31と他寺院との比率が合わない。塔心礎の中心から塔基壇の東西軸に合わせて西に延ばし、金堂基壇北辺までの距離を南に折り返すと、桁行：梁行が17.0m : 14.8m = 1 : 1.15となり、他寺院との比率に近づく。したがって、金堂の南辺は塔と揃わず、中心軸を揃えて北辺と同様に約2m出していた可能性がある。

建物規模は、礎石や根石、根石掘り方を全く確認していないため不明であるが、基壇規模と、一般に古代寺院の金堂は柱間を10尺前後とすることから、桁行5間×梁行4間程度の規模に想定できる可能性がある。

講堂 講堂は通常礎石建物であるが、大原磨寺の講堂は掘立柱建物であった。講堂付近での各時期の瓦出土割合は他の場所と大差ない。しかし、掘立柱建物に瓦を葺いたとは考えにくく、植物質の葺材を使用したとみられる。掘立柱建物の掘り方検出面では、掘り拳大程度の根石状の集石を2か所で確認したため、礎石とその据え込み穴を確認していないが、掘立柱建物から礎石建物に建て替った可能性が考えられる。なお、講堂北西の底部分付近と、西側基壇の南付近には、現在の土地境界線の目印として直径約1m前後の偏平な安山岩が2個使用されており、この石が講堂の礎石であった可能性がある。礎石建物になった時期は、根石状の集石の1つに、創建瓦の軒平瓦I類の破片があったため、第2段階（8世紀前半）頃か、それ以降であるとみられる。礎石建ちの建物に建て替ったのなら、植物質の葺材から瓦葺きになってよいが、瓦の出土量からは瓦葺きになったとは言いがたい。

講堂が掘立柱建物の例は管見する限り、全国で京都府亀岡市・觀音芝原寺（文献25）、京都府宇治市・岡本寺（文献26）、愛知県豊橋市・市道遺跡（文献27）の3例と、三重県桑名市・額田磨寺で瓦積み基壇の講堂下層に6間×3間の東西棟掘立柱建物が確認され、前身講堂である可能性が指摘（文献28）されており、これを含めて4例にすぎない。

講堂創建の時期は、整地層中で出土した須恵器からおよそ7世紀後葉以降と推定される。廃絶の時期は、P5の埋土中から柱状高台片（11）が出土したため、これを礎石などを片付ける際に掘立柱の柱痕部分に落ち込んだものと考えると、12世紀頃と推定される。

礎石建物 この建物は、東西3間×南北4間の規模を確認したため、東西3間×南北3間の4面庇付建物（1間4面堂）を、後に南側に1間分の孫庇を付けて、礼堂としたものと推定される。屋根材は、第4段階（8世紀末）以降の瓦は一切出土していないため、植物質で葺いたとみられる。

礎石建物の南西庇部分が、講堂の基壇東辺推定線と約2mと接近するため、講堂と同時並立する事は不可能で、建物の方向軸は、講堂とはほぼ一致する。このため、礎石建物は講堂の廃絶後、間を置かず建立されたものとみられる。したがって、講堂が廃絶したと推定される12世紀頃に建立したと推定する。

礎石建物は、建物部分掘り下げ中や、第3次調査T5、第6次調査T11の瓦溜から柱状高台片や、大日寺遺跡、広瀬庵寺の土師器皿に比定される土器が出土し、隣接する講堂の表土から泥塔（土製五輪塔）が出土したため、少なくとも13世紀代頃まで存続し、それ以降に廃絶したと推定される。

創建から廃絶 大原庵寺の創建から8世紀末までの変遷は、瓦から4段階に分けて考えることができる。寺院の創建は、講堂の整地層から7世紀後葉の須恵器が出土したこと、川原寺式の流れをくむ軒瓦が寺域全体で出土したことから7世紀末頃（第1段階）とみられる。講堂の整地層中では転用硯と朱墨が付着した須恵器が出土したため、これらを寺院関連の遺物と考えるなら講堂建立以前にも寺院として機能していたとみられる。

また、金堂の南西約25mにある掘立柱建物のSB01、SB02は、付近で竈片がまとまって出土し、SB02埋土中からTK217に比定される須恵器が出土した。そして、SB02は主要堂塔と建物方向が一致する。これら建物は、地山より上層で柱穴を捉えたが寺域南西部で寺地造成の盛土を未確認のため、寺地造成との関係はわからぬ。しかし、主要堂塔に先行し大原庵寺と関係する建物の可能性がある。

8世紀前半（第2段階）は、第1段階の瓦の文様が形式化、省略化していく段階で、この段階までに主要堂塔の整備が行われた。

8世紀後半（第3段階）は、第2段階の軒丸瓦をさらに退化させる一方、備後北部や出雲・神門寺庵寺境内庵寺（文献13）出土瓦に似るものを使用する。軒平瓦も、第2段階の瓦をさらに形式化、簡略化する。この時期の瓦出土量は僅かで、補修用として使用したものとみられる。

8世紀末（第4段階）は、それまでと様相が異なる新羅の要素を持つ文様の軒丸瓦と、独特の萼、蕾、花弁を表現した軒平瓦を使用する。この時期の瓦の出土量は多いが、これ以降大原庵寺では瓦が使われていない。一方土師器は、伯耆国庁第2段階から第3段階にかけての坏Aに油煙が付着したものが出土しており、それ以降の土師器も出土する。

12世紀頃、講堂が廃絶される。塔、金堂の廃絶は良く分からないが、焼け土化した塑像、壁土が寺域全域で出土するため、全体が火災によって焼失した可能性がある。8世紀末以降、大原庵寺では瓦が出土していないため、植物質の屋根材で葺き変えたとみられる。

主要堂塔廃絶後、間もなく大原庵寺の最終段階として、1間4面の堂が建立される。その後、この堂には時期が不明であるが南側庇に孫庇が付けられ礼堂となり、少なくとも13世紀頃まで存続したものとみられる。

伽藍配置 大原庵寺は、東に塔、西に金堂、金堂の真北（裏）に講堂という変則的な法起寺式伽藍配置をもつ。主要堂塔の方向軸は、金堂は部分的確認であるため厳密には言えないが、それ以外の塔、講堂、礎石建物については、国土座標の北から1°以内の範囲に収まる。このため、金堂を含めた主要堂塔は同じ方向軸をとると考えられる。中門は未確認のため、伽藍中軸線が塔と金堂の間にあるのか、金堂、講堂の南北線上にあるのかよくわからない。このような伽藍配置の古代寺院は、福岡県田川市・天台寺跡、岐阜県古川町・杉崎庵寺がある。大原庵寺の近くでは、大御堂庵寺が觀世音寺式の伽藍配置で、講堂を伽藍中軸線から西側の金堂側に寄せる。東伯町の斎尾庵寺は法隆寺式であるが、金堂の北に講堂という変則的な配置である。大原庵寺の伽藍配置は、当初から

の計画であったか、寺域の北東側に丘陵がせまって空間が不足したため、止む終えず講堂を西にずらしたか、のどちらかであると考える。遺構、遺物、層序からは堂塔の建立順序は不明で、中門や僧房など他の建物の存在や位置が未確認であるため決め手に欠ける。しかし、あえて推定するならば、東伯耆地方で伽藍配置が判明している白鳳期創建寺院の3箇寺いずれもが、塔、金堂間の南北軸から金堂側に講堂がずれることから、意図的に変則的な配置にしたと考えたい。

東伯耆における大原庵寺 東伯耆地方ではまず、久米郡で7世紀第3四半世紀頃大御堂庵寺が創建され、同じころ大原庵寺と同じ河村郡に野方・弥陀ヶ平庵寺が創建されている。7世紀末には、大御堂庵寺で本格的に伽藍を整備する。また、八橋郡は斎尾庵寺がこのころ創建される。これらの寺院には、遺構、遺物から共通点がいくつか認められる。

前項でも述べたが、まず伽藍配置の判明している大原庵寺、大御堂庵寺、斎尾庵寺のいずれも塔、金堂間の南北軸から金堂側に講堂をずらしている。

瓦は、大原庵寺の軒丸瓦I類が、大御堂庵寺の軒丸瓦Ⅲ類と同型品で、野方・弥陀ヶ平庵寺のII類も同型品と考えられる。これらには、重張文軒平瓦が組み合う。8世紀後半には、大原庵寺軒丸瓦Ⅳ類が唐草文を外縁外区に追し、大御堂庵寺軒丸瓦Ⅳ類が連弁の先端近くの圓線上に珠点を置き、野方・弥陀ヶ平庵寺軒丸瓦Ⅳ類が外区の圓線上に珠文を置くという、新羅的な要素を持つ。大原庵寺軒丸瓦Ⅳ類と野方・弥陀ヶ平庵寺軒丸瓦Ⅳ類が同型の可能性がある。

埴仏は、大原庵寺で六尊連立埴仏が出土し、これらは同形式の伝播寺等出土埴仏に比べ図様の不鮮明さ、大きさが一回り小さいことから、踏み返したものとみられる。これに対し大御堂庵寺出土の六尊連立埴仏、方形三尊埴仏は図様が鮮明で踏み返さないものである可能性がある。また、斎尾庵寺では方形三尊埴仏が出土している。

以上のように、大原庵寺は東伯耆地方の地域的なまとまりの中でとらえることができる。さらに、当初の鎮護国家仏教としての寺院から、主要堂塔庵舎後に浄土教の堂とみられる1間4面堂を建立する様が分かる寺院といえる。

大原庵寺を創建した墳越の問題など今後の課題も残るが、大原庵寺の様相がおよそ判明したことは、東伯耆地方の仏教文化の隆盛を考える上で貴重である。
(加藤)

文献

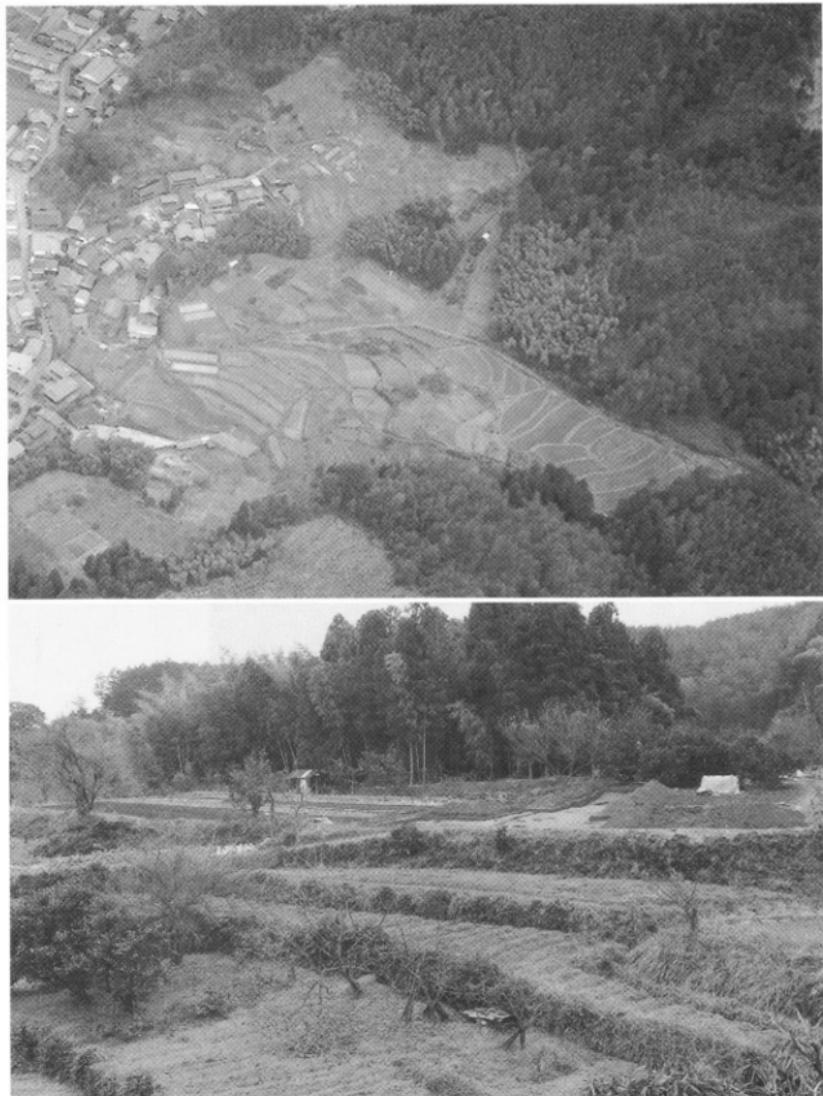
- 1 森下哲哉「大原庵寺跡」「倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅱ」倉吉市教育委員会 1987
- 2 真田廣幸「史跡大原庵寺第2次発掘調査概報」倉吉市教育委員会 1988
- 3 真田廣幸「史跡大原庵寺第3次発掘調査概報」倉吉市教育委員会 1991
- 4 真田廣幸「7. 大原庵寺（第4次）」「倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅶ」倉吉市教育委員会 1993
- 5 真田廣幸・加藤誠司「21. 大原庵寺（第5次）」「倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅸ」倉吉市教育委員会 1997
- 6 真田廣幸「第五章奈良・平安時代」「新編倉吉市史第一巻古代編」倉吉市 1996
- 7 亀田修一氏から下記の資料をご教示いただいた。
 - 1 畠山大学校博物館「12号墳」「蔚州草山里古墳群」 1983
 - 2 漢陽大学校博物館「二聖山城」 1992
- 8 畑中英二「近江」「古代の土器5—1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）」古代の土器研究会 1997
- 9 萩本勝「須恵器について」「陰田」米子市教育委員会 1984
- 10 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古クラブ 1966

- 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 11 斎淳一郎「Ⅲ遺物 2 土器類」『伯耆国跡発掘調査概報(5・6次)』倉吉市教育委員会 1979
- 12 石田茂作編「塔・塔婆・スーパー」『日本の美術 No.77』至文堂 1972
- 13 島田朋之「寺町庵寺と水切り瓦」広島県立歴史民俗資料館 1998
- 14 毛利光俊彦・花谷 浩他「平城宮発掘調査報告XⅡ」奈良国立文化財研究所 1991
小沢 誠他「西隆寺発掘調査報告書」奈良県教育委員会 1993
- 15 真田廣幸「奈良時代の伯耆間に見られる軒瓦の様相」『考古学雑誌』第66巻第2号 1980
真田廣幸「伯耆大御堂庵寺考」山本 清先生喜寿記念論集『山陰考古学の諸問題』1985
- 16 池田 浩・大谷博志・杉山一雄「服部庵寺」長船町教育委員会 1997
- 17 安東康広・岩崎仁司「開戸庵寺」笠岡市教育委員会 1997
- 18 中原 齊他「上淀庵寺」淀江町教育委員会 1995
- 19 宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」「法隆寺と斑鳩の古寺」『日本古寺美術全集第二巻』集英社 1979
- 20 島根県教育委員会「大寺庵寺発掘調査略報」1966
- 21 島根県教育委員会「大寺庵寺発掘調査報告書」1967
- 22 津川ひとみ氏のご教示による。
- 23 吉村博恵他「土師百井庵寺跡発掘調査報告書Ⅰ」郡家町教育委員会 1979
- 24 吉村博恵「土師百井庵寺発掘調査報告書Ⅱ」郡家町教育委員会 1980
- 25 桶口隆久「櫻音芝庵寺発掘調査報告」「龜岡市文化財調査報告書第20集」龜岡市教育委員会 1988
- 26 杉本 宏他「Ⅲ. 国本庵寺・国本道跡発掘調査概要」「宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第10集」宇治市教育委員会 1987
- 27 賢 元洋「市道遺跡Ⅱ」豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1997
賢 元洋他「市道遺跡Ⅲ」豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1998
- 28 上原真人「第7章 5. 市道遺跡における寺院構造の変遷に関する一試考」「市道遺跡Ⅲ」
豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1998

参考文献

- 井上充夫「日本建築の空間」鹿島出版会 1969
- 工藤圭章「阿弥陀堂建築」「阿弥陀堂と藤原影刻」(『原色日本の美術第6巻』) 小学館 1969
- 西川杏太郎「塑像」(『日本の美術』No.255) 至文堂 1987
- 森 郁夫「瓦当模様に見る古新羅の要素」「畿内と東国の瓦」京都国立博物館 1990
- 山岸常人「中世寺院社会と仏堂」精書房 1990
- 真田廣幸「増仏」倉吉博物館 1992
- 伊藤延男「仏堂平面の変化」「中世寺院と鎌倉彫刻」(『原色日本の美術第9巻』) 小学館 1994
- 龜田修一・龜田菜穂子「塑像蝶巻に関する覚書」「網干善教先生古希記念考古学論文集」1998

図版 1



△調査区空中写真（第1次調査時）（南から）
▽調査区全景（第2次調査時）（南東から）

図版 2



塔（第2次T2）
(北から)
塔心礎と北辺石列



塔基壇北東隅（第2次T7）
(西から)
北西隅石列と溝



塔東辺（第6次T12）
(南から)
石列と石列抜き取り穴
左が基壇側

図版 3



金堂（第3次T4）（北から）



金堂（第3次T6）（東から）

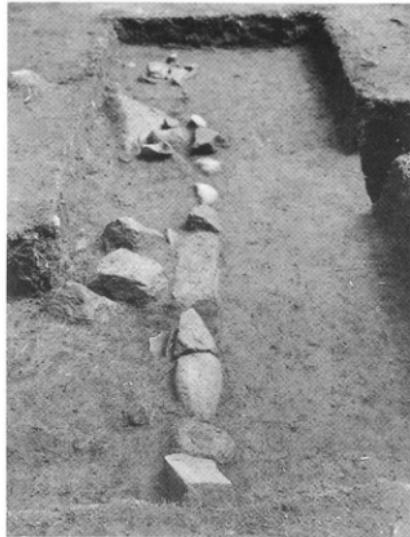


講堂柱穴P4・P5・P6・P7・P8（第6次T3・T8）
(手前から) (東から)



講堂柱穴P13・P3・P2・P1・P11（第6次T13・T14）
(手前から) (南から)

図版 4



講堂基壇西辺（第6次T9）（南から）



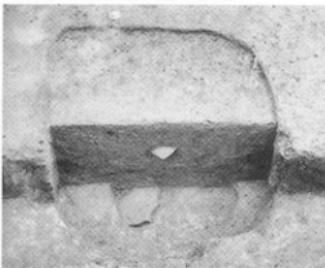
講堂基壇北辺（第6次T9）（西から）



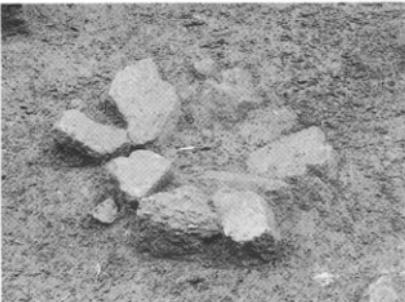
講堂北東整地層断面（第6次T14）（西から）



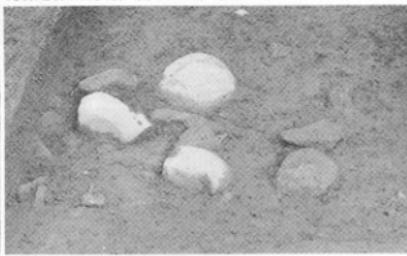
講堂P 5 断面（第6次T3）（南から）



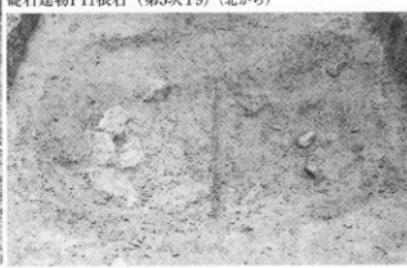
講堂P 8 断面（第6次T8）（南から）



礎石建物P14根石（第5次T3）（南から）



礎石建物西辺P 7 根石（第5次T3）（南から）



礎石建物P11根石（第5次T9）（北から）

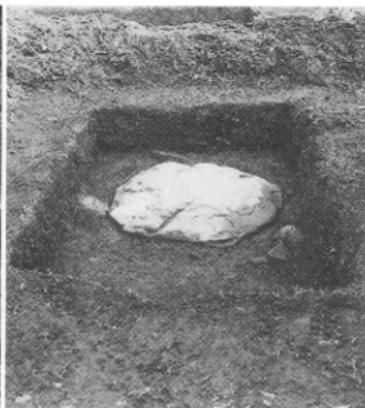
礎石建物北東（第5次T9）（北から）

礎石建物P 2 （第5次T9）（北から）

図版 6



礎石建物P3・P4（第5次T10）（手前から）（北から）



礎石建物P1礎石（第5次T11）（西から）



寺城西限の段（第6次T1）（東から）



寺城西限の段断面（第6次T1）（北西から）

図版 7



塔の外東側落ち段・瓦溜（第6次T11）（北から）



地下式横穴（第6次T6）（南東から）



竪穴式住居SI04、溝SD04（第6次T5）（南西から）

圖版 8

軒丸瓦

軒丸瓦 I a類



1

軒丸瓦 I a類



2

軒丸瓦 I a類



3

軒丸瓦 I b類



4

軒丸瓦 I c類



5

軒丸瓦 II類



6

軒丸瓦 III類



7

軒丸瓦 IV類



8

(1 : 3)

軒丸瓦

軒丸瓦 Va類



9

軒丸瓦 Vb類



10

軒丸瓦 VI類



11

軒丸瓦 VIIa類



12

軒丸瓦 VIIb類



13

軒丸瓦 VIII類



14

(1 : 3)

圖版10

軒平瓦

軒平瓦 I 類



15



15

軒平瓦 III 類



19



19

軒平瓦 IVa 類



20



20

軒平瓦 IVb 類



21



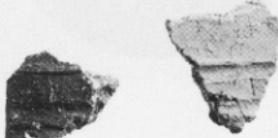
21

軒平瓦 II 類



18

軒平瓦 V 類

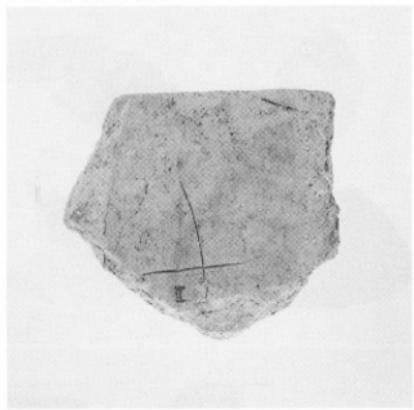


23

(1 : 3)

平瓦、軒丸瓦製作技法

図版11



軒丸瓦 1類



40



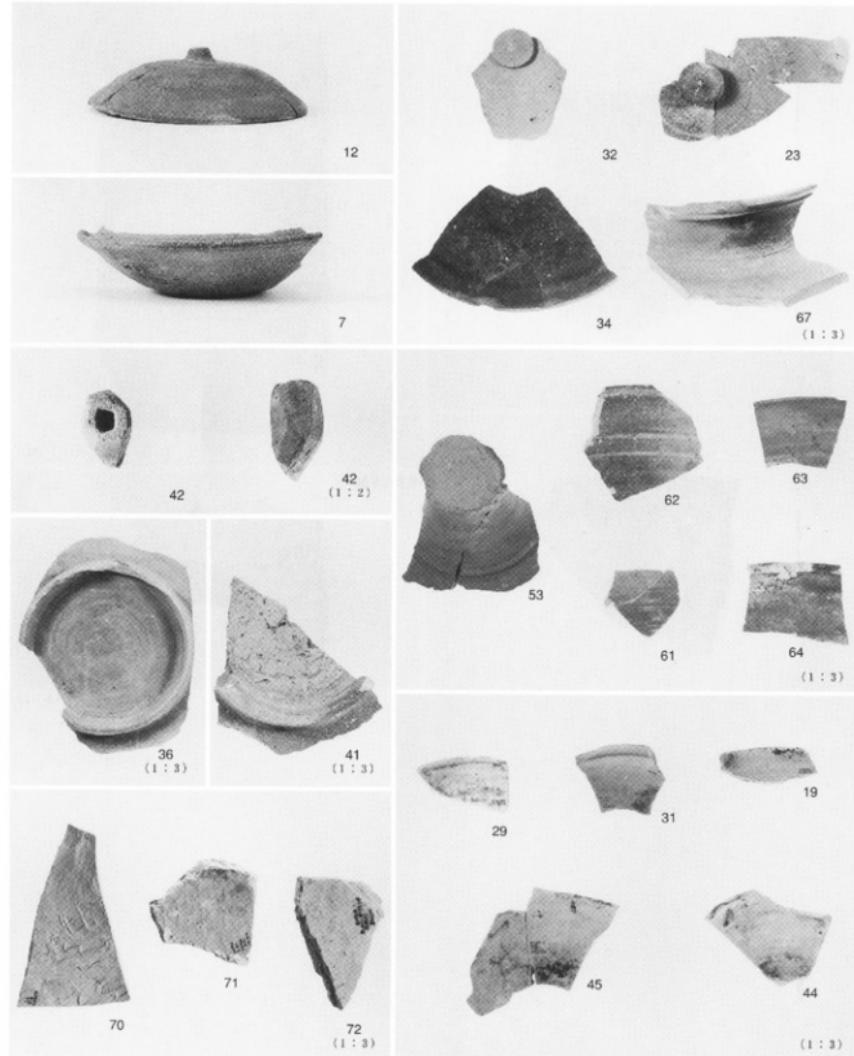
2



(1 : 3)

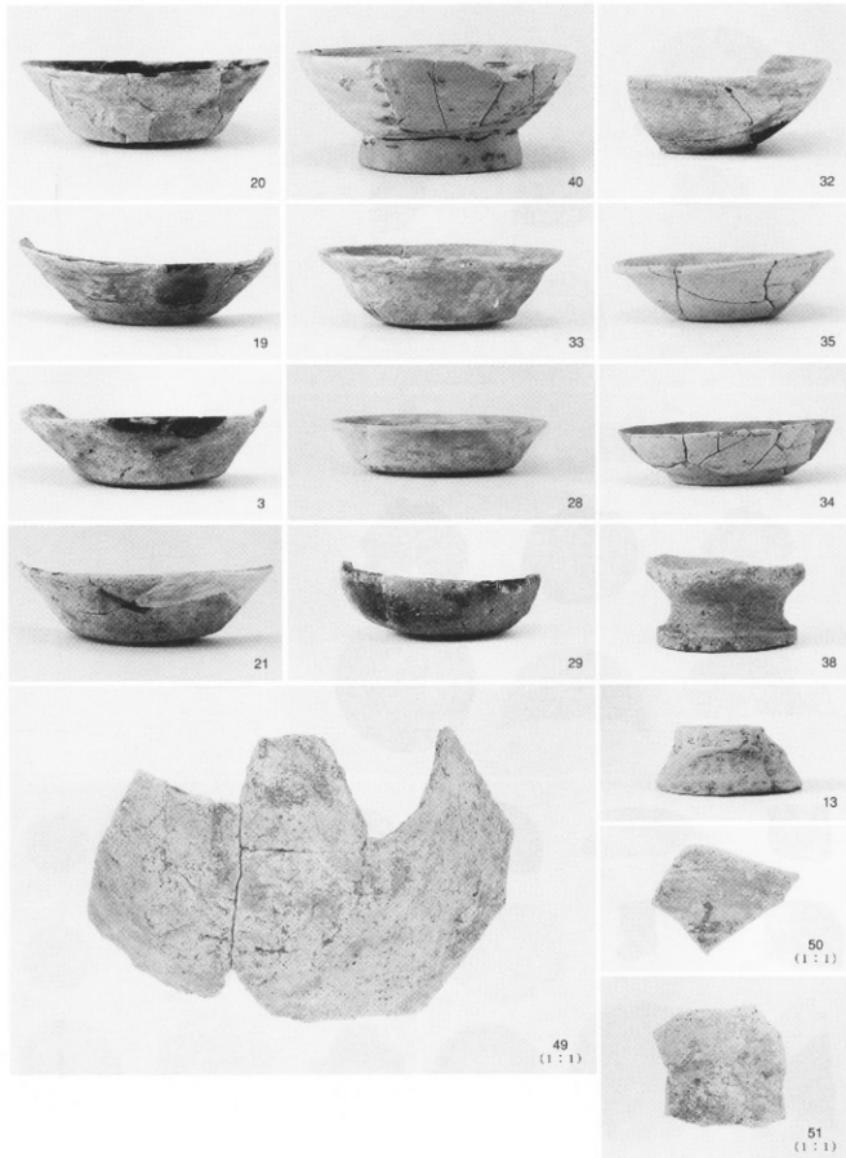
図版12

須恵器



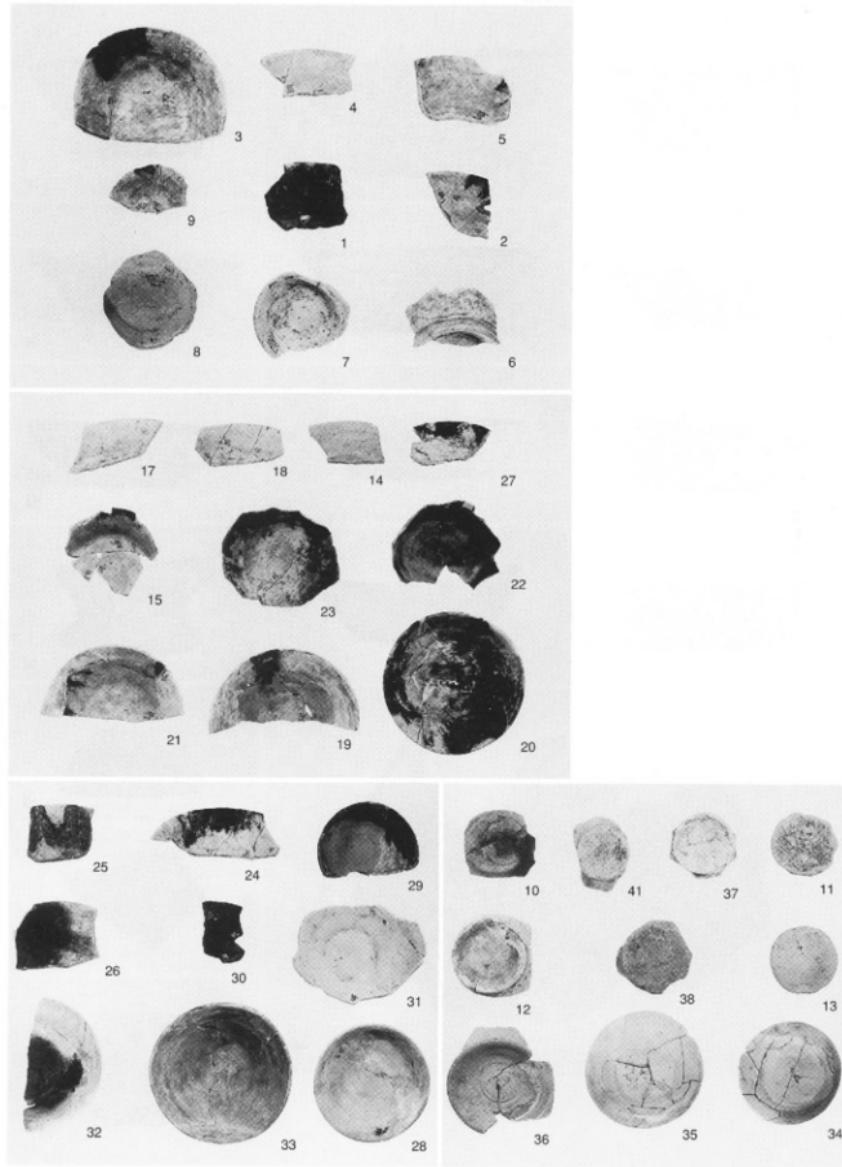
土師器

図版13



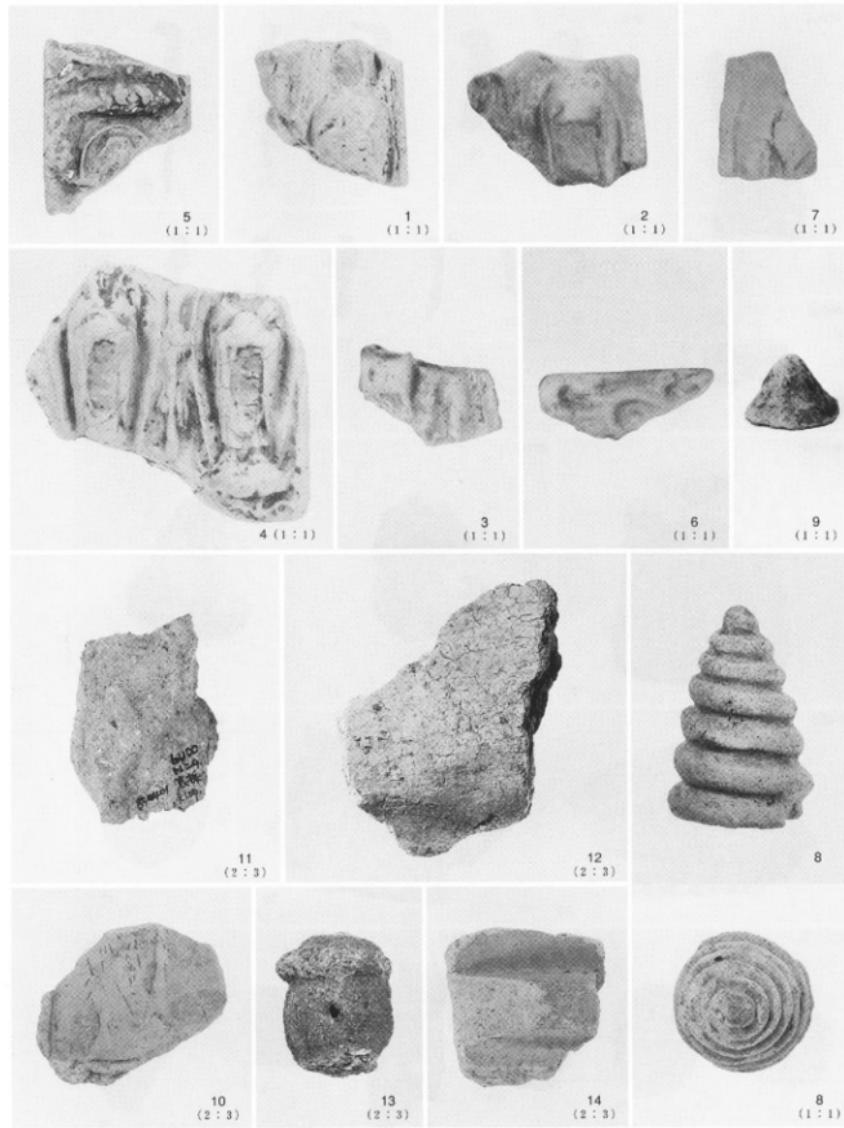
図版14

上部器



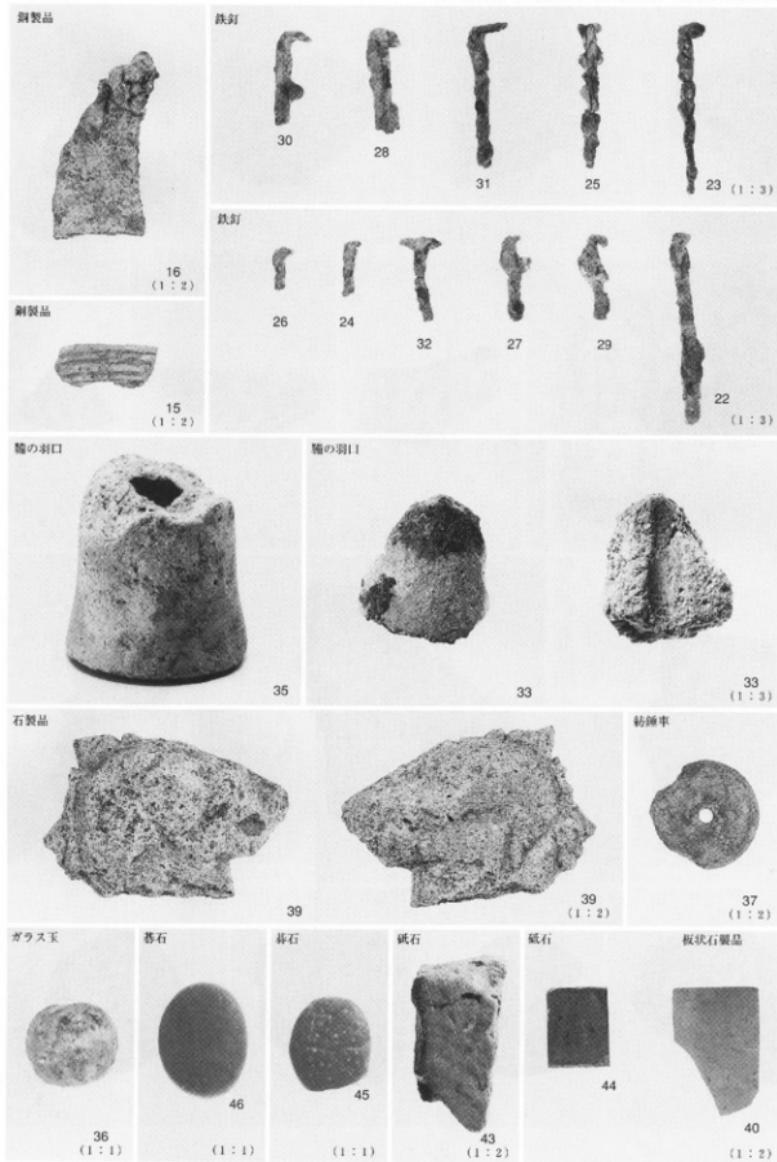
博仏・塑像・泥塔・瓦塔

図版15



図版16

金属製品・関連遺物、ガラス玉、紡錘車、石製品



報告書抄録

著 名	史跡 大原施寺発掘調査報告書						
調 告 名	—						
巻 次	—						
シリーズ名	奈良市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第100巻						
編 著 者 名	廣田 康幸・吉下 哲哉・横山智津子・加藤 誠司・岡本 智則・岡平 才也 奈良市教育委員会						
所 在 地	〒682-8611 奈良市吉香町722番地 TEL088-22-4419						
発 行 年 月 日	西暦1999年3月19日						
所蔵遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 緯	調 查 期 間	調査面積 (m ²)	調査原因
大原施寺	奈良市大原字施寺 谷口、第75番、大 門谷口	31203：6 U O O	35° 25' 01"	133° 51' 38"	1次19850304～19850305 2次19871207～19880213 3次19901204～19910208 4次19920226～19920319 5次19941209～19970304 6次19980226～19981106	260 280 311 82 153.4 220	農地整備計画に伴う事前調査
所蔵遺跡名	種 别	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
大原施寺	寺院部	奈良～中世	塔 金堂 佛坐像 石造物 壁石造物 政 壁穴式住居 獨立柱建物 屋上火 地下式墓穴	辨仏、塑像、泥塔、瓦、樋文土器、生土器、施恩 器、土師器、須恵質土器、瓦質土器、銅鏡、铁钉、織目口、 ガラス玉、紡錘車、土器、打製石器、磨製石斧、磨石、鐵貨 剥片、砾石、漆器、錢貨	宝堂の真北（東）に諸堂を基く変則的な法起寺式伽藍配 置。諸堂は独立柱建物。六基独立碑が出土。		

史跡
大原廃寺発掘調査報告書

平成11年3月19日 印刷
平成11年3月19日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会
印刷 製本 勝美印刷株式会社